
神在り世界の零龍

椋滝 秋乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神在り世界の零龍

【Nコード】

N7192V

【作者名】

椋滝 秋乃

【あらすじ】

神話に登場する神や龍が歴史上の事実として認められた世界。祖力と呼ばれるエネルギーが現代生活に幅を利かす中、現代の神を名乗る者たちによる反社会的行動が深刻な問題となっていた。

祖力研究者の見習いである青年・暮宮葉月は、卒業制作に龍の吐息を研究していた。ある日、麻薬組織の襲撃事件が発生し周囲に不穏な空気が漂う中、彼は電車の中で行き倒れていた少女を介抱する。兎季と名乗るその少女と接するうちに、葉月も自分の向き合うべきモノに気づいていく。

灰色の街に龍が舞いおりる。現代の神を喰らうべく。
MF文庫Jライトノベル新人賞一次通過作品です。

ブローグ

雨の単調な音は人の心に静寂を作る。だから、嵐の前には静けさがつきものなのかもしれない。

小さな事務所の片隅で経理の書類とにらめっこしていた男は、紙面になるべられた数字にくたびれたため息をついた。

内陸の都市の建築事務所は、なんの変哲もない田舎の弱小企業だった。だが、経理の書類の上では百万から数千万単位の数字が踊り、外見に似合った経済状況には見えない。

もちろん、それには裏がある。麻薬の密売。

どんな時代でも麻薬は法外な値段で取引されるが、取り締まりや顧客の問題が常につきまとう。

都市とはいえど、今日のような雨の日には通りから人が消えるような小さな街で商売が成立するのは、書類に記された納品先になっている宗教団体のためだった。

宗教団体に麻薬とくればきな臭いことこの上ないが、後ろ盾と顧客を同時に確保できる点で相性は抜群だった。

今日は現物を抱える日だった。納品を明日に控え、一階のガレージには末端価格にして数千万になる各種薬物が隠してある。そのせいかオフィス内の雰囲気も、どことなく張りつめていた。

男も書類をファイリングする。仕事終了だが手持無沙汰になると落ち着かなくて、引き出しから缶コーヒーを引っ張り出した。

（きっとなにも起きはしない）

タブを持ち上げながら、男は思った。ここみたいな小さな組織がどんなに警戒していたところで、ことが起きてしまえばひとたまりもない。そうならないために様々な仕事を重ねてきたのだから、今回もなにもなかった一回になるだけだ。

引き出しの奥に忍ばせたものを使うときは来やしない。それは事務所に属する全員の願望であったが、彼には小さな諦観のような気

もした。

静寂を引き裂いて嵐の始まりを告げたのは、ガラスの割れる澄んだ音だった。

皆がそつちを向く前に、オフィス全体を閃光と地震のような衝撃が駆け抜ける。男は間抜けに椅子から転げ落ち、口をつける前のコーヒーを頭からひつかぶった。

「くそつ、なんだ」

ハンマーで殴られたようにぐらつく頭を振って毒づくと、自分の声が遠かった。閃光手榴弾フラッシュバンクというやつだろう。衝撃と感じたのは炸裂の大音響。

起きないとたかをくくっていた事態が起きてしまった。

「なんだっ、マトリか？」

誰かが叫んでいるのが耳鳴りの裏側で微かに聞こえる。

マトリ 厚生労働省の麻薬取締ではない。奴らは正面から令状をたたきつけて捜査に入ってくるし、フラッシュバンクを使うこともないはずだ。それは警察も同じで、麻薬組織の小さな事務所にこんな強行突入はできないはずだ。

（じゃあ、ほんとにどこだよ？）

動転したままデスクの一番下の引き出しをひつかきまわす。こういう事態の対抗手段は一つしか用意されていない。

一際大きな破砕音に続いて、爆竹を鳴らすような散発的な銃声が響く。ガラスを破ってきた敵に仲間が発砲している。

音の嵐に首をすくめながら、それでも震える手でとりだした拳銃に弾倉を差し込んだ。粗悪だが違法輸入品としてはクスリの次くらいに有名な拳銃、その初弾を装填する。

両手で銃をしっかりと握って頭を上げようとした瞬間、仲間の拳銃とは比べ物にならない轟音がオフィスを揺るがした。悲鳴を上げる間もなく隣席の同僚がひっくり返る。撃たれた、と認識するまでたつぱり二秒を要してから腰を抜かす。

恐怖に支配される手前の体をなんとか動かして、倒れた同僚に這

い寄る。出血がない。気絶しているだけだ。

閃光手榴弾にゴム弾頭という徹底した非殺傷装備は、特殊部隊の中でも犯人逮捕を最優先にする警察関連の専売特許。

襲ってきているのがなに者なのかは分からないが、少なくとも殺されることはない。

そう思ったとき、彼は自分の手中にあった拳銃が重みを増したような気がした。ついさっきまで、これを使うような『いざ』はあり得ないと信じていた。でも、そんな幻想は壊れつつある。

従業員のほとんどは、それぞれの事情で仕方なくこの仕事にかかわっていた一般人だった。彼も仕事に嫌悪感を抱きながら、生活を守るために犯罪を続けるしかなかった。

誰かの人生を食いものに生きるなど、許されるはずがない。

（それも終わる）

殺されはしないのだから、早く終わらせてしまおう。恐怖と期待が入り混じって麻痺した思考が、指をトリガーにかけさえた。

襲撃から一分も過ぎてはいなかったが、しかし起きている仲間は半分以上に減っていた。

細々と続けられる仲間の火線の先にいたのは、たった一人だった。貫頭衣型の真っ黒なレインコートを着込み、フードを深くかぶって顔を隠している。右手には馬鹿でかいリボルバー、左手にはすらりと長い銀色の刃。コンバットナイフの三倍以上の刀身は打刀に違いない。

襲撃者は間近で跳ねまわる弾丸をもとめせずにデスクを蹴り、天井ギリギリの高さから着地の勢いにまかせて一人を斬りつける。

致死性のある武器の存在を驚きながらも、男は着地に止まった襲撃者に向けて弾丸を叩きこんでいた。爆竹のように聞こえていた銃声も間近では爆音のようで、反動が肩まで突き抜ける。

残っていた仲間も同調して発砲し、十数発の弾丸がまっすぐレインコートに突き刺さる。寸前の大気が陽炎のように歪んだ。陽炎に飛び込んだ弾丸は簡単に軌道を曲げられ、あさつてのところに銃

創を穿つ。

ワンマンシエル

（個人障壁かよ？）

祖力 意思に基づいた作用力による力場の発生を認めても、彼は引き金を引き続けた。しかし襲撃者は銃火をまったく気に留めずに、リボルバーの狙点を彼に定める。距離があっても、その銃口が自分の拳銃以上の口径を持っていることが分かった。

引き金が落ちる直前、襲撃者の脇から熊のような大男がナイフを突き立てた。ここでは数少ない純粹な暴力団系の男で、腕力には信頼が置ける。その巨体すら祖力で生成された斥力の壁に阻まれるが、はずみで照準がずれ弾丸は机上のファイルを吹き飛ばしただけだった。

大男の方も負けじと全体重をかけ、ひずむ大気に切っ先をねじ込んでいく。

襲撃者の動きが止まっている間にデスクの影に身を隠して、ポケットから小型の端末をとりだす。UMIと呼ばれるその情報端末は、誰もが持っている祖力を物理力に変換する機能を備えている。

スライド式のキーボードを引っ張りだし、震える指先でキーを押しこむ。起動させたのは二つのアプリケーション。液晶に『展開待機』の表示が出ると同時に、男は頭の奥の方が重くなったように錯覚をした。

再び頭を出すと、襲撃者と大男は数十センチの空間を挟んで力比べを続けていたが、そこに弾丸を撃ち込む仲間はいない。頭を下げているほんの数秒の間に弾丸を撃ち込まれ、昏倒させられたのだ。大男と力比べをしながらの、まさに離れ業である。

これで最後と、男はしっかりと照準をつけて引き金を引いた。UMIに流れ込んだ祖力が起動したプログラムの作用を受けて、弾丸の威力を底上げする。

規格外の威力を搭載した弾丸は障壁とぶつかり、けたたましい音をたてて突き抜けた。幸か不幸か当たりはしなかったが、襲撃者は明らかに慌てながら、いい加減にしろともいうふうに刀を振り

抜く。その切っ先はナイフを捉えただけだったが、障壁を応用した衝撃波は巨人が一撃するような勢いで大男を吹き飛ばした。

これで、戦闘が可能なのは男と襲撃者のみ。

襲撃者は思いきり踏み切ると、デスクの列を渡って真つすぐ疾つてくる。彼も銃口を持ち上げて、正面から狙いを定める。

ほんの一メートルまで距離が詰まり、二人の障壁が衝突した。両者の間で待機が歪み、まるで自動車でも受け止めたような衝撃がU・M・Iを介してフィードバックされる。明らかに力負けしていた。

朦朧とする意識を総動員して、銃口をフードの中へと定める。だが襲撃者は臆さずに、更に力をかけてきた。撃たれる前に押しつぶそうというのだが、鼻先に銃を突き付けられながら更に前傾するとはどういう神経だろう。

一歩だけ早く、引き金が落ちた。銃口から必殺の光が尾を引き、フードを貫く。

だが、外れた。外れてよかった。

意識とともに障壁の力が弱まる。白刃が祖力の壁を引き裂き、肩口へと真つすぐに叩きつけられた。痛みより先に浸透してきた力に心と身体の繋がりを遮断され、ゆったりとした浮遊感に晒される。

こんなときになって、ふと思いついたことがあった。

ほんの数年前まで実在した、とある部隊の話。普通の警察では出来ないような作戦を展開できる特権を与えられたその部隊は、特定の事件にしかかわる権限を持たない。それは麻薬犯罪などではなく、むしろ自分達の後ろ盾に関連した事件だった。

その部隊は遠の昔に消滅したはずだったが、こんな強引な作戦行動を許される部隊は他に思いつかなかった。

視界が暗転を始める向こうで、襲撃者のフードが後ろへ外れていく。

消えていく意識が最後に捉えた襲撃者の瞳は、十代後半に届かないあどけない色をしていた。

一章

『大陸神話』が他の神話とその意味を異にするのは、その舞台である戦争が歴史上の事実取材しているということだ。

まだ人々が都市を形成していかがみ合っていた遙か昔。ユーラシア大陸の片隅で二つの勢力にわかれた人間は数十年にわたる大戦争を引き起こした。

互いに滅ぶ以外に道のなかったその大戦で勇名を馳せた武人や賢者は、人を遙かに凌駕する力や神がかりな智略を称えられ、人を超越したモノたちの名を冠された。

一方の勢力にあった者は龍。

もう一方にあった者は神。

後の世に物語として再編されたその大戦争の記録は、『大陸神話』と名付けられ、人間同士の戦は文字通り『龍と神のおとぎ話』として後世に語り継がれた。

二千年後。

考古学者と文学者たちの絶え間ない努力によって歴史が整備され、『大陸神話』が人の歴史のページであることが常識となった現代を、とある歴史学者は『神在り世界』と呼んだ。

大学の研究室のような部屋の片隅で、暮宮葉月くれみや はづきはパソコンの画面とにらめっこしていた。

男子としては平均的な身長身長の青年だった。やせ気味というより不健康に分類されるような華奢な体に白衣を巻き、手入れを放棄して久しい頭を乱暴にひっかきまわしている。かろうじてまだ十代なのだが、白衣のくたびれ様と座った瞳が不要な年季を醸し出していた。一通りかきまわしてばさばさになった髪を手櫛であらうっぽく直して、元々座っている瞳に不機嫌を宿して画面に表示された数字に目を走らせる。一般人には一片たりとも理解できない数列・文字列を

一通り読み終え、ため息をついて窓の外に視線を移した。

秋も頭、大分短くなった日はすでに落ちて外は真っ暗だった。窓に残された雨の軌跡を息抜きがてらぼんやりと追いかける。数日間降りっぱなしだったせいで、こうして暇を潰すのが癖になってしまっていた。

窓の向こうに広がるのは、大学のキャンパスのような建物群だった。長方形の建物を並べたその向こうには、体育館のようなドーム型の施設も見える。だが、その実態は大学ではない。

戦技研。過疎化した地方のさらに郊外に造られたその施設は、とある業界でそう呼ばれていた。正しくは戦闘技術研究所第一実験場。業務内容は、警察や自衛隊が使用する武器の研究開発から諜報活動による情報の解析まで多岐にわたる。

葉月も条件付きながら、十代で戦技研の研究者として一席を与えられていた。もともと、正しい身分は『戦闘式術研究室』の研修生ではあるが。

葉月は暇つぶしに区切りをつけて、キーボードの脇のカップに口をつける。中身はインスタントの紅茶、砂糖はスティック三本。技術者御用達といえばコーヒーだが、葉月は紅茶好きだった。それもプロとプロもどきの差なのかもしれない。

紅茶風味の砂糖水をすりながら、再び画面をにらんで不機嫌な顔になる。高校生のころは比較的美形と評されたこともあったが、むつつりとした無愛想がそれを台無しにしていた。

「どうするかな」

膨大な文字の端から端までざっと目を通し、小さくつぶやく。彼の仕事は、一般人には一片たりとも理解できないプログラム言語を読み解き、自在に書きかえることだった。

その文章は問題なく完結していた。文法も間違っていないし、内容も最初から最後まで矛盾なく成立している。だが葉月は、未完の絵に対峙する画家のように気難しげだった。

「暮宮くん、大丈夫？」

不景気に唸り続けているのをみかねてか、隣席の先輩研究員が葉月に声をかけた。

まだ二十代前半のすらりと長身の女性で、モデルのように整った体躯に白衣をひっかけた姿は男性よりも凛々しく映る。片手にはコピー入りの紙コップを持っていた。

「杉井先輩。これ、どう思います？」

キャスター付きの椅子ごとくと、杉井と呼ばれた先輩技師もざつくりと読み解いていく。後ろでまとめられた杉井の黒髪を見ると、できの悪い作文を添削されているような落ち着きのなさを感じた。

「対重量結界　ナガシノ型障壁だね。プログラムは完成しているみたいだけど、ここらへんはいらないんじゃない？」

「やっぱり、そうですね」

そう言って杉井が示した部分は、葉月が悩みを的確にとらえていた。葉月は答えながら、一回足を投げ出して伸びをして画面に画面を眺めた。

葉月たちが扱うプログラム言語は、コンピュータに命令を与えるものではなく、人間が生来備えているエネルギーである祖力を制御するためのものだ。

祖力はそれ自体になんの物理力もない。それを物理的に作用させるには、思考や感情、あるいは陣や数式などの外的な働きかけが必要なため、従来は内的要因を励起するための詠唱や、外的な指示を書きこんだ方陣や札などによって祖力を行使していた。

それらをデジタルデータ化したのが導力数式列であり、いまでは日常生活から軍事まで様々な分野で幅を利かしていた。

葉月が今組んでいるのは防壁として作用するものの一種で、車両などの超重量を防ぐことに特化していた。元々は戦国時代、鉄砲隊が圧倒的な重量差を持つ騎馬兵を防ぐために発達したものだった。

「ナガシノ型でも、変なもんつけちゃったら無駄だね」

杉井の言葉は手厳しかったが、葉月も同じ感想を持って唸ってい

たから反感はなかった。

葉月は何度目かのため息をつく、未完のプログラムを保存してウインドウを閉じた。その肩を杉井が慰めるように軽くたたく。

「焦らない焦らない。専門学校で作ったきみの改良ナガシノ障壁を見たけど、あれは良かったよ」

葉月の本当の所属は、この研究所から遠く離れた都会にある専門学校だった。そこで作ったプログラミングが高い評価を受け、特例の研修員として戦技研に出向してきた。それが三ヶ月前のこと。

葉月は新しいウインドウを開き、キーボードを叩く。慣れたもので、誰かと会話しながらでも規則性のある数列が出来上がっていく。障壁プログラムの基本数式列が画面の半分にも達しないうちに成立するが、そこで指が止まり、あとはバックスペースが連打されて白紙に戻るだけ。

典型的な行き詰まりを見せる葉月に、脇から覗きこむ杉井も一緒になって思考を巡らせる。元々面倒見の良い性格に加えて、葉月と同じ時期に本部から出向してきたので話をする機会も多かった。

「でも、卒業製作の締め切りまで時間がないんですよ」

「だったらなおさら焦らない。よくいうでしょ、発明は」

「九十九%の努力と、1%のひらめきですね」

杉井の言葉に被せて有名な発明家が残した言葉を引用する。天才の定義を表す言葉だが、発明についてもこの名言は適用できた。つまり、一瞬のひらめきと少しの時間。

ふむ、と真つ白な画面とにらめっこしながらざっと計算してみる。提出期限は二月、就職活動をしなくていいことを加味すれば、ほとんどの時間を卒業制作にあてることができる。

（漫画家とかに比べればすごい時間だよな）

そう思えば、葉月の不機嫌な顔にも少し余裕の色が戻ってくる。

それを見てとった杉井は、もう一つ助言した。

「あとは発想の転換。きみは障壁の構築にはプライドがあるみたいだし、ナガシノ改はプロでも思いつかないような代物だったけど、

それだけにあんな高度なものはそう簡単に思いつかないよ。ちょっと障壁系から離れてみるのもいいんじゃない？」

「たとえば？」

「そうね……。そうだ、龍の吐息とかどう？」^{プレス}

『どうだ妙案でしょ』ってウインクする杉井。彼女は二十代前半で出向要請を受けるほどの才女だが、たまに子供っぽい一面を見せることがある。そういう無防備なところから、葉月は慌てて視線を反らした。

「プレスって、そんな『大陸神話』じゃないんですから」

まったく現実的ではないその意見を、葉月は遠回しに却下した。

『大陸神話』とは、神と龍の二つの陣営による世界の命運をかけた大戦争を舞台とする、欧州か西アジアで発達した古い物語である。その勇壮な世界観からエンターテイメントで題材になることも多く、日本人にも身近な一大戦史ファンタジーとなっていた。

その神話の興味深い点は、舞台となった大戦争だけでなく、登場する神や龍までもが実在する人物に取材していることである。当時勇名をはせた英雄や人智を越えた頭脳を誇った賢者は、所属した陣営によって神や龍となって神話に名を連ねた。そして、神話上の神の雷や龍の吐息なども、彼らが現実引き起こせた事象や策略が参考にされているといわれている。

かといって、神話の出来事を即現実化できるわけではないのだが。吐息っていったって、火炎放射はできませんよ」

祖力はエネルギー以外の要素を必要とする事象を、それだけで発生させることはできない。なにかに着火することはできても、炎をだすことはできないのだ。

だが杉井は、悪戯っぽく指を振った。

「そう考えてるからいけないんだよ。吐息って言われて炎なんて短絡的に思うようじゃ、いかんねえ」

「ならどうすればいいんですか？」

「そこを自分で考えるんだよ」

先輩技師はポンポンと葉月の頭を軽く叩いてから、自分の仕事に戻っていった。彼女がここに出向になったのは、ある新プログラムの開発を統率するため、本人の仕事も多忙を極めているはずだ。それを感じさせない軽いフットワークは、あまり年の離れていない彼女のプロ意識を感じさせる。

葉月は内心で頭を下げてから、白紙の画面に数列を刻み込む作業を再開した。

特になにか思いついたわけではなく、作り始めたのは研究員として割り当てられた仕事だった。杉井がリーダーになっっている開発プロジェクトには葉月も関わらせてもらっていた。研修の立場に合った簡単な部分の割り当てだったので、他のことを考える余裕もある。龍の吐息とはまったく考えていなかった。事実を元に行っているのだから、吐息でも、プログラムとして組むだけならできる物も多い。しかし効率や実用性から無用な物と切り捨てていた。

だが、やってやれないこともないのも事実。

（たかだか専門学校の卒業製作だ）

誰かが実際に使うわけではないのだから、気楽にやれば十分かもしれない。杉井はそれを伝える意味でも龍の吐息を提案したのだろう。

まったく違うプログラムを画面上に作りながら、葉月は軽くなった思考を構築していく。

（やっぱり吐息っていうなら噴射だよな。でも熱線や雷は、大気を考えるとなんか難しいか）

図らずも楽しくなってきた思考を広げながら、戦技研の仕事も着々と形を成していった。

相変わらず降り続く雨のカーテンを押し分けるように、二両編成の鈍行列車はゆっくりと進む。

葉月は扉脇の二人がけの座席を独占しながら、手のひらサイズの携帯端末を覗きこんでいた。

思ったより仕事の方がサクサク進んで没頭してしまい、つい研究所を出るのが遅くなってしまった。そのため、郊外まで唯一伸びているこの路線にも葉月以外の乗客の姿はない。

葉月の覗きこむ携帯端末はUMI Universal Ma
na Interfaceと呼ばれる類のものだった。元々はスマートフォンだったものに導力数式列を扱う能力を付加したもので、葉月たちの研究しているプログラムはもっぱらUMIで実行される戦闘プログラムで民間に出回っているのは、防犯用の個人障壁程度だが。

葉月のそれは特に、機体のほとんどを液晶で占めるタッチパネルタイプの最新型で、折りたたみやスライド式だった従来品とは比べ物にならないほど薄くて軽い。戦技研からの支給品だ。

機体の大部分を占める画面には深夜ニュースが投影されている。ゴールデンタイムはすでに終わっていて、どのチャンネルも同じようなニュース番組が一日のまとめを放送している。一日中狭い研究室に缶詰めになっている葉月にとって、その日の出来事を総復習してくれる夜のニュースはとても有意義なものだった。もっとも内容はほとんど把握しておらず、イヤホンから流れる音声をぼんやりと聞き流しているだけだった。

良案はまだ見つかっていなかった。自然現象や物理現象を励起するだけではつまらないし、相応しい威力を得ることもできない。かといって実用的なものに頼ると、従来品のコピー以外にならなかった。

思いつく限りの現象をしらみつぶしにすることに没頭していた葉月だったが、不意に流れ込んできたワードには気付いた。思考が現実引き戻され、そのまま視線を固定していたUMIの画面へと意識が向けられる。

それなりの画質の画面には男女二人のキャスターが並んでいる。その手前には事件の見出しが挿入しされていた。

『宗教施設強制捜査。現神との関係は？』

女性キャスターが事件のあらましを淡々と説明していくが、葉月が気を向け続けているのはテロップの中の一言だった。その言葉を見ると、葉月の不景気で根暗な色の瞳は、危険物の塊のような冷酷な色を纏う。

現神。それは、水準を遥かに超えた祖力を反社会的行動に振るう重犯罪者の俗称である。三十年ほど前、人並み外れた祖力を持った犯罪者が『現神』と名乗ったのを発端として、大陸神話に登場し実在した古い神々に対比した現代の神様　現神という言葉は瞬く間に波及した。

そういいた経緯もあり、いまでは警察や公安でも手を焼くほどの祖力を持った犯罪者は現神とラベリングされるようになり、葉月が生まれたころには現神事件というカテゴリーがすでに存在していた。現神事件は宗教や暴力団といった組織犯罪と結びつきながら、複雑化の一途をたどっている。

つい数日前にも、近辺の街で麻薬密売の組織が襲撃される事件が起きていた。世間的には暴力団同士の抗争と片づけられたが、本当は現神につながっていた組織をどこかの部隊が急襲した、というのが真相。

ものの二分程度で現神関連のニュースは終わってしまったが、葉月はなんの興味を含まなくなった画面を、凍てついた瞳のまま睨み続けていた。感情と思考がまぜこぜになって、なにか煮え切らないものがとぐろを巻くような感触を、葉月はいつも持て余す。

だから、その後に続いた外国のニュースまで観ることができた。内容としてはどうということはない。中東でテロが発生し、駐留していた大国の軍隊がその鎮圧に乗り出したということ。しかし、葉月にとっては大ヒントになる物が一瞬だけ映り込んでいた。

それは一両の戦車だった。現地には数両しか配備されない最新型で、その分厚い装甲の下には最高の電子機器を満載し、数十トンの巨体は通常のエンジンに加えて大出力の祖力増幅器で運用される。

葉月はその砲身に着目した。発射管制から砲弾加速までを祖力に

よって行つ精密戦車砲は、龍の大口にみえなくもない。

その発見には、天使にキスをされたかのような感動があつた。

葉月は戦車に関する知識と、それに関係する導力数式列を脳内に広げる。そして一つ一つを試行するが、火器管制から発射に至るまでいまいち使えそうなプログラムは見つからない。

数分の熟考の後、ひらめいた。かかつていた霞が一気に晴れ渡り、不景気な無愛想にも小さな笑みが浮かぶ。

自分のひらめきを早く確かめたくて、はやる心でUMIを操る。テレビを閉じてインターネットに接続。戦技研の研究員用の入り口から研究員用のデータベースにアクセスし、膨大な戦技・兵器のデータから一つをピックアップ。その原理とプログラムを読み解くと、ひらめきが確信に変わった。

そのプログラムをダウンロードしているうちに、電車は小さな駅に停車した。戦技研の近辺は農業大学があるため広大な耕地と畜産場が広がっており、駅も農大前と耕地に一つあるだけで、夜中になると乗客はほとんどない。

炭酸飲料を開けるような音を立てて扉が開き、湿気と雨音が流れ込む。

珍しく、乗客があつた。

雨音にまぎれて音もなく乗り込んできたのは、小さな影法師だつた。少なくともダウンロードに夢中になっていた葉月には、なにかの影が車内に映つた程度に見えていた。

発車の勢いで影がよるめき、雨粒が床に落ちる。影のように見えたのは漆黒のレインコートを着ているからで、フードを深くかぶつた顔はわからない。大人物のレインコートもだぶついているようだった。

（農大生か？）

乗車駅と外見からはそう考えるのが妥当だが、こんな時間に秋野菜の様子でも見に来たのだろうか。

この車両の乗客は葉月とレインコートだけになっていた。

もうしばらくすると、比較的大きな街に出る。葉月はそこに部屋を借りて住んでいた。

ダウンロードの終わったプログラムをメール添付して自室のパソコンに送り、UMIをポケットに押し込む。ついでに時間も確認、下車まで大体五分。

隣席を占拠していたバッグを肩にかけ、席を立つて扉の前へ行く。と、レインコートを着た影法師と並んで立つことになる。

並んでみてわかったことだが、このもう一人の乗客は初見で感じたよりまた一回りくらい背が低かった。中学生くらいの身長だが、背の低い大学生もいないわけではない。

横目で影法師を観察していた葉月は、レインコートの下で肩が異様な頻度で上下していることに気がついた。耳を澄ますと、電車のモーター音にまぎれて荒い息使いが聞こえる。

（風邪でもひいてるのか？）

それもあり重症だろう。こんな雨の中に畑の様子を見に行く体調ではない。

（真面目なのか馬鹿なのか）

農大生だと決めつけていた葉月はその程度に思いながら、減速を始めた電車の慣性に対抗して軽く足に力をこめた。

対して、影法師は慣性に引かれるままつんのめり、どうにか手すりにつかまって体を支えていた。雨粒が滴ってできた水たまりが足元に広がっている。

そこで、葉月は小さな違和感を感じた。レインコートの裾からは水滴が床に落ち続けている。なら、まだレインコートには大量の水がついているはずなのに、それがまったく見られなかったのだ。まるで濡いた裾から水滴が落ちているような現象のタネは、専門家の葉月にとっては簡単に明かせるものだった。

葉月は農大生という認識を一変させた。そのレインコートに使われている技術は、戦技研でもここ数年で実用化された最新技術の一つだったのだ。電車がホームに入り減速を深める一方で、葉月の発

見は疑問となつて加速していた。その最新技術を配備しているのはまだ警察や自衛隊でもほとんどなかったはずで、まして農大生が着ているなどあり得ない。

ついに電車は葉月の下車駅に停車した。気の抜ける音で扉が開くとき影法師を盗み見る。下車する気配はなかった。

（俺には関係ないか）

そんな物騒な輩に目をつけられるようなことをした記憶はない。たまたま出くわしただけ。ただの偶然だろう。

都会では考えられないくらいに広い隙間をまたぎ、誰もいないホームに立った。最低限の光源で照らしだされたホームは、耕地の駅と違って質素な天井がついている。電車が走り出す前に、葉月は薄暗い構内を歩きだした。

だが、数歩進んだところで足を止め今まで乗っていた電車を振りかえた。思惟のない行為だったが、それが結果として意味を生む。停車した時と同じ音で閉まる扉の前に、レインコートが立っていた。降りた気配はなく、車窓の光に浮き上がるその姿は本物の影にしか見えなかった。

向かい合う二人の後ろで電車が動き出し、ホームをすり抜けていく。ほんの数秒で電車は構内を完全に通り抜けていった。

残ったのは電車が走り抜けたあとの突風のみ。それがレインコートの裾をはためかし

風に引かれるままに、影はホームに倒れ込んだ。

羽矢間^{はやま}兔季^{とぎ}が目を覚ますと、見慣れない天井が広がっていた。

十代半ばの幼さなげな顔立ちと短い髪があいまって、どこか悪戯小僧のような雰囲気纏っているが、微熱に紅潮する頬と荒い息が活発さを潜ませている。

奥の方で鈍く痛む頭を無理やり働かせ、兔季は体調の把握に努めた。体は金属のように重く、頭の回転も自覚出来るほどに遅い。鼻もつまっていて息苦しいし、風邪をひいていることは疑いようがな

かった。

目だけ動かして周囲を見回すと、マンション一室らしい六畳一間の簡素な部屋が目に入ってきた。自分が寝かされているパイプベッドの他には、背の低いタンスとその上に置かれた小さなテレビ、妙に散らかったテーブルぐらいいしかない。部屋全体が灰色で薄暗く感じられるのは、雨天の昼にカーテンを引いているからだ。

（捕まった、かな？）

身につけていたはずの頼もしい武器は、目の届く範囲には見当たらなかった。レインコートもその下に着ていたボディアーマーもはがされ、インナーと短パン姿。肌着にされていないだけマシな状態だった。

武装解除された自分にできることは、動かない体を横たえているだけ。外国での訓練から帰還して早々、初任務で敵に捕まるとはついていない。

記憶をたどってみたが、脈絡をつかめたのは人気のない駅で電車に乗ったところまでだった。そこからどうなったのかはまったく覚えていない。調子が悪くて朦朧としていたとはいえ、ひどい失態だ。しばらく休むと少しだけ体力が戻ってきた。苦労して鉛のような上半身を起こす。

空き缶やペットボトルの散らかったテーブルには、一台のノートパソコンと同機種のUMI二台が無造作に置かれている。そのUMIの片方は自分のもので、もう一台とケーブルで繋がられてなにか作業をしている。情報を盗もうとしているのかもしれないが、そういう事態にも備えてUMIに機密情報は入っていない。

なにか武器になりそうなものも見当たらなかった。あったところでそれを扱う体が動作不良だから、ないよりはましな程度だが。

力なく体を倒す。ぱたんと軽い音を立てて硬いベッドに背中が跳ねた。

その音が聞こえたのか、部屋の隅にあったドアから一人の青年が姿を見せた。その後ろにはキッチンが見える。

見た目は二十代前半くらいだった。もう少し若いかもしれない。適当になでつけた髪にそれなりの美形だったが、不機嫌を張り付けたような表情のどこかたびれた印象が不要な年季を醸し出す。

「起きたか？」

低い声で青年は訊いた。敵意のようなものを含んでいるようには思えなかったが、それは彼が敵ではない証明にはならない。兎季はなにも答えなかった。

たっぷり間をおいてから、青年はため息をついて、次の質問を口にした。

「具合はどうだ？」

「……」

「どこか痛いところとかあるか？」

「……」

「腹減ってないか？」

「……」

「話せないのか？」

「……」

根気よく語りかけてくる彼に、兎季は沈黙を守った。なにを訊かれても答えるつもりはなかった。捕まったとき一番大事なものは相手に情報を与えないことだし、挑発と受け取ってペースを崩してくれば儲けもの。

しかし、彼は特に気を悪くした様子もなく、キッチンへ引っ込んだ。

そんな様子を見て、さすがの兎季も少し不安になった。

（ひょっとして、僕はひどい間違いをしているんじゃない）

単純に彼は善意の人で、どこかで意識を失った自分を助けてくれただけではなからうか。記憶がはつきりしないからなんとも言えないが、そんな気もしてきていた。第一敵なら、拘束されていないのは不自然だった。

少しして青年は再び姿を見せた。その手には、真っ白い湯気をあ

げる片手なべ。

「粥作ったが、食うか？」

扱い方のわからない子供に話しかけるような戸惑った口調に、兔季は真面目に沈黙する自分がばからしくなって、身を起こして小さく頷いた。やっと返ってきた反応に、青年はどこか安心したようだった。

「ちよつと待て」

彼は小鍋をテーブルに置くと、一回キッチンに戻ってお盆と茶碗を持ってきた。茶碗にお粥を盛ると、お盆の上にふたを開けた佃煮とスプーンと一緒に配置する。それを兔季の前に差し出す。

「あ、ありがとう」

受け取るとき、ついに言葉が口をついた。なにか言われるかと思ったが、青年は「ああ」と答えただけだった。

濃厚な湯気をあげる粥を一すくいして口へ入れる。かなり熱かったが、やけどするほどではなかった。なんの味もしなかったので、次は佃煮を混ぜる。不思議と食欲はあった。

その間に彼はタンスから薬箱を引っ張りだすと、中から風邪薬の箱を選び、枕元に放りなげた。何かのカードと一緒に。

兔季は膝の上のお盆に茶碗を置くと、そのカードを手にとった。

『戦闘技術研究所戦闘式術研究室 暮宮葉月』

身分証明と一緒に顔写真が載っていた。手入れを放棄した髪に不機嫌なむっつり顔。外見に反し、まだぎりぎり十代だった。

「水は、ここに置いておくぞ」

ミネラルウォーターのペットボトルを持ってきた顔と、その写真は同じ。

「同業者？」

兔季はカードと青年の顔を比べながら言った。

お粥を食べ終わって薬を飲んでから、兔季は葉月というその青年からことのあらましを説明された。

自分がこの街の駅で倒れたこと。たまたま居合わせた葉月が自分を担いで部屋まで連れてきたこと。こっちの素性を察してどこにも連絡はいれていないということ。それからすでに半日過ぎているということ。

兎季はこの青年を、全面的ではないにしろ信用することにした。話の筋は通っているし、IDカードも本物。戦技研の研究員は機密にかかわる機会も多くなるため、厳しい背景調査をされているはずだった。

ちなみに、すべてを説明してくれた葉月に対し、兎季は自分の所属については明かしていない。警察関連の捜査官ということにしておいた。どう見ても十代にしか見えない兎季を警察の捜査官と信じるのは難しいはずだが、葉月は追及しなかった。

「よく僕がこちら側の人間だって気付きましたね？」

「それは、光学迷彩のレインコート着てればな」

「光学迷彩？」

「戦技研でも最近やっと実用化した技術だ。多方向から祖力を干渉させると、角度によって一定の可視光が発生する。それを利用してコートの表面にスクリーンを作る。表面に付いた雨粒が見えなかったのもそのためだ」

理系の性なのか、なぜか原理まで懇切丁寧に説明してくれた。文系の兎季にはさっぱりわからない内容だったが、まさか任務に就く直前で支給された雨合羽にそんな機能がついていたとは。

「もつとも透明化にはほど遠い。普通なら定点観測のカモフラージュや闇夜の尾行とかに使う装備だ」

遠回しに使い方が間違っていたことも指摘される。そのような機能がついていたことすら知らなかったのだから仕方がないが、これは使い方によっては一対一でも有用な戦力になるだろう。

「まだ実戦配備がほとんどされていない装備だったから、君もそういう機密性の高い部署だと踏んだ。だから国家機関よりもうちに運び込んだ」

葉月は兎季の食べ終わったお盆をもって、キッチンへと一度ひっこむ。

兎季はこの判断に救われた。いま相手にしているものの影響力を考えると、病院どころか現地の警察すらあやうい。

洗い物をしていたのか、しばらくして葉月は戻ってくると、タンズに寄りかかって座った。彼の部屋なのにベッドを占領しているのが少し申し訳なく感じた。

「それで、僕の装備はどこに？」

少し間をおいて、状況確認の質問を再開した。武装は兎季にとって生命線。早く所在を掴んでおきたかったが、開口一番に武器の話題を出すのは、彼を警戒させてしまうかと少し訊くのを待っていた。葉月が武装を離れたのは、彼が自分から身を守るためであるわけだし。

葉月は完全に忘れていたように言った。

「ああ、あれなら風呂場に押し込んである」

「風呂場……」

予想通りといえば予想通りだった。武器のように相手に持たれて困るものは、そこから出来る限り離れたところに保管する。だが、錆びたらどうしてくれるのだ。

「なんだ？ トイレの方が良かったか？」

「……そっちでいいです」

ジョークなのだろうが、もしここで変なことを言えば現実になるような気がした。

UMIのことも訊くと、兎季のUMIはシステムダウンを起こしていたらしい。最新型のミリタリー改造型ゆえにバグがまだ多く、こまめなアップデートを怠ると致命的な障害が出ることがあるらしい。今は葉月のUMIとつないで復旧作業中。

一通り知リたかったことを聞き終わり、兎季はベッドに倒れ込んだ。兎季が危惧していたような事態は何一つ起きてはいなかった。葉月はただの善意の第三者で、分野はちがえど同じ世界の住人。

そして、彼を巻き込む前に本隊と連絡を取って、姿を消さなければいけないこと。

すると、今度は葉月が言った。

「こつちもいくつか訊きたいことがあるが、いいか？」

「あ、はい、答えられることなら」

そう返しながら、自分に答えられることはほとんどないこともわかっていった。機密性の高い部署と推測したのだから、彼もそんなことはわかってはいるはずだ。

しかし葉月は、遠回しな言葉で一息に核心をついた。

「大物は釣れそうか？」

ばね仕掛けのように跳ね起きた兎季に、葉月は自分の推測が正しかったことを確信した。

兎季が、いや、兎季の所属しているチームがしているのは、釣りだ。餌は目の前の少年本人、獲物はおそらく宗教系の組織。それも、ヤクザから地元の病院や警察まで幅広い影響力を持つ大物。

「簡単な推理だよ」

豆鉄砲をくらった鳩のような顔をしている兎季に、葉月はさつきまでと同じように一から説明を始める

まず兎季の防護装備が一般的な衣服のデザインだったこと。光学迷彩のレインコートではなく、その下に着ていたボディアーマーは真つ黒いコートとスラックスにデザインされていた。衝撃吸収剤を防弾繊維でサンドイッチにした生地は、薄手でもかなりの耐久性がある。コートの下に着るシャツにも、薄手の防弾ジャケットが仕込んであるという徹底した防御能力。

「麻薬取締官の囹捜査や内偵なんかがよく使っている装備だよな」
兎季もそれらと同じく、囹の役目を負っているとみて間違いない。次に武器だ。彼が身に着けていた武器は、刀が一振りに大振りなコンバットナイフが二本、弾の切れた五十口径リボルバーとフラッシュバンクが数個。

現代戦において刀剣を用いることは珍しいことではなかった。最近是小口径の銃弾でも個人障壁を貫くことが出来るようになったが、祖力をぶつけて障壁をこじ開けて近接武器で致命傷を与える場面が減ったわけではない。むしろ、民間から戦場まで個人障壁が一般的になった現在では、障壁を貫通して威力を減らしてしまう銃器より効果的という考えもある。

「ついでにいえばあの五十口径も、障壁を貫通しても十分な威力が残るように開発されたものだ」

特に強固な個人障壁を貫通するには、大口径強壮弾を撃てる拳銃が必要になる。兎季のリボルバー・ベアハウンドも、祖力防御した敵に有効打を与えるために製造された銃だった。

ここまで対祖力防御の武器に特化している理由は、葉月には一つしか思い付かない。

「君の敵は、現神だな？」

葉月の瞳がスツと細くなり、鋭利な光を帯びる。けだるげで不機嫌そうながら親切な面しか見ていなかった兎季は、気圧されるように身を縮めた。

「君はたぶん四日前の麻薬系の暴力団襲撃の実行者だ。目的は麻薬摘発ではなく、その後ろにある宗教集団『矜持の宇宙』に圧力をかけること」

『矜持の宇宙』は表向きなんの問題もなく存在している宗教団体で、地域密着型の布教で近年信者を増やしている。しかし、その裏側では都市伝説というには現実味のある黒い噂も流れている。

曰く、巷で話題の連続失踪の首謀者。曰く、地元のチンピラの資金源。曰く、現神を何人か抱え込んでいる。曰く、信者を麻薬漬けにして荒稼ぎしている。

「弾が切れた銃を抱えているってことは、事があってからどこも連絡をとってないってことだ。泳いで、囷をしているんだろっ？」

兎季はなにも言わない。言えるはずがないのはわかっている。だが、葉月は自分の考えで間違いないと確信していた。

葉月が鋭い視線を向け続けていると、兎季は絞り出すように言った。

「仮に、仮にですが、その通りだったら、どうしますか？」

仮にと言っているが、これは肯定と捉えていいだろう。

葉月は一息間を持ってから、雰囲気たっぷりに告げた。

「殺す」

そのあとの兎季の慌て様は、無愛想な葉月でさえつい笑いをもらしてしまうものだった。やっと慣れ始めた飼い主に裏切られた子犬のようにになると、ベッドの隅に小さくなって震え始めた。

鎌をかけて見事に引つかかってくれたのはよかったが、これは少しやりすぎたか？

「冗談だ、冗談」

「その目で冗談って言われても説得力ないんですが……」

怯えた目で言われえて、葉月は自分の目もとに指をやった。不機嫌とか無愛想とか言われたことはあったが、怖い目をしているというのは少しショック。葉月は、現神を話題に出したときに現れる陰悪な視線を自覚していなかった。

「とにかく、なにもしないから安心しろ」

こつも怯えられると、なにか悪いことしたみたいではないか。いや、実際タチの悪い鎌をかけたが。兎季は、隅に小さくなったまま疑念を含有した視線を外さず、警戒した動作で布団を引き寄せている。

葉月は最近増え始めたため息をついた。知らず、目もいつもの不機嫌そうなものに戻る。

「信じないなら信じないでいい。俺はなにもしない。いざとなったら君の方が強いだろうし」

それは間違いなかった。いくら光学迷彩を装備していたからとはいえ、どうみても年下で少女のように華奢な少年が、捜査官だとか暴力団事務所に踏み込んだとか到底納得できない。

武器の使用感なども納得する要素になったが、一番はUMIの処

理祖力の許容量の設定だった。

一般人仕様の四倍。祖力の実質的な威力は、相対的な倍率の二乗に比例して増加する。単純計算、兎季は十六人の一般人とともに力比べができる、現神でもそうはいない祖力の持ち主だ。

（現神に対抗する超現神級の祖力。さしずめ龍といったところか）
風邪で弱っているとはいえ、兎季に比べればまだまだ一般人である葉月など敵うわけがなかった。

わかってくれたのか、のろのろとベッドに横になる兎季。まだ疑念の目は残っているが、さっきよりはずっと痛くはなかった。一先ず安心。

それから、と葉月は背中になっているタンスを親指で示した。

「あと、着替えたかったらタンスの中のもの適当に出して着ていい」
サイズは明らかに合わないが、ジャージぐらいなら問題ないだろう。

すると兎季は、顔に微熱以外の赤を増して言った。

「では、なにかジャージのようなものを」

「ああ、わかった」

葉月は背にしていたタンスから黒のジャージを引っ張り出した。それを枕元に放ってやる。しかし、兎季は赤くした顔で視線を右往左往させるだけで、ジャージには手を伸ばそうともしない。

「特に不潔ってことはないはずだ」

そういう態度を取られると結構傷つくのだが。しかし、兎季はおろおろと首を振った。どうやら清潔さに不満はないようだ。

「じゃあなんだ？ 男どうし、特に気にするものもないだろう？」

「男どうし？」

兎季はきょとんとしてオウム返しすると、なにか重大な事実に気づいたように目を見開いた。対して葉月は、自分が致命的な勘違いをしているのにまったく気付かず、頭上に「？」を浮かべている。仕方なく、兎季は悪戯を告白するような気不味い調子で告げた。

「僕、女なんですけど……」

……。

「……は？」

目の前の彼、もとい彼女をたつぷり凝視してから、葉月は数年ぶりの間抜け面を晒した。

雨で人通りの絶えた灰色の路地に、その男は一人立っていた。

灰色のレインコートを纏った体躯を巨岩のように錯覚するのは、格闘技に通じているのが容易にわかる広い肩幅のためだ。レインコートに下に隠された均整のとれた肉体は、体重で動きを鈍らせるような筋肉ダルマとは一線を画する。フードからのぞく容貌は四十路を越えて久しい彫りの深い強面で、古傷のように刻まれた皺が威圧感を放っていた。

まるで武神像の彫刻。

その目線の先にあるのは、少女連れ込んだ青年の部屋だった。

鋭い視線を投げかけてはいるが、そこに敵意の色は混じっていない。「まったく、よりもよってそこに辿りつくなよ」

言葉が出てくると、威圧感の強い顔に中間管理職の悲哀さが含まれた。疲れ切った声は雨音にかき消されて響かない。

（駅についたら護衛につけとは言われたが、そこじゃ手出しできん）男もまた、兎季と同じ国家機関の捜査官だった。初任務に就く彼女を監察し、影からバックアップするのが彼の仕事。

強力な祖力を持ち相応の訓練を受けていようと、未成年である兎季を実働させるのは色々問題が付きまとう。だから、実戦で使い物になるかを監査し、もしならないようなら助けに入るてはずになっていた。

だが、自分が合流する前に不測の事態が起きてしまえばどうしようもない。兎季を待ちうけていた彼が遭遇したのは、彼女を背負った目つきの悪い青年だった。男は一目でその青年の出自を見抜いたが、それ故に手が出せなくなってしまった。

そのせいで、定期的に位置を変えながら部屋を眺めて、一晚を過

ごしていた。

（作戦中に風邪をひいたらどうしてくれる）

芯まで冷えそうな体はU M Iで祖力を熱に変えて温めているが、それはただでさえ張り込みで消耗する精神力をさらに酷使するわけ。

状況報告は深夜のうちに済ましておいたし、いい加減次の沙汰があってもいいだろう。

そうしてしばらく観察を続けていると、不意に懷でU M Iが振動した。取り出してみると自分の直属の上司からの着信。

（やっとか）

辟易としながら、通話をタッチして耳元に機体を当てると、少年のような場違いに陽気な声が鼓膜を打った。

『やっほー、黒岩くん。元気してた？』

「おかげさんで風邪ひきそくだ。ついでに緊張感も台無しだよ、隊長」

男 黒岩はまったく上司を敬っていない口調で答えた。年齢も上司の方がずっと下なのだが、技量面では上司と認めているだけにこういうお気楽さは反応に困る。

「で、どうすればいい？」

『点鐘同盟を通してセーフハウスを確保したから、そっちで僕と合流して。兎季ちゃんについては待機命令で、あそこにおいておくよ。その方が安全だし』

チームが行っている作戦の最終目標は宗教集団『矜持の宇宙』の壊滅であるが、強力な組織を殲撃するためには相応の手土産が必要になる。その手土産を得るため、やつらの資金源である薬物の提供元を強襲した。

あとは尻尾を出すまで適度にプレッシャーを与えるのが兎季の任務だったが、あの娘に待機命令ということは、その役目は黒岩に回ってくるということだ。

そこまでは納得して、腑に落ちないことが一つ。

「…………隊長」

要件を伝え終えて通話を切ろうとする上司を、黒岩は低い声で呼びとめた。

『なんだい？』

「どこまでがあんたの考えなんだ？　あの男は」

『この状況はあくまでも可能性が生んだ偶然。あり得ないとは思わなかったけど到底おこりえるとは思えない。そういう事態だよ。じゃ、地図は送るから』

そう言っただけで逃げるように通話が切られ、すぐに地図が添付されたメールが届いた。

「結局、はぐらかされただけか」

黒岩はいかつい顔に渋面を作ると、地図を一瞥してからUMIをしまった。そして歩き出す。

どうせセーフハウスで合流するのだから、訊きたいことはそこで訊けばいい。

歩きだしたらそれきり、黒岩は二人のいるマンションを振り返らなかつた。

二章

日曜の夜中のコンビニで、二人の技術者が顔を合わせていた。

「あれ、暮宮？」

横から突然声をかけられ、葉月は片手に持っていたカップ麺をとり落とした。中腰で値札と相談していた目を移すと、半ばあきれ顔の杉井が腰に手を当てて見下ろしていた。

「杉井先輩？ こんな時間にコンビニですか？」

戦技研のメンバーは大半が同じ街に住んでいるため、どこかで顔を合わせることは特に珍しいことではないのだが、葉月はそそくさとカップ麺を棚に戻した。

二人とも勤務中とは違うラフな格好で、ジーンズによれよれのＴシャツという組み合わせまで同じ。彼ら技術者は興味のないことはとことん無頓着になるため、ファッションは大体ひどいものだったが、葉月が落ち着きを失ったのはそれが恥ずかしかったわけではない。

「あたしがコンビニにいちやいけない？」

「いえ、最近物騒ですから」

墓穴を掘る前に葉月は平静を装って立ちあがった。夜中のコンビニ特有の所在なげな空気を、流行りの曲がマドラーのようにゆっくりにかきまわす。

「隣町の話だけど、ヤクザどうしの抗争もあつたしね」

「……そうですね。夜の一人歩きに注意してくださいね」

表向きはヤクザの抗争として片づけられた事件の真相は、もちろん杉井も知っている。事務所に踏み込んだ当事者と関わりになっている葉月は心の中で苦笑した。

「Ｔシステム、早く実用化できればいいけどね」

「僕の割り当て分はこの二日間で提出しておきました」

「もう見たよ。あれでいいと思う。あとはわたし次第か」

「システムとは戦闘式術研究室の研究員が分担して製作中の新型戦技プログラムで、そのリーダーとなるために杉井は出向してきていた。全員のパートが出そろって彼女の調整が終われば、デバックを残すのみになる。」

「もう全部出揃ったってことは、僕が最後だったんですか……」

「ちなみに、切まであと二日あったのだが、葉月は早めに出したつもりだった。それで他の研究員に自慢しようと思っていたのだが、やはり相手はその道のプロ集団というわけだ。」

「まあ、これで明日の夕方にはデバックに入れるよ。明後日にはとりあえずのスペックを発表できる」

「かなり日程が前倒せますね」

「うん。まあ、間に合わせてみせるよ」

言葉の後半の意味はわからなかったが、杉井は小さくピースサインを作るくらい機嫌がよさそうだったので追求しなかった。スレンダーな彼女の魅力は、女性に免疫のないインドア派の葉月には扱いづらいものである。ちなみに葉月は同居中のちっこいのは女性に見えていなかった。

それから、杉井はなにか不思議なものを見る目で葉月の隣を示した。

「ところで、そちらは誰かな？」

「え？」

示された方を見ると、リスのように頬を膨らました兔季が葉月のシャツの袖をつまんでいた。一緒に買いだしに来て自分の夜食を選びにわかれていたのだが、いつから袖を掴まれていたのか葉月はまったく気付かなかった。

（どう説明しようか）

本当のことが言えるわけがない。パツと思いつくような、たとえば彼女だとか嘘をつこうにも、恋人関係には間違っても見えない。

合理的な答えを導き出す前に、杉井が禁句を口にした。

「えっと、弟くん？」

「妹です！」

噛みつくように兎季がわめくと、店内の時間が止まったような空白が生まれた。何事かとこっちを見る店員に曖昧な表情を送ってから、葉月は兎季のアドリブを慌てて引き継いだ。

「えっと、学校が休みになって、ちよつと遊びに来たんですよ」

「この時期に休みの中学校って珍しいわね」

「ああと、創立記念日とかいるんなのが重なったんですよ、はい」
苦しい言いわけなのを自覚しても、それくらいしか思いつかなかった。元々真つ赤な嘘なのだから、論理的に完結できるわけがない。それでも、兎季のフォローがあれば、まだなんとかなるはずだった。

「な？ 兎季」

「そうですね、その通りです」

「おまえ……」

兎季がわざと投げやりに答えたせいで、葉月は冷や汗ものだ。もう少し協力的になれよ、と内心で毒づく。

（騙せたか？）

恐る恐る杉井を見ると、まったく騙されていないよ、という意地の悪い笑みを浮かべていた。

「ま、中学生くらいには、ずる休みしてお兄ちゃんに甘えたいときだってあるよ」

葉月の懸念をよそに、杉井は一人で納得して兎季の頭をポンポンと軽く叩くように撫でた。迷惑そうに「むー」と唸っているのに構わず、そのままくしゃくしゃとショートヘアを撫でまわす。

「や、やめてくださいー」

「ははっ、つかわいくてね」

杉井の魔の手から抜け出し、兎季は涙目でくしゃくしゃになった髪を手で整える。

（こっちの方が姉妹っぽいな）

無責任な感想を抱きつつ、そろそろ杉井から離れるべきだと判断する。あまり兎季のことを覚えられても面倒だ。

「それじゃ、僕は帰らせていただきます。行くぞ」
「うん」

途端に兎季は調子よく頷き、はやくはやくと袖を引つ張った。なんとなく天敵から逃げ出す小動物のような動作に見えたが、そんなに頭をなでられるのが嫌だったのか。

杉井もモデルのような細面に人懐っこい笑顔を浮かべて手を振った。

「また明日、研究室で。兎季ちゃんも元気でねー」

「また明日。おやすみなさい」

葉月は一礼すると、いそいそと手を引く兎季に引つ張られるままレジへと歩いて行った。

二人が支払いを済ませて店を出るのを見届けてから、杉井は缶コーヒーだけを買って、二人を追うようにコンビニを出た。自動ドアを抜けて屋外に出れば、つい昨日まで降っていた雨の水気を含んだ、ぬめりような空気が頬を撫でる。少し視線をさまよわせると、少ない街灯の下を駆け抜けていく二人乗りの自転車が見えた。

「兄妹、ねえ」

別れ際とは似ても似つかない、まるで新しい玩具を見つけた子供のような光を目に宿して、自分のUMIを取り出す。戦技研支給の新型ではなく、スライド式キーボードを内蔵した一世代前の機体だった。番号を手で打ち込んで、相手呼び出す。

「あ、もしもし。うん、接触した。兄妹のふりをしてる。とりあえず行確を続けるよ。は？ 冗談。あんな化け物と戦えるわけないじゃない。無茶言うな、こっちは一技術者ってことになってるんだ」

まくしたてるような口調とは裏腹に、表情はやはり楽しげだった。これから起きることが荒事だとわかっていながら、それを期待する意地の悪い微笑。それは技術者よりも、悪役を演じる女優のような妖しさを含んでいた。

「当分は監視と諜報だけ続けるよ。そっちが本分だからね。じゃ、

また連絡する」

通話を切り、コンビニの脇に停めておいたスクーターにまたがる。街乗りで目立たないようにと排気量も抑えたぼろぼろの中古車だったが、彼女も気に入っていた。安物のヘルメットをかぶりながら、杉井は二人の消えていった方向を眺めて呟く。

「技術者稼業も悪くないけど、こっちのほうはやっぱり性にあつてる。さて、依頼料分のお仕事をさせてもらいましょかね」

UMIからスクーターの出力補助プログラムを起動し、エンジンをかける。ないに等しい排気量でもいい音をだしてふけるのは、杉井の整備のたまものだった。

祖力で馬力を上乗せして、監視対象のマンションに先回りする道を走りだした。

湿度の高い空気を切り裂いて、二人乗りの自転車は夜の街を駆け抜ける。

後部の荷台に腰かけた兎季は、一定のサイクルで上下する葉月の背中に体を預けて通り過ぎていく街灯を数えていた。ちなみに自転車を漕いでいるのは葉月だが、スプロケットを動かしているのはほとんどUMIを通して作用している兎季の祖力だった。普段はペダルを軽くするための一般用補助プログラムだが、兎季がその気になればバイク並の速度を出すこともできる。

葉月に拾われたのは、まだ一昨日のことだった。目を覚ましたのが昨日のことだから、実質彼と過ごしたのは二日。体調は薬が効いたのかすでに快調で、兎季としてはすぐに葉月の元から姿を消すつもりだった。だが、今朝方復旧したUMIで部隊の隊長にお伺いを立てると、どういうわけか一週間の待機命令が出てしまった。

そこで彼の身分照会を依頼したところ

『その人は全面的に信頼して大丈夫だよ。機密は話しちゃいけないけど、敵ってことは絶対ないから』

とのこと。のほほんとしてはいるが、仕事は誰よりもこなし

ている彼のことだから、葉月は信頼できるということでもいいのだらう。

というわけで、目下最大の課題は生活必需品の調達になった。衣服や一定の物品は葉月でもなんとかしたできたが、下着など男子ではどうしようもない物は自分で仕入れるしかない。そのためにコンビニまで、顔が割れていないのを強みに細心の注意をはらって買いだしに来たのだった。

しかしながら、葉月の職場の先輩に会ってしまうというのは予定外だった。

（きれいな人だったなー）

杉井と呼ばれていたその先輩のことを思いだし、兎季は素直にそう思った。

と、同時になんとなく危険な香りも感じていた。一挙手一投足に注意を払われている、見透かされているような感触。だが危機感を逆なでされるような嫌な感じではなかったため判断がつきかねた。

だが、それだけが彼女から遠ざかりたかった理由ではなかった。

「暮宮さん」

「ん？」

「杉井さんって、きれいな人ですね」

「そうだな」

葉月の表情はわからないが、無愛想な声に小さな温かみが宿るのを確かに感じ取ると、兎季はやっぱ面白くない。さっき葉月の袖に掴まっていたのだって、彼が他の女性と親しくしているのが何故か気に食わなかったからだった。

そんなことを知るはずもなく、葉月は機嫌よさげに言った。

「そういえば、妹ってアドリブよかったぞ」

「あ、どうも」

「それ、これからも使つか」

「え？」

「誰かに訊かれたら、兄妹って口裏を合わせるのも、悪くないんじ

やないか？」

楽しいな葉月の提案に兎季は一度、彼に聞こえないように小さく「兄さん」と呟いた。首筋がかゆくなるような気がしたが、新鮮な響きが心地よかった。

「いいですね。賛成です、兄さん！」

回していた腕に力をこめて、運転の邪魔にならないように葉月の背中を抱きしめる。兎季も普通なら中学三年生、青い春に恋する年頃。雨がやめばまだ残暑の残り香が感じられる夜と、二人乗りの自転車。設定が恋人ではなかったり、自転車を走らせている力の提供のほとんどが自分だったり、思い描く青春とは少し違う部分もあったが、ご機嫌な兎季には些細なことだった。

対して、軽いペダルを軽快に回す葉月は、どこか感慨深げだった。

「兄さん、か」

「お兄ちゃんの方がいいですか？」

「……兄さんでいい。いや、そんなふうに呼ばれる日が来るなんて思ってたからな」

「一人っ子なんですか？」

「まあ、な」

地雷だったかな、と心配したが、葉月は特に変わらない調子で続けた。

「あんまり家族の記憶がないんで、こういうのは想像がつかなかったんだ」

一緒にいたのは昨日今日だったが、葉月のお家事情が普通でないことは兎季もなんとなく気づいていた。これまでの葉月との会話には、ほとんど家族に関するキーワードが登場しなかった。それに気づけたのは、兎季自身と同じだったから。

「僕も、ですよ。兄さんなんて誰かを呼ぶ日が来るなんて、思いもしませんでした」

「そっか」

おそらく葉月も同じように兎季のことを感じ取っていたはずで、

だから互いに踏み込むような真似はしなかった。

「短い間だが、楽しい兄妹でいられば、いいな」

そう、互いに一週間だけの関係だ。その間だけ有効な家族関係なんて仮初めのもの。だからこそ、本当の兄妹を知らない者どうし、楽しくやれる部分もあればいいと思う。

答える代わりに、兎季はそつと葉月の背中に頬を寄せた。無地のＴシャツを通して触れるぬくもりに感覚を預けると、彼の動悸が聞こえてくるようだった。

シャワーから吐き出された雫が体の凹凸をなぞる。葉月の部屋はユニットバスでこそなかったが、浴室はかなり手狭で小柄な兎季でも若干窮屈に感じた。

すでに兄妹という設定を決めてから二日、葉月と出会ってから四日が過ぎた。

四日間の共同生活で、いくつかわかったこともあった。

一つ目は、彼には兄弟どころか肉親がないこと。母親は彼が生まれた直後に病死し、父親も五年前に事故死したそうだ。それから父の同僚が後見人になってくれて、なんとか生きてこられたという。

二つ目に、態度にも如実に表れていたように現神事件に対して関心が高いこと。情報収集も積極的に行っており、彼のノートパソコンにストックされている情報は個人ジャーナリストと比べても遜色ない。点鐘同盟という国家機関から情報を得ている兎季から見ても十分な質と量だと思えた。

三つ目に、武器や兵器に関する知識が深いこと。いくら戦技研の研究員であるとしても、彼の専門は祖力系のプログラミングである導力数式列。最低限の知識があるくらいならまだしも、門外漢でありながら武器の扱いでは専門家である兎季と正面から語れるのは異常に感じられた。

一体彼は何者なのだろう？ 分野はちがえど同じ業界で働く、ち

よつとオタクだけど面倒見のいい青年、と片づけていいのだから。
シャンプーの泡を短めの髪から洗い流す。すると、白い肌の上を
涙滴のように水がなぞっていくのが自然と目に入った。

来年の春からは高校生というのに、まだ男女の分化がほとんどな
い平坦なスタイル。体質もあるのだが、成長期に祖力を戦闘訓練に
費やしたために若干成長が遅れているようだ。

（これだよ、原因）

シャワーの音に隠して嘆息する。

初日に男子と間違えられたのもそうだが、それから葉月はあま
り兎季を女と意識していない節があった。たとえば彼は風呂上りに
パンツ一枚で平然と歩きまわるし、脱衣所がないから廊下で着替え
ている兎季と出くわしても気にとめる様子がない。一方的に騒いで
も馬鹿らしいので兎季も平常を装っていたが、ここまで意識されな
いとけなしの自信すらなくしてくる。

シャワーを止めて、ドアにかけておいたバスタオルで全身をふき、
廊下に出て着替える。部屋着は葉月が調達してきたジャージだ。

暗い廊下を通って部屋に戻ると、小さなテーブルに向かう葉月の
背中があった。

「出たか。調子は悪くないか？」

「はい」

兎季を見向きもしないぶつきらばうな物言いだが、これが葉月の
普通であることはすでにわかっていた。

兎季は冷蔵庫から水の入った飲みかけのボトルを取り出し、キャ
ップを開けながら葉月の対面に腰を下ろした。

うつすら曇りだしたボトルの冷たさが心地よかった。中身はただ
のミネラルウォーターだが、風呂上りの冷えた飲み物はまた格別。

葉月はノートパソコンを食い入るように睨みながら、ああでもな
いこうでもないと思っている。

特にやることもないのでテレビの電源を入れたと、ちょうど『大
陸神話』の特集が組まれていた。人気というだけで引っ張り出され

た芸人司会者と物知り顔^{インテリ}芸能人が、中学生程度の世界史で騒いでいた。あほらしいと思うのもあほらしくて、兎季は自分の知識を頭の中に広げながら、トークより何倍もおもしろいVTRを眺めていた。『大陸神話』は龍と神の戦いを描いたお伽噺だが、戦争という舞台設定から登場キャラクターにいたるまでほとんどを歴史に取材している。それとよく似た神話体系を持つ国があるとすれば、それは日本だろう。事実日本神話には他の神話に類を見ないほどの神が存在し、第二次大戦に敗戦するまでは神の系譜を引く人間　現人神である天皇が統治者として祭り上げられていた。そのため日本神話と『大陸神話』は様々な恣意的解釈を伴いながら、今の日本人の宗教観に大きな影響を与えている。

日本神話が神さまの伝承のため、日本での『大陸神話』の扱いもほとんどが神を中心に解釈されている。強大な力を持った人間が現神を名乗って社会の暗部から出てきたのも、そういった背景の元だと考えられている。もともと、今では現神は強い力を持った犯罪者に自動的につけられる名前であり、その様体も『大陸神話』とも日本神話とも関係ない組織犯罪で傭兵の役割を演じることがほとんどになっていた。

そして、それを喰らう龍となるべく、兎季たちがいる。

現神に対して思索を巡らしていると、やはり気になったのはディスプレイと格闘中のオタク兄（仮）であった。彼に対する様々な疑問の根っこには、現神がなにか影響していると兎季は漠然と感じていた。

テーブルを挟んだ対面でノートパソコンに向かう葉月を眺めていると、彼はその視線に気づいて気難しげな表情をもちあげる。「なんだ？」

すでに慣れたが、この年中無休の無愛想な声はどうにかならんだろうか。

兎季はなんでもない、と首を振ろうとしてから、質問してみることにした。

「なにやつてるんですか？」

口裏を合わせるために決めた『兄妹設定』は、表向きな場面だけ有効でいいのだが、『兄さん』という響きが新鮮だったので、兎季は慣れることも兼ねて普段からそう呼ぶようにしていた。

葉月はちよつとだけ自慢げに答えた。

「龍の吐息を組んでる」

聞いた途端に、兎季は目を輝かせた。彼女のU M Iには多種多様な戦技系のプログラムがインストールされているが、龍の吐息といえるような派手で高威力なものはない。

「見せてください！」

「いや導力数式列読めないだろ？」

「ちよつと使ってみるんですよ！」

「借家に大穴でもあける気か」

目をきらきらさせながら言う、軽く小突かれた。

先ほどの疑問はどこへやら、兎季は葉月の組んでいる導力数式列に心を奪われた。戦技系のプログラムの大部分は一般人用に行われているため、兎季のような強大な祖力を前提としたプログラムを作っているというのは非常に魅力的だった。しかも龍の吐息とは、神を中心に考えられている中で現神と対峙する自分にふさわしい気がして、使うわけでもないのに心が躍った。

しかしながら製作は行き詰っているらしく、葉月は画面に視線を戻して眉間のしわの数を増やす。

「第一完成してない。祖力を高密度で相手にぶつけるプロセスは出来たんだが、肝心な何に祖力を変換するかが決まらないんだ」

つまり、銃と薬きょうは作ったのだが、弾頭をどうするのか決まっていない状態。弾頭の選択いかんによって銃の威力が決まるように、なにをぶつけるかによって吐息の命が決まる。

兎季も思考に参加する。もし自分がそのプログラムを使うなら何を発射出来たらかっこいいか、イメージを膨らませていく。

あくまでかっこいいかどうかを重視したため、案はすぐに浮かん

できた。

「電気とかどうですか？ 応用の幅は広そうですね」

「応用って電磁兵器とかか？ 確かに電気への変化はU M Iの充電とかに使われてるが、攻撃に使えるほどっていうと空気の抵抗が壁になる」

そのあと、大気の絶縁性の高さとか雷の落ちる原理だとかくどくどと説明され、なぜかついでにレールガンとコイルガンの原理の違いや実用性の差まで講習を受ける羽目になった。

（これだから理系は）

一通り聞き終わってから、文系を自負する兎季は辟易とため息をついた。つまり無理ってことなのだから、それだけ伝えれば十分なの。

「じゃあ、王道で炎とかは？」

「なにを燃焼させるんだ？ ガスボンベでも持ち歩けば不可能じゃないけど」

よく言われることだが、祖力はなんでもありの魔法ではなく、ちゃんと論理だった物理の領域にあるものだ。なんでもできるような万能性の対岸で、不可能なことも多々ある。しかしその方面には素人の兎季には、どこまで出来てどこから出来ないのか、その境界が判然としないのだ。

「じゃあ、光線は？」

葉月は、ふむ、と今度はなにか熟考する。どうやらない線を行ったらしい。

「ただの光子じゃ威力がないな。ならレーザー、は有効だが、効果が出るまでに時間がかかるし、特に派手ってこともないな。なら線は」

ブツブツと危ない人のように、兎季にはさっぱりわからない言葉を唱えた拳句、却下。

しかし、葉月は自分で言っていたことになにか引っかけかり、あごに手をあてて唸りだした。しばしおいて、正解にたどりついたよう

に柏手をうつ。

「アフターバーナーだ」

「アフターバーナー？」

「ああ、戦闘機の加速手段だ。どうして気付かなかったんだ」

ネタが降ってきた作家のように活力をみなぎらせる葉月の対面で、
兎季は首をひねるだけだった。

アフターバーナーそのものは知っている。高熱の排気に燃料を噴射することで瞬発力をえる推進装置だ。最新の方式では、祖力を利用して作ったプラズマをフレミングの左手の法則で噴射して加速を得る。

それが、吐息？

兎季の疑問をよそに、葉月は止まっていた手を高速で動かした。締め切り直前の作家がタイピングの限界に挑戦するような鮮やかな手際だった。

対して兎季は飼い主に無視された犬のようにつまらなげなくびをして、テレビに視線を戻した。『大陸神話』の特集は続いており、内容は滅多にスポットの当たらない龍の話題にシフトしていた。

実際の物語中で主人公として扱われるのは、むしろ龍のほうだった。そのため『大陸神話』には主人公サイドとして多様で魅力的な龍が多数登場するが、その中でも中心的な役割を果たすのが、零龍フェアフィアと悪戯龍トリックスターという二人の龍だった。零龍は元々戦うための力である吐息を持たない穏健な龍だったが、神の侵攻に際して仲間を守るために武装して神との戦いに臨んだ。悪戯龍も神に対抗するための戦術や武器を造る参謀兼職人であり、吐息を持たなかった零龍とともに戦場を駆け、彼に吐息を与えた。

ちなみに、フェアフィアやトリックスターといった名称は、『大陸神話』が世界各地で訳されるうちに様々な神話や物語の用語があてられてきた結果で、他にも天呑狼龍フェンリルや天熾神セラフイムまで登場する。

そんなうちくを頭の中でまじえながらテレビを観ていると、唐突に葉月は言った。

「これが完成したら、零龍の吐息って名前にするかな」

(テレビ聴いてたんだ)

完全にプログラム作成に集中して、他のことなんか頭に入っていないようにみえていたが、案外周囲に気を配ってはいるらしい。

「じゃあ兄さんは悪戯龍ですか？」

「それも悪くない」

悪戯龍にももちろんモチーフは存在する。今で言うところの導力数式列である導力陣の製作者がそれにあたり、神話に龍として記されるほどの職人の名を持ちだされるのは、葉月も嬉しそうだ。

そこでもわかるように、葉月の導力数式列に対する熱意は並ではない。最初の二日間で仕事のプログラムを組んでいるときでも、製作に無我夢中となることが多々あった。どうしてそこまで仕事に熱中できるだろう？

それ以前に、彼はどうして導力数式列を自分の職に選んだのだろうか？ まともにプログラミングができるようになるには、それだけ特化した進路を進まなければいけないはずだ。未来を一本に決めた理由は、なんだったのだろうか？

会話の流れからでもいい機会だったし、思い切って兎季は訊いてみた。

「兄さんはどうして、プログラミングを職にきめたんですか？」

「即戦力だからだ」

即答えが返ってきたことすら予想外だったのだが、それから続いた説明はいつもにまして簡潔で明快だった。

葉月には兄弟も両親がない。経済的な援助は父の同僚から得ていたとはいえ、その目的もなく大学に通って勉強している余裕はなく、ただでさえ善意で助けてくれるその同僚さんに長々と迷惑はかけられなかった。

最短距離で経済的に自立するためには、見合った戦力が必要だったということ。

「学科の教養なら最低限あればいい。だから、すぐに使える技術が

ほしかった」

葉月は導力数式列を構築するスピードをまったく落とさずに、淡々と説明を続けた。

たまたま目にとまったのがプログラミングだった。UMIはすでに生活必需品だし、それに使われるプログラムは日々進化している。需要は絶えずある上に、プログラミングには肉体的な要素は必要ないから、時間をかけて体づくりをする必要もない。

言葉を覚えてしまえば、必要なのは物理の教養と多少の数学。それから発想力の問題で、独学で言語を覚えて専門学校で実績をつければ就職もそう難しくない。

「強いて言えば、体育と国語が苦手で、数学が得意だったからだな」つまり、国語が得意なら大学に入って勉強していたかもしれないし、体育が得意ならなにかスポーツの技術を磨いていたかもしれないということだ。

しかし、氷解した疑問の一方で、合理一辺倒で決めたプログラミングになぜそこまで熱中できるのかという疑問はさらに重さを増した。

それを指摘すると、葉月は手を止めて不器用に笑った。妙案が浮かんで上機嫌な今以外だったら、そんな表情は見られなかっただろう。

「まあ、性にあつてたのも事実だな。考えるのは好きだ」

「それって、妄想癖があるんですか？」

「失礼なことをいうな」

そして小突かれる。兎季も笑顔だった。

ちよつとだけ、オタクだけど面倒見のいい青年の本当の姿が垣間見られたような気がした。逆境を抱えながらも、それを受け止めて追い風に変えようと努力している彼だから、今は順風満帆なのだろう。それは、尊敬に値する『兄』の姿だったかもしれない。

だからだろうか。次の彼の言葉は、少し暖かくなっていた兎季の心の奥に深く突き刺さった。

「それをいうなら、お前はなんでその年でドンパチやってるんだよ？」

言ってから、葉月は『しまった』という顔をした。訓練で人質のマーカーを撃ち抜いてしまったような、そんな顔だと思った。

凍りついた笑顔とともに内面も急激に冷めていくのを自覚しながら、兎季は一言だけ漏らした。

「たぶん、兄さんと同じだと思います」

大分間を持ってから、葉月は呟くように言った。

「……すまん」

これまでよりずっと饒舌だった二人は、それきりなにも語れなかった。

三章

忍び寄る危機には目をつむり、響く悲劇には耳をふさぐ。彼女にできたのは、暗闇に膝を抱えてただ恐怖が過ぎ去るのを待つことだけだった。

彼女が最後の砦としたのは、小さなクローゼットのすみっこだった。そこで息を殺し、死神に気付かれないことを祈るだけ。

決壊しようとする感情の堤防を理性で抑えつければ、それだけ心臓が脈打ち、その鼓動すら死神に聞こえてしまわないかと抑えつけ軋みをあげる。

暴れようとする感情の手綱を必死に握りしめて、それでも涙は静かに頬を伝った。

大声をあげて泣きたかった。でも、それは絶対できなかった。涙に伴う嗚咽すら、彼女は飲みくだしつづけた。

『いたか？』

近いのか遠いのかわからないところから死神の声が聞こえた。思いだしてみれば、その男の声は落ち着きを欠いていたのだが、彼女からすべての動きを奪うには十分な威力があった。

違う声が応じる。死神は二人組だった。

『いや、こっちはいない』

『親の死体は積み込んだ。あとは一人娘だけだ』

親の死体、という言葉に彼女の体は震えた。自分ではどうしようもない、いわば条件反射のような反応だったが、それが命取りとなった。

ズボンのポケットからこぼれた箱が、クローゼットの床と重い音を響かせた。慌てて拾って胸元に抱くが、その衣擦れすら彼女には大きく聞こえた。

『おい』

『ああ』

その音を聞きつけ、足音がこちらに向いた。やり取りが短いのは相手も緊張しているからだだったが、それがそのときの彼女にわかるはずもない。

幸か不幸か彼女が両親の死に目に逢うことはなく、逸した機会が二度と巡ってくることはなかった。それでも、いや、だからこそだったのか、彼女はよく耐えた。

しかし、それも限界だった。痛みを訴えるほどの脈動を抑える気力すら、彼女には残されていなかった。

もれだしたすすり泣きを止めることはできなかったが、彼女は片手で鼻を拭きながら、箱型の機械を力強く握りしめた。大人にとっては手のひらサイズだったが、幼い彼女にとってはちよつとだけ手に余っている。

U M I。何が起こるか分からない、と父に教え込まれていたから、使い方はよく知っていた。もう二度と聞くことはできない父の優しい声を思いだしながら電源を入れ、護身用の障壁プログラムを設定する。あとは力を流し込むだけ。

死神の声は聞こえなかった。床の軋みが微振動となって彼女の体と精神を揺さぶった。

すぐそこ。すでにノブには手がかけられ、ゆつくりと扉が開く。光が差し込みながらゆつくり広がっていく。

暴れ出した恐怖を叫びながら、彼女は両手を突き出した。

次の朝、二人の間に会話はほとんどなかった。葉月は自分の放った言葉を悔いていてなにも言えなかったようだし、兎季も自分の態度で彼に気を使わせていることに負い目を感じた。

葉月はさっさと朝食を用意して平らげると、そそくさ出勤してしまった。

薄暗い一人ぼっちの部屋で、兎季は床に寝ころんで天井を眺めていた。普段は葉月が帰ってくるまで、体がなまらないようにトレーニングなどをしているのだが、そんな意欲はどこからも湧いては来

なかった。

「なんでこんなところで、じっとしてるんだろっね」

こぼしてみても返ってくる言葉は当然、ない。

何故隊長は自分に待機命令を出したのだろう？ 葉月の推理通り、今自分たちの部隊がしているのは釣りだ。兎季は獲物をおびき寄せる撒き餌であり、頑丈な針を抱えた疑似餌である。

捕まっては元も子もないが、それでも魚の興味を引くぐらいには危険を冒す必要があり、元はそういう陽動が兎季の主任務だったはずだ。それが一変して、近い業界の者とはいえ一般人宅での待機。自分のふがいなさを目の前にいない上司に転嫁しても仕方がなかったが、そうでもないと言っていらなかった。

葉月についても、まだわからないことが多い。特に現神に対する関心の理由についてはさっぱりだ。だが、無愛想でも優しくて、逆境でも懸命に生きている彼の近くに自分がいることは、ひどく不釣り合いだった。

こういう思考は、自分らしくない。

（ああもう、何のために三年間も訓練受けたと思ってるの）

寝がえりをうって視界を横に移すと、タンスの最下段があった。

このタンスは一段が小さい引き出しと大きい引き出しから出来ている。思えば、最下段の小さい引き出しは開けたことがなかった。

特に止められていたわけではなかったので、兎季はそつと手を伸ばした。八方ふさがりの思考に風穴をあける突破口がほしかった。

中身は、黒塗りの金属の箱だった。かなり大きな長方形で、厚みもゆうに一〇センチはある。持ち上げてみると、コンクリートブロックのようなずっしりとした重みがかかってきた。四けたのダイヤル式の鍵が中身を守っている。

試しに自分の誕生日にダイヤルを合わせてみたが、鍵はびくともなかった。当たり前なのだが、不機嫌な兎季にはそれが気に食わなかった。

（なんとしてでも、開けてやる）

それから半日、兎季は思いつく限りの四けたの数字を飲まず食わずで試し続けた。

そのころ、葉月も仕事が手に付かないで、戦技研のデスクに身を投げ出していた。

結局、朝はろくな謝罪の言葉が思いつかず、それが葉月の心を重くしている。

急な仕事があればすこしでも気が紛れたかもしれないが、最近はずく早く帰るために当面の仕事は片付けてしまっていたため、暇そうにうなだれている葉月を咎める者はいなかった。

兎季の素性についても、彼は薄々感づいていた。伊達に現神に関する資料を集めまくっているわけではない。集めた事件の一つ一つに、気になる少女の存在があった。葉月はそれが兎季であると確信していた。

そして、その事件のあとに彼女が歩んだのであろう人生も。それがわかるからこそ、昨夜の軽率な自分の発言が重くのしかかっていた。

陰鬱に頭をデスクに投げ出していると、普段は真面目な葉月のだらけ具合を見かねて、神妙な顔つきの杉井が葉月に声をかけた。

「どうしたの？ 恋人と喧嘩でもした？」

「それと似たようなものです」

「ああ、兎季ちゃんとか。そりゃご愁傷様」

杉井はまた一人で納得すると、デスクに置いたままの頭の横に大容量のスポーツバックを置いた。

「兵装科からきみにだって。中身は見えないけど、なんに使うの？」

「え？ あ、卒業制作の参考にちよつと」

「ふうん」

葉月は跳ね起きると、適当に言葉をつくりながらスポーツバックを足元に押し込んだ。たぶん中身は兎季への武器弾薬の補給だ。彼女の上司が手を回したのだろう。

途端に慌てだした葉月に眉をひそめる杉井には、別の話題を提供した。

「そ、そういえば、Ｔシステムは順調みたいですね」

杉井主導で進められている新プログラムの名前を出すと、彼女はにつこりと笑って顔を近づけた。モデルのような美貌の接近にドキツとする葉月に構わず、耳元に吹き込む。

「ここだけの話、ほぼ採用決定。Ｐタイプのボディアーマー仕様だけど、威力は十分」

「そそ、そうですか。それは、よかった」

息がかかるむずかゆさに真っ赤になった耳を隠して、葉月は思った通りのことを口にした。ごく一部分とはいえ自分が関わった作品が世に出ようとしているのは、技術者としてやはり嬉しいものだった。

「あとはモーション提供用のサーバー確保だけど、ＰＳＸのパターンストレージほど複雑じゃないから、ＵＭＩの容量だけでもかなり動けるよ」

「そういえば、ＰＳＸはもうロールアウトですか？」

「データベースとの接続試験は終わって、実験場のテスト運用だとほぼ目標スペックを満たしてる。今晚には自衛隊に移送だってさ」

二人の話に出てきたＰＳＸとは、次世代の現神対策として開発中の新兵器で、葉月の記憶ではまだ試作段階だったはず。着々と進歩していく技術を体感できるのも、戦技研の研究委員ならではなかった。しかし、あんなＳＦじみた武器が実装されるなんて」

「仕方ないよ。もう神に喰らいつける龍は、いないんだからさ」

肩をすくめる杉井の言葉に、葉月は無愛想の中に苦い物を滲ませた。部屋に置いてきてしまった少女のことを思い出したせいだけではなかった。

葉月の表情の機微に気付いたのかどうか、杉井は上機嫌な調子を崩さないまま隣のデスクに着いて、最後にアドバイスを付け足した。「喧嘩ならちゃんと謝ってから、おいしいものでも食べさせてあげ

なよ。きつと解決するからさ」

自室の玄関をくぐるなり、葉月は違和感に眉をひそめた。

廊下に設置されたキッチンの流し台に、朝洗って片付けておいたはずのフライパンが置かれていた。フライパンに張られた水面では、炭化してぼろぼろになった米粒が洗剤の泡に捕まって浮いている。目を凝らすと底にも黒いものがこびりついていて、水切りカゴの中には、水滴のびっしりついたボールやら包丁やらが押し込まれている。確信じみた嫌な予感が胸をよぎるが、とりあえず錆びたら困るので包丁の水気だけ拭き取っておいた。

それから、恐る恐るといった足取りで部屋にむかう。注意してみると、少し焦げ臭いような気がした。

ドアを開けると、やっぱりというかなんというか、予想した通りの光景があった。

二つの皿が並んだテーブルと、その向こうに肩を縮めて小柄な体をさらに小さくしている兎季。皿の上には、黒が大部分を占めるなにかが盛りつけてある。

帰宅する道中、どうやって兎季に話しかけようか考えていたが、この状況はまったく想定していなかった。

「なんだ、これは？」

この切り出し方をするのもまったく考えていなかったが、いくつか思いついていた候補よりずっとやりやすかった。

兎季はうつむいて、消えそうな声で言った。

「炒飯、の失敗です」

それはわかる。慣れない料理に四苦八苦した結果であることは疑いようがない。少なくとも成功ではないことも。

「その……お詫びと、お礼、のつもりでした」

更に小さくなる兎季に、葉月は先手をうたれた気分だった。謝るべきなのは自分のはずなのに、先に謝られてしまった。

葉月もバツが悪くなって、頭を下げた。

「昨日は、その、俺も悪かった」

そう言いながら食卓に着き、黒こげだらけの炒飯を一口含む。途端に砂を嚙んだような不快な歯触りにおそわれる。香ばしすぎるに
おいと、火を通し過ぎているにもかかわらずなぜか感じる湿っぽさ。
苦いだけの味。すべてにおいて最悪。

「うああっ」

失礼だとわかっていたが、声を抑えることはできなかった。焦げ
ているのになぜ微妙に湿っているのか、そこが一番不可解だ。先輩
には美味しい物でも食べさせるといわれたが、不味いものを食べてや
るというのは仲直りの手段になるのだろうか。

人はどこまで小さくなれるのかその限界に挑戦するように、炭職
人は一段としおれた。

「焦げちゃったので、水を入れれば温度が下がるかと」

「焼き魚を凍らせたなら刺身に戻りました、なんて話は聞いたことが
ないが」

「ごめんなさい……」

もう気の毒なくらいに小さくなる兎季の姿に、葉月は、また言い
過ぎた、と反省した。

「ま、まあ、おこげみたいなものか」

全然違う、と自分でつつこみながら、無理やり行きすぎたおこげ
の塊を詰め込む。嚙むたびに少なくともお米が立っているとは思え
ない、いびつな音が頭の中まで響いた。いやいやと痙攣する胃袋を
無理やり抑えこんで、砕いた炭を腹に落とす。ついで水で軽く口を
すすいで、喉にこびりついた粉っぽさを洗い流した。

それをあと二回ほど我慢してやっと、皿は空になった。

「ごちそうさま」

「そんな真っ青になってまで食べなくてもいいのに」

「試行錯誤はすべての基本だ。次うまくいけばいい」

葉月なりの精いっぱいフォローだったが、兎季は浮かない顔の
まま、自分の分をぼりぼりと食べていた。何度か戻しそうな声をも

らしながら、葉月と同じく真っ青な顔になって食べきる。

皿を片づけてしまったら、また昨日と同じように会話が消えてしまった。なんとかしなければいけないと葉月も感じているのだが、テーブルの反対側でうつむいている兎季を見ると、何を言っているのかわからなかった。

そんな風に一時間か二時間かすぎたころ、兎季が、かすれた声で呟いた。

「ごめんなさい」

昨日の件かと思い、こっちも謝罪を口にしようとして、葉月は言葉詰まらせた。

兎季が、テーブルの下に隠してあった黒塗りの箱を取り出したのだ。

葉月は思いがけない品の登場に呆気にとられる一方で、兎季がすべてを理解したであろうことを悟った。タンスの最下段に隠してあったはずのその箱には、葉月の秘密を氷解させるすべてが詰まっている。

兎季は四桁の番号を数字に鍵を合わせる。数字が揃うと、ドアノブが回るような音がして鍵が外れる。誰の誕生日でもないその数字が何を意味するのか、兎季ならわかるはずだ。

分厚い蓋を持ち上げた中であつたのは、常識外れの大きさの拳銃と、旧式のUMIだった。

レンガを組み合わせたような、無骨で巨大なリボルバー。兎季のベアハウンドよりもさらにひとまわり大きく、こぶしほどの五連装シリンダーには冗談のような大きさの弾丸が装てんされている。レーザー照準器を内蔵したバレルには、その銃の名前が刻まれていた。『Cali75 Gravity Error』

七十五口径グラビティ・エラー。拳銃どころか設置型の機関銃よりも二回り大きい銃口。拳銃では五十口径が破格と言われるのだから、これは悪い冗談にしか聞こえない。

対現神用に数丁だけ試作されたが、そのオーバーキルな破壊力と

扱いにくさからベアハウンドに立場をとられた幻の拳銃で、弾丸さえも今となってはほとんど残っていない。無数の傷が勲章のように刻まれた、紛れもない実銃だった。帯銃が禁止されている日本の一般家庭にそんな物がある時点でおかしいのだが、兎季が衝撃を受けたのはそこではない。

「この番号はある部隊の隊長の識別コード、その下四けたと同じです。そして、これと同じ銃を使っていた前隊長は、五年前に殉職しました」

兎季はなにか悪い夢でも見ているかのように呟いた。しかし、その隊に所属している彼女だからこそ、それが真実だと実感しているはず。

葉月は、乾いた声で肯定した。

「ああ、その通りだ。俺の親父は、高天機関の戦術部隊、ニースヘッグ神喰い龍の前隊長だよ」

あっさりとした肯定を受け止めて、兎季は自分の中のすべての疑問が音を立てて解かれていくのを感じた。

神喰い龍。現神事件の激化に伴って十五年前に設立された、非公式の捜査チームの俗称だ。元々は公安部の一つの部署だったが、のちの点鐘同盟となる官民一緒けたの情報ネットワークの構築や独自の指揮系統の確立、外科的手段に訴えることができる戦術部隊の設置と、数年もしないうちに高天機関という独立した組織になっていた。神喰い龍の名は主力の戦術部隊に引き継がれ、現神事件 特に祖力の高い現神との直接戦闘に長けた部隊作りをしていた。

嫌な記憶を思い出すように、葉月は苦々しげに言った。

「親父は神喰い龍と一緒に、死んだ」

だが、その主力部隊にも敵わない敵があった。五年前、神喰い龍は偽の情報に食いつき、想定外の反撃にあってほぼ全滅した。そのとき失われた人材とノウハウの希少さゆえにチームは解体され、生き残った構成員は高天機関の別部署や警察に散ったとされている。

そして当時最大の損失といわれたのが、部隊の設立から対現神戦セオリーの確立に尽力した隊長、寒蟬智^{ひんせんち}だった。それが、葉月の父親だというのだ。暮宮^{きくみやう}というのは母方の姓だということで、そつちを名乗っているのはいらぬ危険を回避するためだという。

事件への関心の高さは、彼の現神への敵意の表れだったのである。こまめな情報収集は敵を知る基本中の基本だ。未解決事件の被害者遺族が、事件の経過を知るために新聞を切り抜くのと同じ。

いや、もしかしたらそれ以上の意味を持っていたのかもしれない。それはつまり

「復讐、ですか？」

武器にも造詣が深いのは、そういうことではないのだろうか。

葉月は珍しく、はつきりとした苦笑いを浮かべた。

「親父が死んで一年くらいは、そんなことも考えていたな。せつかく親父の銃とUMIを届けてくれたんだから、それで何かしようとか、ぶつ飛んだことも考えたこともあった。けど、あきらめた。情報収集はそのときの情性だよ」

嘘だ、と兎季は直感した。理性の上では彼の言う通りかもしれないが、感情の上では納得していない。そんなことは、集められた情報の質を見れば一目瞭然だった。現神が話題に出たときの鋭く冷たい瞳が、彼の中に燃え切れていない復讐の炎があることをなにより雄弁に語っている。彼がプログラミングにみせる異常な熱意も、そこから来ていると考えれば納得できることだった。

戦技系のアプリケーションの多くは現在、対現神戦で幅を利かせている。直接手を出すことを諦めた葉月は、心のどこかでそのくすぶる敵意を、戦技製作への意欲に転換しているのではないだろうか。無愛想だけど優しく、ちょっとオタクだけど熱意にあふれた青年は、その中に冷たい闇を抱えていた。そしてそれが、今の彼を動かしている燃料になっている。

兎季は初めて、ここにはいけない理由を彼の方に感じた。

明後日、自分はここを出ていく。それは戦いになるということだ。

そのとき、彼はそんなことをまったく気にせずに、一週間兄妹のふりをしただけの厄介者として放り出してくれるだろうか？

決まっている。彼は絶対そんなことはできない。

どうするか対策を考え始めた先を制し、葉月が言った。

「俺も、お前に訊きたいことがある。羽矢間兔季、いや、石常^{せきつね}兔季」

ぎよつとなつて、葉月を見た。その反応を見て葉月は、自分の過去に踏み込まれたときには見せなかった悲しげな色を瞳に刷いた。

彼が口にしたのは、自分でも数年ぶりに耳にする、自分の本名だった。

「お前は六年前の、弁護士殺人事件で誘拐された、石常弁護士の娘だな？」

兔季の傷をえぐることを承知で、葉月は言った。自分の素性を見抜かれたときよりずっと喉の奥が渴いている。

その事件は、葉月の集めた現神事件のデータの中でも、一際目立つた事件だった。

六年前、とある宗教団体の不正を追っていた弁護士が、その団体に殺された事件。当初は一家三人の失踪として片づけられていたが、唯一事件性を視野に入れていた高天機関だけが真相を掴むことができた。警察が捜査を始めるより早く一人娘の誘拐に気付いた神喰い龍は、すぐさま相応な打撃を与えて少女を救出した。もちろん表側ではすべて警察の手柄になったし、その娘の行方は闇の中だ。

概要だけでいえば平凡なその事件には、その一人娘だけを生かしたことに疑問が残った。当時の世相は獵奇的な理由や教義上の問題を取りざたして、現神や新興宗教への恐怖を励起しただけに終わった。

でもその娘が、目の前で呆然としている少女と同一人物するなら、すべてに説明がついた。

葉月は、一言を噛みしめるように言葉を重ねた。

「お前は両親を殺されながら、その力ゆえに生かされた。そして、

救出後も、その祖力を悪用されないように存在を隠されていたんだ」
当時の資料を大量に集めていた葉月は、話題の中心にいるはずの少女の行方が気持ち悪いほど表に出てこないことに気付いていた。大部分の人間は事件の特異性の報道ばかりに耳をそばだてていて、誰も少女の行方など気にかけないまま、じきに事件は風化していった。

火種を隠すために大火事を演出するような情報操作だ。

だが現在、兎季の運命は敵味方が逆転しただけで、なにも変わっていないように思えた。それが現実だ。

彼女の事情に踏み込んだときから、葉月の中で形のない怒りがふつふつと温度をあげていた。だが、それはなにに対する怒りだっただろうか。

そんな風に一人の少女の人生を弄んだ犯罪者たちに対してか、結局なにも救えなかった正義の味方に対してか、兎季の心をえぐっている自分自身に対してか

『復讐？ どっちがだよ？』

自分の傷を無遠慮にえぐった兎季に対してか。

元々、彼女の素性についてこちらから踏み込んでやる必要はなかったのだ。それを、自分の痛いところをえぐられたからえぐり返すとは、子供もいいところだ。

口の中に残る言葉の後味は、さっき食べた炭の比較にならない。

「すまん。その、ひどいことを言った」

「い、いえ、僕の方こそ、踏み込んだ真似をして、すいませんでした」

兎季も泣きそうな顔で頭を下げた。目の端に光るものが見えたのは気のせいではないだろう。否定はされなかったから、葉月の想像は的を射ているのだろう。

しかし、なんとという最悪な組み合わせだろうか。二人とも、人生を現神にめちゃくちやにされて、それに足を引っ張られて気まずい思いをして。

本当に、最悪だ。

兎季も同じように思っているのか、涙をこらえて呟いた。

「本当、現神って、なんなんでしょうね……？」

葉月もげっそりと、自分の中の痛みに呻くように言った。

「誰かの人生を台無しにするものだろ」

五年間の調査もまったく役に立たず、葉月はそう答えることしかできなかった。

くしくも、二十四時間前とほとんど同じ朝が繰り返された。

昨晩のことで目を合わせることすら気まづくなってしまった二人に言葉を交わす余裕があるわけがなく、兎季が起き出す前に葉月はさっさと朝食を平らげると、洗い物もせずにそそくさと出勤してしまった。

起きてみたら一人ぼっちだった部屋で、しかし、兎季は昨日みたくただ拗ねているわけにはいかなかった。

あのあと渡されたスポーツバッグの中身をひっくり返す。手元を確認するために、今日はちゃんと電気を点けていた。

まずタクティカルベストが床に落ち、続いてゴトゴトと、多種多様な武器弾薬がその上に転がった。

切らしていた五十口径弾はすべて、防弾チョッキを貫通できる特殊弾頭。四つの手榴弾も効果範囲は狭いが高威力を期待できる攻撃タイプだ。

他に装甲を縫い付けた手袋が一对と投げナイフが二本、あとはボディアーマーに取り付ける金属製のプレートが全身分。救急セットもあった。

一通り確認し終え、この補給が示す意味を考えて陰鬱に呟いた。
「実戦、ってことだね」

閃光手榴弾もゴム弾頭もない、相手を殺すための武器ばかり。一応装甲のついた手袋にはスタンガンが仕込まれているが、それくらい。あと相手を殺さずに無力化できるのは、元々持っている刀とナ

イフだけ。

タクティカルベストや外付けの防御プレートも、すでに隠密行動を要求していない。まさに戦場に出るような装備だ。

そのあとの整理もてきばきと、受験生が暗記した英単語を書き出すようによどみなく実行していく。ボディアーマーにプレートを付けるところになると、すでに思い出すほどのこともない単純作業になっていた。

だから、雑念のような思考が入りこんだ。

明日、兎季は待機命令が終わり、この装備を持って戦場に出る。実戦はすでに経験したし、これ以下の装備で弾丸の雨の中も戦った。しかし、次の戦いはそれよりもずっと厳しいものになるはずだ。

それでも、気にかかることは葉月のことだけだった。

彼はやはり、ただやさしいオタク青年ではなかった。彼と自分は過ぎていくほどよく似ている。だから、葉月の思考は手に取るよりもずっと簡単に察することができた。

明日、彼が『さようなら』と自分を送り出してくれる光景が、まったく想像できない。絶対になにか理屈をこねてついてこようとするだろう。彼は現神への復讐をあきらめきれていない。いや、表面的にはあきらめてはいるかもしれないが、彼を動かす根源的な部分には現神への、理不尽への怒りがあることは間違いない。

自分と彼の違いは、現神に対抗する力があつたかどうかだけだ。

そして、力があつた自分は、復讐のために海外で訓練を受け、実戦も経験した。

戦うのは自分の仕事だ。神喰い龍の死以来、そのために生きてきた。力があつて、そういう生き方を選んだ自分が、受け止めるべき現実だ。

だが、彼は違う。原動力は同じでも、彼は直接戦うことができなかった。そして、自分とはまったく違う現実で生きくことを選んだ。「兄さんは、巻き込んだじゃいけない」

そんな彼の、くすぶる心に火をつけてはいけない。彼は彼なりに

苦しい現実を生きている。そこに、戦うことを選んだ自分の現実まで背負わせてはいけない。

装備の点検が終わり、一つ一つを身につけて最終確認をする。インナーの上着と短パンに着替え、タクティカルジャケットを被る。プロテクターだらけになった脚甲に足を通し、刀とコンバットナイフを差したベルトを細い腰に回す。鎧のようになったコートに袖を通し、内側に張られたプレートと体をしっかり固定。最後にベアハウンドの装弾を再確認して終了。

悲しいほど装備には問題がなかった。このまま部屋を出ていければどれだけ楽だろう。

「無視、しちやおうかな」

葉月をかわすことに比べれば、命令違反の厳罰を受けることの方がはるかに魅力的だった。いっそ気まずいだけの待機などやめて、玄関をくぐってしまおうか。

UMIが呼び出し音を発したのは、誘惑に誘われるまま玄関に向かって歩き出したのと同様だった。まるで魔が差した兎季に釘を刺すような、そんなタイミング。発信者は隊長だった。まさか命令違反未遂を見透かされたとは思わないが、それでも後ろめたい気持ちで通話をタッチする。

「もしもし」

『兎季ちゃん？ まだ葉月くんの部屋？』

いつもは何が起きてものほんと対応する隊長なのに、今日は珍しく慌てた声だった。待機命令を出されているのだから、葉月の部屋にいるのは当たり前だ。

「はい、そうですか」

『装備は？ もう確認した？』

「はい。問題ありません」

『よかった。待機命令は現時刻を持って解除、三時間以内に戦闘準備して部屋を出て』

「なにかあったんですか？」

渡りに船の命令に喜ぶ一方で訊くと、隊長は珍しく心底疲れきつたような声で言った。

『完璧に誤算だった。やつこさんにPSXを強奪された』

「PSXが？」

兎季も信じられずに聞き返した。

PSXとはまだ試験段階の、対現神用兵器だった。まだ試作機が完成した段階で、今度自衛隊が採用試験を行うために、東京に移送されると聞いていたが。

『昨日の夜、戦技研から自衛隊の駐屯地に輸送中だったのを狙われた。奴らの勢力圏の外だと油断していたよ。迂闊だった』

「でも、逆を言えば」

『うん。奴らは余裕がなくなってきた。釣り上げるなら、いまだ』

最初の一撃からずっと静かだったのは、こちらの動向を掴めなかったからだろう。焦れた敵方が大きな行動にでたということは、大物を釣り上げるのに十分なほど深く針を飲み込んだということだ。

『君の準備を待って点鐘同盟からリークをかける。釣り場は農大と近辺の耕地。あそこなら思いっきり暴れられる』

「生徒は？」

『適当に理由づけて退避させておくよ。戦技研の頭には話をつけたから、そっちも気にしないでいい。きみの役目は陽動。ほとんどの敵を引きつけてもらう』

「援護は付きますか？」

『悪いけど用意できなかった。僕と黒岩くんは本拠地とPSXの方を押さえる。何人が現神もこっちに出張っているみたいだし。なにか質問は？』

作戦に関する疑問はなかった。援護についても、電話口の相手と名前の拳がった上司以外はあてにできない。現神と兎季の戦いは単純な祖力のぶつけ合いで、一般捜査官を頭数だけよこされても邪魔にしかない。

しかし、一つだけ訊いておかなければならないことがあった。そ

れは作戦にはまったく関係ないことだが、兎季はそれに決着をつけておく必要があった。

「じゃあ一つ」

「なんだい？」

「兄さ……暮宮さんの後見人は、あなたですか？」

「うん、そうだよ」

隊長のあっけらかんとした態度に腹を立てるのは、初めてのことだと思った。かつての神喰い龍の生き残りの中に葉月の後見人がいるなら、身分照会を頼んだときの対応から今の隊長が一番ありうるとあたりをつけていたのだった。

「どこまでがあなたの作戦のですか？ 僕があの人に近づいたのは偶然なのですか？ なんで兄さんの元にずっと僕を置いたんですかっ！」

怒りにまかせてまくしたてるのを、今の神喰い龍の隊長は静かに聞き終えた。血がにじむほど奥歯を噛みしめる兎季に一息つかせるための間を持つてから、彼は答えた。

「質問は一つじゃなかったかな？」

「だけどっ！」

「とりあえず僕が言えることは、君たちが出会ったことは偶然だったこと。それ以降の答えは君次第だ」

「僕……次第？」

反芻しながら、隊長の言わんとしていることの意味を考える。

自分が葉月に会って最終的に考えたこと。それは自分が結局、龍にすぎないということだったのかもしれない。似た人生を歩みながら、彼は技術者の道を選び、自分は戦いの道を選んだ。だから、戦いを背負うべきなのは自分の役目。

少しだけ変わったのは、自分が戦うことで守れる命を目の当たりにできたことかもしれない。あるいは、戦いは自分の役目だと割り切れるくらいに大切な人ができたことか。

零龍、ファフニール。『大陸神話』以前、元々は北欧神話で抱く

者と名を受けた巨人は、財宝のために龍へと身を堕とした。

（なら僕は、兄さんを守るために龍になる）

大切な仲間を守るために武器を持った、吐息なき零の龍のように。

『じゃあ準備が終わったら連絡を』

「必要ありません」

すべての問題がクリアされ、兎季は無意識のうちに上唇をなめた。
「今すぐ出ます」

かくして、龍は舞いおりた。

現代の神を、喰らうべく。

四章

空っぽの部屋の入り口で、出勤のときとは一つ多くなったバックを片手に葉月はぼかんとしていた。皮肉なことに、いつも薄暗い部屋には今日に限って西日が差ししていて、いるべき人間のいなくなつたことを強調する。

「兎季……？」

問いかけに答える少女は、どこにもいない。どこにも。

きれいに片づけられたテーブルの上には、一枚のメモと小さな財布だけが彼の帰りを待っていた。それだけで、葉月はすべてを理解した。

机上のものにはまったく手をつけず、葉月は抱えていた荷物を床に置くと、ベッドに力なく倒れ込んだ。どうせあのメモには『すぐ帰ります』とは書いていないのだ。

ベッドの弾力は兎季がきて以来、久々のものだった。今晚から硬い床にはおさらばできるのだが、前向きな気分にはなれなかった。

心の中心に穴があいたような喪失を感じたが、不思議とその穴は痛みを訴えることはなく、ただ寂しいという感情だけがあった。

「元に戻っただけじゃないか」

言い聞かせるように、寂しさに軋む心をねじ伏せる。

そう、元通りだ。兎季と一緒にだったこの数日間が異常だったのだ。彼女を男と間違えたり、地雷を踏んで気まずい思いをしたり、炭を食わされた揚句また地雷原に突入したり、そんな慌ただしいことのほうが、自分の日常から遠く離れていたはずだ。

それを、元に戻った途端に、寂しいと感ずるなど。

（馬鹿みたいだ）

自虐が漏れる。命令の前倒しだってあってしかるべきだし、あれだけ気まずいことを言ったりもしたのだから出ていくことだってある。第一、ここは彼女の家ではないのだから、こうなることは決ま

っていたことだ。

それなのに、急な設備点検が入って早く帰れるようになっただけで喜んで、どうすれば仲直りできるかとかなに食べさせてやるうかとか勝手に考えて。

床に置いたバックの方を見る。新しい方には、戦技研から拝借してきたちよつとした武器が入っている。U M Iにも戦技をいくつか秘密でインスツールしてあった。

自分はそれらを使ってなにをする気だったのか。

兎季と一緒に暮らしている間は襲撃に注意する必要があったし、そうなった場合に、彼女の足手まといにならないよう自分も武器を得る必要はあった。だが、本当にそれだけのために、低威力とはいえ無断で武器を持ち出したり、プログラムを借りてきたりしたのだろうか？

明日、戦いに出ていく兎季についていくつもりだった、ということではないのか？ それに気づいていた兎季は、自分を巻き込まないために、今日出て行ったのではないのか？

なにを思い上がっていたのだろう。復讐なんて遠の昔に諦めて、普通の生活に逃げたくせに。

「いいじゃないか。元通りで」

現神に怒りを感じながらも仕方ないとあきらめて、でもなにもしないでいるなどできないから情報を集めて、『自分は行動しているんだぞ』とつまらない自尊心を満足させていれば。そしてこれからちよつとだけ、その切り取った記事の裏側に、あの華奢な少女の活躍を感じるようにすればいい。

そうだ、万事解決だ。寂しさも、一週間もすれば消える。

「それで、いいじゃないか」

何年ぶりの鳴咽を漏らしながら、葉月は呻いた。なんの痛みもなかったはずの心の穴が激痛を伴って燃え広がっていき、どんどんと冷静な理性を蝕もうとする。

それは、復讐を諦めたときと同じ痛みだった。

父親を亡くして独りになって。寂しくて、でも敵は強大で、たった一四のガキにはなにも出来なくて。そのときに心を焼いた炎は、いまだに葉月の中に居座つてとぐろを巻いていた。

だが、兎季は戦っている。境遇は似ているのに、いや、もっと過酷なのに、理不尽と一人で戦っている。自分が諦めた戦場に立っている。当時の自分と、そう変わらない年齢で。

零龍、という言葉がよぎった。『大陸神話』で、仲間を守るために武器を持ち吐息を得た、本当は戦う力を持たない 戦力零の龍。そして、戦いという理不尽に屈しなかった龍。

兎季は、それに似ているかもしれない。

うらやましかったのかもしれない。理不尽に屈してしまった自分にはできなかったことを、やっている彼女が。

そして、自分にもできるのではないかと希望を持ったのも、事実だったかもしれない。

できるはずがない。それは自分の力の及ぶ範囲ではないのだ。だから今回も、諦めたって

「いいわけ、ないだろうが……！」

薄い手の平を骨が軋むほど握り締め、ベッドへと叩きつける。ボツと気合の入らない音になるのは腕の筋肉が足りないからだ。

今までのままでいいなんて、そんなはずがない。いつまでそんな絶望に身を任せて、安易な答えに逃げ続ける気だ？

逃げたところで誰も咎めない。咎めるも者がいるとすれば、それは自身だけ。

そういう情けなさにどんな形でもいいから決着をつけたくて、導力数式列に自分の人生を傾けるつもりだった。兎季に説明したような合理性だけで、自分の行く末すべてを決められるはずがない。

でも、出会ってしまった。自分がこれから作る導力数式列を使う少女は、似たような境遇を持ち、あのときの自分と同じく幼かった。自分なりに向きあってきたつもりだったが、この期に及んで迷うのは、まだ決着のついていない証明だ。今を逸したらきつと決着を

つける機会は巡ってこない。

それに

「兄妹、だもんな」

ベッドに叩きつけた拳をゆっくりと開く。一週間だけの偽の関係で、よい兄でいようと言いだしておきながら、彼女を傷つけたままで引き下がることなどできるはずがない。

「行かないと」

「どこへかな？」

突然の声にベッドから跳ね起きると、部屋の扉に寄りかかって杉井が立っていた。ただ立っているだけで、モデルのようなスタイルに良く似合うライダージャケットを羽織っていた。

だが、葉月はその姿に言い知れぬ圧迫感を感じて、テーブルの上に出しっぱなしになっていた黒塗りの箱を引き寄せた。白衣を巻いた伶俐な敏腕研究員とも、普段のラフな姿とも違う、どこか刃物じみた気配が素人の葉月にもはつきりと感じられた。

声が震えそうになるのを必死に抑えながら、葉月は尋ねた。

「杉井先輩、どうしてここに？」

「様子がおかしい後輩を見に来たのよ。ノックだつてしたわ」

嘘だという直感。多少動転していたしノックを聞き逃すことはあるだろうが、それ以前にこのマンションには呼び鈴どころかオートロックまで完備されている。そこで気付かないなんて、普通の来客ならありえない。

「それで、こんなもの持ちだして、どうする気？」

杉井はつま先で、葉月が無断で持ち出した武器入りのスポーツバックを軽く蹴った。誰にも知られないようにしていたはずだったが、見抜かれている。ただの先輩技術者が、実は得体のしれない存在だとはじめて気づく。

「……罰則は、知ってます」

「そういう問題じゃないの。きみがどうするか聞きたいの」

「俺は、兎季のところに行きます」

杉井の正体はわからない。だが、葉月にはそう答えるしかなかった。

すると、杉井の口元では嘲笑の気配が揺れた。

「行ってどうなるのかしら？　きみにできることがあるのかな？」

「どうしようもないかもしれません。それでも、俺にはやらなくちゃいけないことがあります」

「なぜ？」

「あいつは妹で、俺は兄だからです」

箱の鍵を静かに外し、いつでもグラビティ・エラーを抜けるようにする。まだ復讐を諦めきれなかったところに、形だけの練習は腐るほどやっていた。

その動作も筒抜けなのか、杉井は余裕の嘲笑を深めてバックを拾い上げ、ジッパを開けた。銃を抜こうとする機先を制して杉井がバックから取り出して見せたのは、一本のドライバー。

啞然となる葉月に、杉井は作っていた嘲笑を苦笑に変える。

「まあ、これも立派な窃盗だけど、罰するほどの事じゃないわね。工具の無断使用なんていくらでもあるし」

そう言ってバックの口をこっちに向けてくる。中身はみな、入れた覚えのない工具ばかりだった。

（いつの間に……）

プロの手口の片りんを見て、葉月は驚きを通り越してあきれるしかなかった。きっと戦技プログラムもなんてことのないものばかり掴まされているだろう。

代わりに、杉井は後ろに置いていたらしいもう一つのバックを、

葉月の手元に放った

「これはお土産。理由は、まあ、きみたち兄妹のことが好きになっちゃった、ってことでいい？」

そう言ってちろつと舌を出す姿に、さっきまでの威圧感や嘲弄の影はすっかり鳴りをひそめてしまう。

「がんばれ、お兄ちゃん」

悪戯つこのような微笑を残して、杉井は滑るようにキッチンに消えた。慌てて追いかけるも、キッチンにも部屋の外の廊下にも彼女の姿はすでになかった。

「なんだったんだ？」

混乱する頭を宥めると、すぐに彼女からの送り物を思いだす。はねかえるように部屋に戻って、ベッドの上のバックを引き寄せた。バックを開けると、葉月が持つてくるはずだった装備ではなく、もつと機密性も性能も高い代物ばかり詰め込まれていた。加えて、UMIへのプログラム転送用のメモリースティックが一本。その内容も予想がついていた。

それで、十分な戦いができる。誰もいなくなった玄関の方に、葉月は一礼した。

「ありがとうございます」

その瞬間、葉月のUMIがメールの受信を告げた。すぐさま差出人を確認するが、見たこともないアドレス。怪訝に思いながらも画面に触れ本文を読み始め、葉月は絶句した。いままでの暗い思考や混乱がすべてぶっ飛び、四肢に活力が戻った気がした。

震える手でしっかりとUMIを握りしめ、いま自分が手にしていることをしっかりと確かめる。そこには、今するべきことのすべてが記されていた。

その数分後、葉月は装備を整えて部屋を飛び出した。

葉月が鍵もしめ忘れて飛び出していくのを、杉井は身を隠した隣の部屋の玄関で確かめた。住人が留守なことも確認済みで、さきほどもここに隠れたお陰で葉月の目から逃れることができた。

隠れ部屋を出て、後輩の走り抜けていった方を眺める。状況を楽しむ余裕をもった笑みを浮かべて、杉井は独りごちた。

「やっぱ、男の子なのね」

ライダージャケットの胸元から、一丁の自動拳銃が姿を見せる。コンパクトタイプだが、高速徹甲弾に対応した特殊部隊向けの拳銃

だった。初段をチャンバーに送り込み、安全装置をかけて臨戦態勢へ。

「さて、お兄ちゃんはどこまで妹のためにがんばってくれるかな」
わかりきっている正解を待つような無邪気さで呟き、銃をホルスターに戻す。あるいは、おもしろい獲物を見つけたハンターのようなあやうい笑みかもしれない。

葉月を追いかける前に、杉井は葉月の部屋の鍵を閉めておいた。

夜十時。ナイター設備の強い光が四方から照りつけるその真ん中で、レインコートを被った兎季は、敵が現れるのを待っていた。強い光の中ではこの未完成光学迷彩は意味がないし、兎季自身隠れる気は毛頭なかった。

点鐘同盟が流した爆弾騒ぎで警察が網を張っているから、耕地の中に造られたグラウンドの四方四キロに民間人は一人もいないはずだ。

一方でその抜け道と真相も、とある筋だけにリークされている。つまり、ここに辿りつけるのは、そういう連中だけということだ。

暇な時間に考えたことはたくさんあったが、それは葉月のことばかりだった。結局なんの話もしないで出てきてしまったから、そのことが気にかかっていた。あらましは置き手紙にできていたが。
(きつと、怒ってるだろうな)

でも、それは仕方がないことだ。どうしようもない、と自分を納得させる。やっぱり、彼は巻き込めないのだから。

人の気配を感じ、兎季は思考を中断してグラウンドの出入り口を見た。

ざっと三十人くらいだろうか、背格好も服装もまちまちな団体が自分を取り囲むように展開する。だが、兎季は泰然としていた。

服装も背格好も、ついでに言えば持っている武器も鉄パイプから狩猟用のエアライフルまでと色々だが、共通することが一つ。

どこからどう見ても、信心深い宗教家には見えないということだ。

金髪鼻ピアスやらスキンヘッドのナイフ持ちとかは見えるが、ロザリオを大事そうにしていたり数珠をはめていたりという姿は全くない。集められるだけ街のチンピラ集めてみました、という趣だ。

兎季は油断なく警戒しながら、ため息をついた。装備も行動もみんな素人同然。数というのはそれなりに脅威たりえるが、この倍にでもならなければそれほど困らない。周りには聞こえないように注意しながら、小声で呟いた。

「こう、もうちょっとスマートにできないのかな……」

ただ取り囲んで下卑た野次を飛ばすだけではなく、たとえばライフルをもっているのは遠くに隠しておいて不意を突くとか。

寄って集まればバ力でも天下無敵になれる、とも思っているのだろうか？ 数は絶対の戦力といっても、中途半端な頭数では質に簡単に覆されるということを知らないのか。

（まあ、いい）

本命、つまり自分が釣り上げるべき現神は、この中にはいないとみていいだろう。現神は突出した力を持っているゆえに、こういう数を頼った集団を嫌う傾向がある。味方を巻きこまないように戦っているのは、現神はその力を発揮しきれない。どこかで監視しているはずだ。

自分は武装した暴力団を一人で壊滅させているのだから、こんなチンピラだけでは歯が立たないことはわかりきっているだろうに。力を見たいのか、消耗を誘いたいのか。どれにしろ、やるべきことはこの雑魚どもをさっさと片付けて舞台に引きずり出すだけ。こんな信心などかけら持ち合わせていない、一人に多人数でかかることを当たり前のように思う連中に、かける情けも時間もない。

兎季が気合いを入れなおすと同時、チンピラの最前列が雪崩のように殺到する。

（UMI入力をタッチパネルから導力モードに変更、オダワラ式個人障壁、展開）

兎季が放出した祖力を、UMIにインストールされた導力数式列

が物理的なエネルギーに変換、決められた配置へと展開する。

兎季が全方位に展開した障壁にチンピラたちの障壁がぶつかり、莫大な爆風と光がまき散らされた。それをともに受けたチンピラ軍団は紙きれのように吹き飛ばされ、あっさりと包囲を崩した。

オダワラ式障壁は、ぶつかった相手の祖力に反応して衝撃波をまき散らし、威力を相殺する反応障壁だった。かつては方陣にして城壁などに組み込まれていたらしい。実際は榴弾に対する防御手段だが、炸裂の強さを調整すれば対人用の攻撃手段にもなった。もっとも莫大な祖力が必要なため、なんの補助もない個人では兎季にしか使えないが。

刀とナイフを両手に抜き、崩れたチンピラの中に躍り込む。最前列で爆風をともに受けた連中を蹴りどけ、比較的損害が軽微な後列へ。

途端に、兎季に気付いた金髪男が釘バットを振り上げるが、振り下ろされる前にガラ空きの脇へ刀を一閃。肋骨のひしゃげる鈍い音が響く。

しかし、その刀身が肉を切り裂くことはない。泡を吹いた男を勢いに任せて地面に叩きつけながら反回転。背後から迫っていた数人を、衝撃波を乗せた一振りで吹き飛ばし距離をあける。そしてバランスの崩れたところを一人一撃ずつで沈める。

多数を相手にするとき大切なのは、袋叩きにされないことだ。固まろうとするところには飛びこんで分散させ、囲まれそうになれば衝撃波ではじきとばして距離をとる。その繰り返しだが、思うように数の利をものにできないチンピラは、見る見るうちに数を減らしていった。

逃げまどう羊の群れに狼が喰らいつくような、そんなワンサイドゲーム。

最初こそ多少の損害にかまわず挑んできた連中だったが、立っている人数が半分を切るころには目に見えて勢いを失い、残存戦力が十人前後になると、運悪く残ってしまった連中は顔に恐怖を貼りつ

かせて、異常な強さの雨合羽の一挙手一投足におびえるばかり。

だが、優位に立てば立つほど、兎季はフードに隠した表情に苦いものを深めていた。

（何故出てこない？）

まさか逃げたわけではないだろう？ 期待通り、捨て石はもうほとんど倒したぞ。何故、姿を見せない？

そんな戸惑いが仕草に出ていたのか、一人が端を斜めに切った鉄パイプをかまえて突進してきた。兎季は落ち着き直して正面に迎えるように動き、刀を下段に構えた。狙うのは手がつきだされて脇があく刹那。

兎季の近接武器には、体内に特定のインパルスを叩きこむことで脊髄に直接ダメージを与えるプログラムが作用しているため、少女の腕力でも大人を沈められる。しかし、効果を得るには特定の位置的に的確に打ち込む必要があった。

今回も、兎季は脇を下段からすくうという的確な打撃方法をとった。それまで何度もチンピラに打ちこんできた、慣れた動作をなぞる。何度もみせた、その通りに。

突き出されるパイプの切っ先をかわして、カウンターに移ろうとしたとき、そのチンピラが、笑った。にやり、とピアスだらけの顔全体を大きく歪めた、いびつな笑み。

根源的な恐怖に動かし始めていた手に制動を効かせながら、最速で前面に障壁を展開した。電極がショートするような軽い音と衝撃で、二人の間が一メートルほど離れる。男の左手には、切っ先の潰れたナイフがいつの間にか握られていた。

だがそれ以上に、自分のレインコートの胸辺りが横一線に切り裂かれていることに戦慄した。油断していたとはいえ、超現神級の祖力で展開した障壁を切り裂かれた。

間違いない。こいつが、現神だ。

外見は、さっきまで山と倒してきたチンピラとなんら変わらない。爆発系の漫才でもしたようなとげとげの金髪に、耳といわず鼻とい

わず唇といわずジャラジャラと耳障りなピアス群。

だが、今ならわかる。人を人と見ない、見下したような笑みは奴ら特有のもの。昔、自分をさらった現神もこんな顔をしていた。しかし、これだけの実力者がいままでチンピラに混じって逃げ回っていたというのか。先入観で気付けなかったとはいえ、ひどい失態だ。ざっとそいつ以外も確認。五人。エアライフルが二人、拳銃が一人、刀や大型のナイフが二人。高威力の武器ばかりだ。偶然残ったということはないはずで、ここからが正念場ということだ。

戦力規模としては想定範囲内だ。そのための増設プロテクターであり、殺傷力の高い武器が支給されたのだ。

だが、兎季はそれら致死性の武器に手を伸ばす前に、一つ訊くことがあった。ナイフを両手で弄びながら、吐き気がするようなニタニタ顔をする男に尋ねる。

「あんたは何故、戦っている？」

それが、グラウンドに来てから初めて紡いだ言葉だった。その口調が自分でもわかるほど葉月っぽくて、兎季は図らずも笑いそうになった。

藪から棒もいいところである質問に、一瞬場が凍った。目の前の現神も、お手玉していたナイフを片手とどめて、一瞬ぼかんとした。コメディのような爆発頭とピアスだらけのアホ面にはなによりもしつくりくる表情だった。

だが、すぐに男はニタニタと笑いを取り戻し、さらに深めながら言った。

「たのしいから。それ以外にあるかよ？ ちょっと祖力をぶつけてやるだけで勝てるんだぞ。俺は最強、他はクズ。あんたもクズ、はっ」

「なるほど、よくわかったよ」

答えてから周りの五人を見る。そいつらもおおむね賛成、といった雰囲気だった。

「で、あんたはこれから殺されるの。俺達の財布、つぶしちゃった

んだからね。やりすぎちゃったんだよ、おわかり？」

「うん、わかったよ」

救済を求めて必死に手を伸ばす者達を食い物にしていたことは知っていた。心の傷の特効薬となるべき信仰を、私欲のための毒に変えてばら撒いていたことなど百も承知。

（ただ、あんたらのことは今知った）

現神も、自分の傷や信仰のために戦っているなら、致死性の高い武器は使えないかと思った。どんなに憎もうとも、それは自分と同じだから。

兎季はU M Iに意識を打ち込んだ。

（P A S 起動。威力制限を対人に設定。戦闘開始）

コンバットオープン

こいつらは、思いっきり殴れる。

試作光学迷彩の一番得意なことは闇夜に溶け込むことだった。目深にかぶったレインコートのフードから、黒岩はその瞳を光らせる。その手には真っ黒な狙撃銃が握られている。夜陰に溶け込みながら伏射姿勢をとっているのは、民家の屋根の上。暗視機能付きのスコップで覗き見るのは、そこから直線距離で七十メートルほど先にある倉庫のような建物。

小さな体育館ほどの錆びだらけでボロボロな建物だが、周囲を有刺鉄線付きのフェンスで囲い、作業服でカモフラージュした立哨数人が目を光らせている。物々しい警備のわけは、そこが件の宗教集団『矜持の宇宙』の本拠地であるということだ。ここよりもよっぽど立派で表立った施設は市内に点在しているが、いざというときのために中枢は隠しておくにこしたことはない。

黒岩たち新生神喰い龍の本当の目的は、こつちを探し当てることにあった。黒岩のいる民家も内偵のために借りたセーフハウスで、ファーストアタック最初の一撃からずっと動向を観察していた。さすがに戦技研の試作兵器を盗むという暴挙に出ることは想定だったが、お陰で踏み込むのに十分な材料を得ることができた。

あとは兎季を使って陽動をかけて戦力を分散する。盗まれた試作機も昨日の今日では使えるはずがないだろう。狙うなら今晚というわけだ。

警察機関において、狙撃手の役割は主に監視である。本来は二人一組で四チーム展開するのがセオリーだが、神喰い龍は組織の特殊性から単騎での作戦行動も少なくない。

UMIが通信を受け取り、耳に付けたイヤホンマイクが低い音量で出力する。少年のようなのはそのままに、抑揚を欠いた隊長の声が聞こえた。

『状況は？』

「正面に見張りが二人を加えて、立哨はここから見える範囲で六人PSXの運搬車は裏手で発見。他に三人が警護についてる」

『わかった。PSXは僕でおさえるから、黒岩くんは正面。あと六十秒』

「了解。敵をひきつける」

腕時計を見る。低明度の蛍光塗料で塗られた秒針が、闇に沈んだ文字盤を舐めるように旋回する。

『この作戦が終わって僕らが正式に動けるようになったら、またコールサインをつけようよ。希望ある？』

「いまするべき話題でもないが、そうだな、零龍は兎季にやってやれ。隊長は悪戯龍でいいだろう」

『君の希望を訊いたんだけどね。兎季ちゃんが零龍はいいとして、悪戯龍にはちゃんと候補がいるんだ』

「なんだと？」

候補という言葉に気を取られながらも、時計の秒針は見逃さない。あと四十秒。

手の中の狙撃銃を動かして、スコープ内の十字に見張りの片方を重ねながら、黒岩は毒吐いた。

「あんたは性格が悪すぎる。引き込む気か？」

『それは彼次第だよ。僕がするのはほんのお手伝い』

「だがあいつは……」

『わからないかな?』

抗議しようとする先を上司は、低い声で遮った。特に強い語調ではなかったが、それで黒岩は黙らされる。

『兎季ちゃんが関わっている時点で、僕らはなにかを言える立場にないんだ。だったら、不出来な大人は最後までやりきるしかないんだよ』

肩をすくめるような口調。黒岩は兎季の戦闘全般での教官であり、隊長は彼女の剣術の師範にあたる。つまり、自分たちが彼女を魔道に引き込んだ張本人。

兎季の祖力は、十分な脅威となるレベルの現神と比べても極めて高く、現神側の人間になられると厄介だった。裏を返せば、味方につければこれ以上ない戦力となるということ。だから、復讐という餌で兎季を神喰い龍に縛りつけてきた。

現神対策という社会正義のために、一人の少女に茨の道を強制する。たとえそれを彼女が望もうとも。だから、最後まで黒であり続けるのが不甲斐ない大人の役割だと、自分より年下で前途のある上司が言う。

「やりきれんな」

『そういうものでしょう。あと十五秒。準備よし』

「こっちもだ。あと十秒」

銃床を肩にあて直し、拳を腰だめにするように祖力を流し入れる。薬室内で火薬と祖力が混じり合い、そこに意識が通う。弾丸は銃把を握る拳の延長であり、祖力による加速も併せて音速の三倍で繰り出されるハードパンチとなる。

『あつちには保険もかけてあるし、兎季ちゃんも今回でなにかを掴んでくれるよ。それだけで、僕らはいいいんだ』

「そうだな」

復讐を根幹とするとはいえ、兎季は今まで、あの娘なりの原理に従って戦場に臨んでいる。そこにプラスになるようなことをしてや

るのが、不甲斐ない大人にできるせめてもの指導なのかもしれない。
秒針と共に作戦開始が告げられる。

『GO』

同時に引き金を引く。UMIがストックの中の祖力で反動を打ち消し、更に弾道補正と加速をかける。銃口のサスブレッサーが銃声と火花をおさえ、弾丸は己が発する大気の波紋すら追いつめながら標的を貫く。狙いは見張りのわき腹、致命傷にならない位置。十分に加速された超音速の牙は、防弾衣を軽く貫通して血を吐き出させた。

もう一人の見張りが気づき、悲鳴とも怒号ともつかない大声をあげるのが聞こえた。

それに気づいた他の立哨が集まる前に、レバーを引いてリロード。仲間を手当てしようとするもう一人の肩口に一発加えて無力化。

屋根に転がった薬きょうを手早く回収して飛び降り、セーフハウスの庭にあらかじめ隠しておいたサブマシンガンを負う。ついでにタクティカル・ランチャーをベルトで肩にひっかけてから、無音で隣の民家の屋根に飛び乗る。レインコートの下に着込んだボディーマーは、全身の防弾プレートと各関節に仕込まれた可動式パワーツをつなぐことで、PASという祖力を動力とする強化外骨格になっていた。

PASで強化された脚力で屋根を音もなく渡りながら、手の榴弾砲の狙いをつける。この状況になっても光学迷彩は有効で、屋根伝いに近づいてくる天敵の存在に集合した連中はまったく気付けなかった。あと一回跳躍で届くところで、榴弾砲を浮足立つ連中の足元に向けて発射。発煙弾が煙を吐き出し一帯を包み込む。

武器をサブマシンガンに持ち替え、黒岩は煙幕の中に飛び込んだ。黒岩の視界も零になるが、視界が利かなくとも周りはすべて敵。光学迷彩に使っていた祖力を個人障壁に変更しながら、薙ぎ払うように小口径貫通弾をばら撒く。敵方も慌てて個人障壁を展開して弾丸の大半を防いだが、防御の遅れた二人分の悲鳴が煙の中に響く。

片手でサブマシンガンを構えながら、左手に鐐の大きなナイフを抜きだす。強大な力を持った現神の個人障壁を遠距離から打ち破るのは、それこそ祖力をありつたけだめた対物狙撃銃の仕事で、個人障壁を破るなら自分の祖力も有効に使える近距離格闘が最も適している。故に神喰い龍は、近接格闘による乱闘を基本戦術とする、世界でも異例な戦術部隊となっていた。

「こんな煙！」

煙に巻かれていた一人が衝撃波を作って煙を吹き飛ばす。だがそれは暗闇の中で懐中電灯を振り回すようなもので、黒岩は即座にサブマシンガンの方向を定めて連射した。祖力による障壁貫通力を持たせていない弾丸でも、固め撃ちすればその物理力で一般人の障壁なら簡単に貫通する。煙を吹き飛ばすときに発散された祖力から現神ではないとした判断は正解で、そいつは高速貫通弾に障壁ごと貫かれ倒れ伏した。

あと三人。黒岩は位置を変えながら、煙の中に祖力を飛ばした。微妙な祖力捌きで煙が散ってしまうのをおさえ、ついで空気の流れから大まかな敵の位置を掴む。

そして煙を払いのけようとする祖力から、黒岩は三人の中に一人だけ現神と呼べる祖力の持ち主を見つけていた。先に片づけるのはそれ以外の二人。態勢を立て直される前にフルオート射撃を浴びせて無力化する。

そのまま銃を動かして最後の一人を射界に納めるが、展開された強固な個人障壁に阻まれて弾丸がはじける。今までとは桁違いの障壁強度は現神と言って差し支えない。

自分の予測を裏付けた黒岩は、すぐさまサブマシンガンを背に戻した。分間数百発発射される弾丸に、一々障壁貫通力を付加するのは無駄な消耗。あくまで対一般人用の装備だ。

代わりに利き手を大ぶりのナイフを持ちかえ、専用の手袋で覆った左手で大型の鐐から黒いワイヤを引き出した。その先端に錘をつけて煙の中に投擲する。鐐の中のリールが剛性の高い糸を吐き出す。

ワイヤを起点とした方が、何の指標もない空間より数段祖力運用のイメージがしやすい。

祖力によって操作されたワイヤが弧を描き、大気に小さな波紋を刻む。その波紋をリーダーに黒岩は加速、押さえつけるように動く煙を払いのけるために四苦八苦する現神にむけてナイフを突き出した。現神もそれに気付き、個人障壁を強固にして迎撃する。

現神の障壁は暴力的な斥力の嵐で、それ自体が高い攻撃力を持っている。現神たちは個人障壁の展開だけで敵を制することができ、基本的にそれ以上のアクションを戦いで必要としない。だから、黒岩がワイヤに通じていた祖力を使って衝撃をいなし、間合いを詰めたことに対応が遅れる。

切っ先に集中させた祖力は強固な防壁を切り裂き、さらに首筋を目指して真つすぐに空間を滑った。現神も咄嗟に特殊警棒を抜いてナイフを受け止め、二人を中心に爆風が吹き荒れる。互いを弾きだそう、弾きとばされないよう、莫大な祖力が物理力となってせめぎ合いながら暴れまわった。

息の触れあうような距離で初めて、相手の顔を認める。現神はまだまだ二十代になりたてのような、若い男だった。

「離れねえっ！」

焦燥に顔を歪めて必死に想定外の強さを持つ黒岩を拒絶するが、二人の武器は密着を保ち続けた。

「離れたいなら、そうしてやるよ」

黒岩が祖力を緩め、岩のような体躯が宙に舞った。まるでトラックにでも跳ねられたような光景を、人の力だけで平然と作りだす。それが現神との戦い。

派手に空中に跳ねあげられた黒岩を見上げて、現神は小さく安堵した。現神はその力ゆえに、自分より弱者を圧倒的な一撃で屠る戦いしか経験していない。彼の戦いの常識では最大限の非常識を認めてもなお、ここで勝てるのが当たり前なのだろう。無論、そんな心理は神喰い龍の戦術マニュアルにも明記されている。

次の瞬間、黒岩を追うように現神の体が宙に引き上げられた。ナイフから出たワイヤが弾きとばされた隙に現神の首に巻きつき、暴力的な勢いで釣り上げる。

首を切断しないようにワイヤを制御しながら、黒岩は何のダメージもなく着地し、慣性をフルに使って倉庫の壁面に現神を叩きつけた。

ダメージを与えた感触を確かめて、素早く安全確保と拘束を行う。致命傷にならない程度に加減したこともあつてか、現神は頭から出血しながらも意識を保っていた。小さな侮蔑が宿った若い瞳を、黒岩は玄人の視線で射抜く。

「公僕が……。お前たちに、この力のせいで拒絶されてきた俺の何がわかる？」

「わからんさ。その力を社会への復讐にしか使えんテ口屋の気持ちなんぞな」

手錠をかけるような真似はしない。現神の祖力では簡単に壊されるからだ。

「だが、もしお前がその力と向き合うことを諦めたくないなら、あとで俺のところに来い」

「なに？」

UMIで電撃に変換された祖力がワイヤを伝い、現神だった青年は数度痙攣して気を失った。

気絶した青年を安全な場所に素早く退避させ、耳のマイクに吹き込む。

「正面を制圧。医療班と対応班を寄こしてくれ。俺は突入する」

あらかじめ集めておいた高天機関の一般捜査官たちにバックアップの指示を出し、黒岩は榴弾砲を倉庫の正面へと向けた。

正面で派手に爆音が轟いても、倉庫の裏手でトラックの警護を任された三人が動くことはなかった。正面に回った人数と、その中に現神級の祖力の持ち主がいることを知っていたから、正面を破られ

るとはかけらも思っていなかった。

だから彼らは、引越し業者風に偽装された二トトラックの周囲で、索敵を続けていた。

思いの思いに武装する三人の内、刀を佩いた少年がトラックを見上げた。刈り込んだ頭に巻いた鉢巻きと二十歳に満たないあどけない容貌の組み合わせは、どことなくかつての戦火に身を投じた若者の姿を連想させる。

トラックの積み荷の詳細は彼らには伝えられていなかった。聞いているのは、これが戦技研の最先端兵器で、対現神戦の切り札になりうるものだということだけだった。昨晚、別の仲間が戦技研から輸送中の物を奪取し、今は使用するための解析を中に行っているらしい。

（もう終わりだな）

少年は戦いの推移ではなく、組織の現状を鑑みてそう思った。

『矜持の宇宙』が機能していたのは、一重に違法薬物の売買による巨額の資金による贈収賄と人材の収集ができたからだった。賄賂を受け取る人間には金を、受け付けない人間には相応の打撃を与えて言いなりにする。贈収賄は相手の弱みも握れて一石二鳥だった。

だが一週間前に、正体不明の襲撃によって収入源を押さえられてしまった。表向きにはヤクザ同士の抗争と片づけられ、便乗した警察がたまたま検挙したということになっている。だが、本当はもっと別の力が絡んでいることは関係者なら誰でも予想がつく。

『矜持の宇宙』はそれから一週間以上を置いて、その大きな力に辿りつくことができていた。戦技研の武器を強奪したのは、簡単に言えば自棄になってきたからで、そうなった組織の息は長くない。それでも、現に表が強襲されても泰然としていられるのは、自分のような現神がいるからだった。

警察が現神事件に関与するのを避けたいのは、事件そのものよりも現神個人の及ぼす被害が大きいからである。犯罪が起きててもそこに現神の影があれば、一般的な治安維持機構は直接的な威力行使よ

りも裏方での折衝に走るのが普通で、得体の知れない襲撃があつても、それを撃退すれば相手は交渉に回るしかない。犯罪者に負けたということが表沙汰になれば、国家権力の名折れだ。

『矜持の宇宙』は解体され、組織の一部は交渉での恩赦を受ける。だが、そこに自分たちは含まれていないであろうことは、彼もよくわかっていた。

わかつていながら離れられないのは、ここ以外に居場所がないからだ。現神のほとんどは、その大きな力のせいで、あまり幸せでない人生を経験していることが多い。なにせ、一般人にはどうとでもない祖力運用が殺人的な威力を持つのだ。力の加減ができない幼少期に家族や他人を傷つけることを経験した現神は珍しくなく、それが後の彼らの人生に影を落とす。だから、裏社会の闇以外に住む場所を持てなくなるのだ。

少年も、魔道に堕ちた理由のすべてを祖力のせいにする気はなかったが、強大すぎる力による孤独がなければここにいなかったのは確かだった。

「おかしいな」

少年以外の一人が呟く。拳銃で武装した年配の男で、たしか元自衛官という肩書を持っていて、こちらの警護の責任者を任されていた。

「煙幕ならわかるが、さっきのは榴弾だ。本当に警察か？」

「なにかトラブルでしょうか？」

残りの一人が応じる。脂ぎった顔の中年男性で、肥えた皮下脂肪でパンパンに張ったベルトにマシンピストルを提げていた。ちなみに二人は現神ではなく、いわゆる手なれた一般人。

「二人で見に行く。君は残れ」

「了解」

元自衛官は少年に待機を命じ、デブ中年を促す。同じ組織同じ立場にあつても、現神と行動を共にすることは忌避されることが多い。戦いになったときに自分まで巻き込むような者を近くに置きたくな

いというのはわかるが、見るからに鈍重なメタバ中年よりも役に立たないと思われているというのは気に食わない。二人が周囲を警戒しながらトラックから離れるのを、やるせない寂しさを抱きながら見送る。

ヒュン

一際風が強くふいた。今まで風なんてほとんどふかなかつたのに、と自分の鉢巻きの尻尾がまったく動いていないことに気付く。

「伏せる！」

元自衛官の叫びが現状理解よりも先に脳みそを駆け抜ける。個人障壁を張り巡らせながら偽装トラックの影に転がりこんでからやっと、十メートルほど距離をおいてあの中年男が倒れているのを見つけた。その頭には一本角のようにサバイバルナイフが突き刺さっている。即死だろう。

風の音だと思ったのは、白刃が宙を裂く音だったのだ。さらには、すでに目と鼻の先まで敵の接近を許している。いかし、周囲に目を配っても敵の姿はなく、照明に照らしたされる空間の外側に暗闇が横たわっているだけだ。

いや

夜闇しかないはずの空間が銀光を吐き出すのを、今度は見逃さなかった。狙いは自分ではなかった。元自衛官は明後日の方向を警戒していたために対処が遅れる。少年はすぐさま障壁の範囲を広げてナイフを打ち落そうとしたが、間に合わない。

だが元自衛官という肩書は飾りではなかったようだ。中年が倒された時点で、男も狙撃を警戒した強固な個人障壁を展開しており、投擲されたナイフぐらいそれで防げるはずだった。

少年は拡大していた力場を攻撃に再編成して暗闇へと投げつける。祖力同士のぶつかり合いによる発光現象が、ナイフと障壁、少年と暗闇の間の二か所で発生し、一時照明機材よりも鮮烈に周囲を浮き立たせた。

結果は、両方とも惨敗だった。ナイフに込められていた濃密な祖

力は、一般人程度にとつての『強固』な障壁などたやすく切り裂いて、そのまま喉笛を切断した。少年のぶつけた力も暗闇から迸った暴力的な祖力との競り合いに負け、彼自身はトラックの荷台に叩きつけられた。個人障壁でダメージを防いだが、少年はトラックに背中を預けてスルズルと尻もちをつく。

決して手加減をしたわけではなかった。障壁を再編成した場合の威力は確かに本気での攻撃よりも数段劣るが、それでも一般人の祖力では受け止めきれないぐらいの衝撃はある。それを受け止め、あまつさえ弾きかえされるなんて……。

少年に恐怖を植え付けた闇は、夜から分離して影法師となり照明の光の中に降り立った。フード付きのロングコートを着ているようなシルエツトが光の中に存在を刻む。

「この光学迷彩はわりと使える。正式採用考えてもいいね」

影法師が呟く。まだ若い、大人びた遊びのある抑揚を含んだ声だった。その声の方向が少年へと向けられる。

「さて、このまま退くのなら見逃すよ。君はまだ若い」

見逃す、という言葉に一瞬心ひかれたが、それはあくまでもこの場で手打ちにされないというだけで、警察に拘束されるという運命に違いはない。元から選択肢はないのである。

自分は現神だ、と恐怖に揺らぐ自分を奮い立たせ、少年は柄に手をかけた。さっきのは瞬発力で差が出ただけだ。

「やれやれ、そっちを選ぶのか」

少年が鞘を払い終わる前に、影法師が距離を詰めていた。真っ黒なコートの内側から稲妻のように刃が打ち出されるのを刹那で認め、抜きかけの刀身を盾にする。

二人の個人障壁が接触するが、爆発的な力の発散はなく、影法師の構築した祖力が障壁の祖力を光へと変えていく。静謐な侵食の前に祖力のせめぎ合いは意味をなくし、あとは二つの刀に載せられる腕力の競り合い。

「君も、悲劇の悪役を演じてるクチかい？」

体重をかけるために前傾しながら影法師が挑発する。押し返そうとしても、まるで重機を相手にしているかのようにびくともしない。影との体重差はほとんどなさそうなのに。

「君たちみたいな若い現神に多いんだよね、不良をこじらせて悪役ぶっちゃう子」

「なん、だつて？」

「かつこ悪いからやめなよ。大体そういう子って、ただの寂しがり屋なだけなんだからさ」

「あんたに、なにがわかる！」

感情の導火線に火がつき、噛みつくように力を込める。制御を失って全身から噴き出した祖力だが、実存の力に変わる前に光へと変えられ散っていく。

力んだためについてしまった勢いを逆手に取られ、鰐迫り合いの支点をずらされるまま右手を引かれ地面に転がされてしまう。起き上がろうとする先を喉元に突きつけられた切っ先が制した。

「わかるつもりはないけど、同じ同情を買うのなら、悪役より悲劇のヒーローになって誰かを救う方が何倍もかつこいいよ」

切っ先から高密度に練り上げられた祖力が滴り、現神の神経に干渉し自由を奪う。現神捕縛用の戦技プログラムがU M Iで実行されているのだろう。

影法師は効果を確かめてから、偽装トラックに歩み寄った。荷台の扉にはぶ厚い鉄板でロックがなされていて、簡単には開かない。

「起動、神斬りの太刀」
アメノハバリ

音声認識でU M Iに吹き込み、白刃が下段からロックを切り裂いた。一瞬火花を散らして、厚さ数センチの金属のかんぬきが切断される。

「さて、これを確保しちやえば終わりだね」

影法師は、いたずらな口調とは裏腹にトランプを警戒しながら、二つの扉をそつと開けた。フラッシュライトが荷台の中を照らし出す。

そして、影法師は石像になった。

「あれ？」

素っ頓狂な声は、事態が余りにも予想外すぎて理解が追いついていないせいだと、なにもできないで転がっているだけの少年にもはつきり分かった。少年の位置からトラックの中は見えており、影法師と同じように呆然となった。

そこには、空っぱの荷台が口を開けているだけだった。

相手が典型的な戦闘狂であることはわかったが、それでも兎季は全力で戦えなかった。その代償がレインコートの損失。

それでも、ピアスの現神とも互角に渡り合いながら、チンピラの延長を二人無力化したから、苦しいながらも善戦しているといえた。グラウンドの隅にあった水飲み場を遮蔽物に、ベアハウンドの弾を入れ替える。使ったのはピアス現神に一発、その他の無力化に二発。その分の空薬きょうを抜いて、一発ずつ込めなおす。

この徹甲弾を脳天に叩きこんでやれば、簡単に終わる話だった。遠慮してやる必要もない。ただ、殺すことと本気で殴ることは、意味が違うことのような気がした。

頭上に祖力が集中するのを感じし、振り下ろされる衝撃の塊を横に跳んでかわす。一秒前までいた場所のコンクリートが砕け、小規模なクレーターが出来上がっていた。

「逃げるなよ、お嬢ちゃん。鬼ごっこにはもう飽きてきたんだけど」心底退屈そうに言うピアスの現神を見ると、その穴だらけの顔面に大穴を追加してやりたくなる。大味な攻撃に余裕な態度。こっちが致命傷を与えるような攻撃を避けていることは、完全に見越されていた。

そういえば、初対面で女と見分けられたのは久々のことだったが、相手が相手だけに嬉しくない。

次の遮蔽物へ向かって走っていると、左足に木槌で殴られたような鈍痛。撃たれた、と認識する間には、転倒しようとする体を、祖

力と驚異的なバランス感覚で立て直そうとする。

「だから、とまわってば」

不安定なところに横から体当たりされ、兎季は地面に叩きつけられた。回転する視界のなかで受け身を取りながら怪我を探すが、障壁が弾丸の威力を弱めてくれたお陰で直撃でもプレートは貫通されていなかった。

うつ伏せの状態から立ちあがろうとして、背中を踏みつけられる。背中にも防弾プレートがあるため痛みはないが、まるで杭で打ちつけられたように体が持ち上がらなかった。

臂力を増幅するPASは、出力を『対人』に設定していても大型バイクを軽々持ち上げるくらいの力はある。それでも現神の足はびくともしなかった。

現神はナイフを振り上げながら、勝ち誇った笑い声をあげた。

「ジ、エンド。ははっは」

兎季は、呻きながらUMIに意識と祖力を送り込んで、できる限りの障壁を張り巡らせる、そのときだった。

くぐもった遠雷が耳朵を打ったのは。

同時に頭上で現神が悲鳴をあげ、鮮血をまき散らしながらひっくり返る。遠雷の正体は銃声。肩に弾痕を穿たれた現神は、これまた耳に障る金切り声をあげてのたうちまわった。

（噓、だ）

銃声から銃を判別できた兎季だからこそ、信じられなかった。この銃声に助けられるのは二度目。その銃声を聞いたことがあるのは、幾多の現神と、神喰いの龍たちと、そして、その龍たちに救け出された自分だけだ。

兎季は信じられないまま身を起して、銃声の元を探した。

誰かが叫んだ。

「なんだお前は？」

兎季の目線の先には、同型のボディアーマーを着込み、両手でグラビティ・エラーを構えた、無愛想な青年が立っていた。

「善意の第三者だ」

暮宮葉月が、静かだがよく通る声で言った。

平静を装ってはいるものの、葉月の内心はまったく穏やかではなかった。

グラウンドに立っているのはみんな、拳銃とかナイフなどを手にしている。実用的な武装など一人二人しか想定していなかった葉月は、それだけで来たことを後悔できた。恐れが顔に出ない生来の無愛想が、これほどありがたいと思ったことはない。

生まれて初めて銃を撃って両手と肩が痛かった。反動制御の数値を大きく設定しなおす。

グラビティ・エラーの銃身から伸びたコードは、ベルトのケースに入った父のUMIにつながっていた。五年前の型落ち品だが、それでも最新型と並列化してやれば相当にパワーが出たし、その中に残っていた専用の照準補正プログラムがなければ素人が弾を当てることなど不可能だ。

威力については、さすが七十五口径弾だった。祖力で障壁貫通力を高めているとはいえ、こうもあっさり一人片づけてしまえるとは。いま着いたばかりの葉月は、兎季を踏みつけていた男が現神だとは思ひもなかった。

目を白黒させて棒立ちしている兎季については、怪我をしている様子はなかった。なかなか際どかったが、間にあってよかった。

葉月は銃を構えたまま、UMIに入力する。

（PASをTシステムに同調、対人モードで起動）

『システムチェック、PASコンタクト。CCCダウンロード』

葉月のUMIが人工的な声で復唱する。試験中のシステムだから、どのプロセスを実行中なのかを音声申告する機能が追加されていたようだ。特に無効にする理由もないのでしゃべらせておくと、すぐに準備完了が告げられる。

『戦闘開始』

瞬間、葉月は弓で放たれるように加速した。相手は一番距離が近かった拳銃を持った男。

男は乱入者の行動に泡を食って銃口を向けるが、葉月はまったく速度を落とさず正面から肉薄する。その迷いのない突進に引き金を引くのが遅れ、懐への侵入を許した。

葉月は低い姿勢から、全身のばねに任せて男のあごを打ちあげた。男はたたらを踏んで崩れ落ちる。

あっさりと一人、片づけてしまった。その鮮やかな手際に、兎季も他の男たちも呆気にとられて葉月を見ている。

だが、やったこともない格闘技を披露した本人は、全身から冷や汗を滝のように流していた。高校の体育以来の全身運動に関節という関節が軋み、筋肉が悲鳴を上げる。

苦手教科は体育、仕事も趣味も完全インドアな葉月に格闘技の心得があるはずがない。ましてや銃口を突き付けられながら突撃する胆力も俊敏さなど言うに及ばず。

すべては借りてきた新プログラムの能力だった。簡単に言うなら、強化外骨格を利用した自動格闘システム。強化服に自分の動きをトレースさせるのではなく、着用者に強化服の動きをさせることで、素人でもプロと互角に戦えるようにする。PAS実用化された時からの構想だったが技術的困難によって開発が遅れ、現実化したのはこれが最初。

弱い者を簡単に強者にする。Tシステム

トリックスターシステム
悪戯龍の虚言とは、

なるほどうまいネーミングだ。

もっとも、ちゃんと使いこなすにはある程度の体づくりが必要らしく、葉月の体は早くも筋肉痛の兆候を示していた。疲労で笑いだしそうになる膝に追い打ちをかけるように、背後からエアライフルの弾丸が撃ち込まれる。

『オート・プロテクト』

UMIが言う前にこっそりと祖力を抜き取られ、腰が砕けそうになった。三重の個人障壁が勝手に構築され、必要以上の力で弾丸を

はじき返す。

『敵弾威力が想定以下。障壁レベルを下方修正』

「そういうことは撃たれる前にやれ」

悪態を吐いてみても、UMIはやっていることを申告しているだけなので意味はないが。

動きたくないとは抵抗する膝を無理やり動かされて振り返るときには、すでに兎季が昏倒させていた。そのまま葉月の背後をカバーする位置に立つ。

そして、開口一番に怒られた。

「なんで来たんですか？　というかあんた体育苦手とか言って強いじゃないですか！」

「あとでまとめて説明する。それで、現神つてのはそいつか？」

烈火を瞳に映す兎季を制して、数メートル先で大型のナイフを構えている男を目線で示す。素人目だが、刃渡り四〇センチはありそうなナイフを隙なく構えていた。周りに転がっている連中とは違って、無駄な装飾を一切していない。背恰好は葉月とそう変わらないが、どこかプロのようなオーラを感じる。

しかし兎季は首を振ると、いまだに肩の傷を抑えてのたうちまわっている、いかにもチンピラという男を指差した。

「いえ、あっちの爆発ピアス男です」

「……あれが？」

日曜の朝でも聞かないような命名を受けた男を見る。地面を転がりまくったせいで、砂まみれの金髪はさらにひどいことになっていた。

ただでさえ疲れ切っているところに加えてさらに脱力して、葉月は言った。

「現神つていうのは、もうちょっと神秘的な容姿やプロっぽい雰囲気イメージがあっただんだが」

「僕もです」

二人揃ってげっそりため息をつく。RPGで中ボスだと思って

倒したやつがラスボスでした、というような気分だ。

「でも、強いです。起きてきたら厄介ですよ」

そこに関しては兎季も油断ない口調になるから、その通りなのだろう。

「わかった。ナイフの方は任せろ」

圧倒的な力を持つている兎季が強いというのだから、葉月などシステムどうこう以前の問題だ。兎季と二人がかりだと、確実に足手まといになる。

迷いなく請け負った葉月に、兎季は悲しそうに言った。

「戦うんですね、やつぱり」

「あとでちゃんと説明する。行け」

納得はしていない、という顔で兎季は現神の方に走っていく。ちょうど爆発ピアスの現神が身を起こそうとしているところだった。

ナイフを持った男は、背中をみせた兎季を追おうとしたが、葉月がその間に割り込んだため足止めを食らう。

「お前の相手は俺だ」

葉月は、これ一度言ってみたかったんだよな、などと思いながら用意していたセリフと一緒に回し蹴りを見舞う。股関節がいびつな音を立てるのを聞きながら、普段なら絶対に上がらない高さでつま先が鋭い軌跡を描く。だが男は慌てずに半歩引いてかわすと、最小限の動作でナイフを突き出す。

判断を迷う前に、左手が押しのけ、右手がグラビティ・エラーを突きつける。息のふれ合う距離での一瞬の交差。

男が祖力を衝撃波に変えて放ち、葉月もそれを自動で展開された障壁で防ぐ。反発しあう磁石のように距離が開いた。

鬱陶しいので音声申告は無効化したが、システムは良好すぎるほどに機能していた。素人の葉月が武器持ちの実力者と互角に戦えているのだから、十分すぎる性能だ。

だが戦闘機動が意外にハードなのは問題かもしれない。特に完全無欠の運動不足で関節も錆びついたように固い葉月だと、拳打を打

ち込めば手首から肩までの骨が一息に軋み、蹴りを放てば下半身の筋肉が一気につる。仕掛けてかわすたびに激痛が走るといのはどういう冗談だ。

笑い事では済まないような激痛に泣きそうになるが、涙だけはどうにか飲み込んだ。自分から首を突っ込んで引き受けたのだから、泣き言は言えない。

だが肉体的にジリ貧なのは間違いなかった。そもそも悪戯龍は肉体派ではなく、その技術によって大陸神話に名を残したのだから、Tシステムもただ殴り合うだけではなくもつと有効に使うべきだ。目にもとまらぬ速さで駆け回る斬線を銃身で防ぎ、混ざる貫手や蹴りを器用に捌く。本来なら何回死んだかわからないほどの猛攻をかわしながら逆転の一手を練るが、両腕は痛みを通り越して感覚がなくなってきた。

だが、ようやく行動パターンも読めてきたところだった。痺れて安定しない下半身をPASで制御しながら、男の間合いの一步外へ。相手の手が届きそうで届かない位置というのが、拳銃の一番得意とする間合いになる。それをわかっている男は、すぐさまナイフを正面に構えて鋭く踏み込んでくる。

刃を迎えるようにグラビティ・エラーを向ける　ふりをしながら、葉月は二つ目の戦技プログラムを起動させた。

(Tシステムリンク、幻影の巨人^{スクリュミル})

切っ先が届く寸前のところで、葉月の体が真横に滑った。横っ跳びにかわしたのではなく、なんの予備動作もない姿勢のまま真横にずれたのだ。

男は驚きに目を見開きながらもすぐさま刃を返し葉月を追って薙ぎ払うが、それも円を描くような急旋回でかわしきった。

PASが強化外骨格なら、幻影の巨人は強制加速装置だ。祖力で数ミリ体を浮かしたところに運動エネルギーを与えることで、予備動作なしの瞬間加速、挙動変化を可能にする。祖力の消耗は激しいが、全身ぼろぼろの葉月にとっては直接体を動かすよりずっと楽だ

った。

旋回による遠心力に振り回されないようにバランスを取りながら、一息に無防備な背中に戻り込む。線の細い自分とは対照的な広い背中の中心に左手を添える。グラビティ・エラーではその下に着ているのであるう防弾衣など簡単に貫通してしまう。

男が振り返る前に、葉月は止めのプログラムを起動する。

スタンシヨット
(雷神の小槌)

祖力が数十万ボルトの高圧電流に姿を変え、ボディアーマーの首につけられた端子から放たれる。悲鳴をあげる間もなく、男は倒れ伏して痙攣し動かなくなった。

男の気絶を確認すると、不意に両足が笑いだした。まるで関節という関節が焼きついてしまったように、ほんの少しも動くことはない。

勝利の爽快感よりも、全身のだるさといままで体を鍛えていなかったことの後悔が上回って、散々な気持ちのまま尻もちをついた。とりあえず全部片付いたら、ランニングでも始めてみよう。勢いで出てきてしまったが、こういうのはやっぱり向かない。昔、あきらめて正解だった。

「もう、二度とやらない」

乱れ出した息をそのままにしながら、グラビティ・エラーに目を向けた。父の形見の黒い銃身を、筋肉痛で震える指はしっかりと握りしめている。

「まあ、いいか」

勝手に出てきて足手まといになる、と最悪の事態にはならなかったからよしとしよう。あとは、兎季が終わらせるのを待てばいい。戦いよりも、伝えなければいけないことがあった。

痛みを訴える腰をかばいながら横になると、葉月は説明の言葉を留意し始めた。

ふらふらと立ち上がる現神に駆け寄りながら、兎季は心の底から

吐き捨てた。

「なんで来ちゃったんだよっ」

葉月に対する疑問が心の中で何度も何度も反芻され、それがチリチリと怒りに変換されていく。巻き込まないために一人で出てきて一人で戦っていたのに、その労力と苦悩をすべて水の泡にされたのだ。怒らない方がおかしい。

（理由はあとで説明する？ ああ、説明してもらおうじゃないか）
放つとけなかっただけ、だったらぶん殴ってやる。自分の努力と苦悩を納得させてくれる説明とやらを、きっちりしてもらおう。

兎季の接近に気付いた現神は、ピアス穴だらけの全身で一番大きな穴のあいた左肩を抑えながらわめき散らす。

「いつてーな！　なんだよ、みんなクズの癖に！　ぜってーゆるさねえ！」

現神が怒りと痛みに任せて、物理力となつたでたらめな量の祖力を四方にまき散らした。障壁展開だけで爆風となつた祖力がグラウンドの土を巻き上げる。もうそれは防御とはいえない、絶対的な破壊力の塊だった。

だが、兎季にとってそれはなんの障害にもならない。現神が放出した同じだけ、もしくはそれ以上の祖力を自分の前面に集中させ、無茶苦茶に暴れる破壊力の嵐を無理やりこじ開ける。

まるで水と鉄塊。それほど祖力の密度に差があった。現神の方は見た目こそ派手だが、結局制御を失って無秩序に暴れまわっているだけで、力を最適に統制できる兎季の敵ではなかった。

（だけど、ちよつと安心した、かな？）

苦労と心労を徒労にされたことに怒りを感じる一方で、彼がきてくれたことを心のどこかで喜んでいることも確かだった。あれだけ彼の事情に踏み込んだのに、なにも言わないで出て行ったのに、彼は悪態の一つも吐かなかった。風邪で倒れた自分を手当てしてくれたときのよう、そのあとずっと親切に世話してくれたように、一緒に戦ってくれている。一番避けようとしていた事態のはずだった

のに、それを心強いと感じている自分がいた。

一步、また一步と、吹き荒れる破壊の嵐の中を臆さず進んでくる姿は、現神の理解の外側のものであった。ピアスだらけの顔が引きつった笑みを作ろうとして、次第に別の感情を映していく。

「はは、はっ、なんだあんた……？　クズの癖に、俺に盾突こうつてのか……？　来んなよ、クズ……」

「クズクズって、ボキャブラリーが足りないなあ」

正直な感想は、自分自身にも向いていた。結局これが終わったら、彼になんて言えいいのだろう？　ありがとう、だろうか？　それとも、ごめんなさい？

現神と兎季の距離は、もう手が届くほどまで迫ろうとしていた。現神が根源的な恐怖から吹き荒れていた祖力を兎季に集中させる。全方位から殴りつける衝撃の嵐は地面を砕くほどの威力を持っていたが、そのかけらも兎季に届くことはない。

兎季は刀身に祖力をまわせると、前面に張っていた障壁ごと下段から切り裂いた。大気に斬線が走り、そこへ壁を作っていた祖力が濁流となって流れ込む。エネルギーの本流は吹き荒れる敵の破壊力すら捻じ曲げて巻き込み、大槍にとなって現神に突きたたった。

現神も攻撃に回していた以上の祖力で受け止めるが、耐えきれははずがない。その莫大な威力に対し、持てる祖力のすべてで予先をずらすのが精いっぱいだった。たたらを踏んでバランスを取りなおす、その脇にはすでに、刀を下段に戻した兎季が回り込んでいる。

（起動、神斬の太刀）

幻影の巨人による急旋回の慣性を乗せて、現神の手首を打ちあげる。斬れないはずの刃はそのまま手首を通過し、喉元にぴたりと狙いを定めた。遅れて、ボトリと血まみれの手首が転がる。

「え？」

刀を模造品と信じていた現神は、鮮血を滴らせる自分の腕の先端を、信じられないという目で見つめていた。

兎季の刀は、微細な刃をびっしりと格納した一種のチェーンソー

だった。高速円循で作られる遠心力で刃を展開し切断する。構造物を破壊するための工具だが、刀という形と手ごろな重量のおかげで対人用にも使用できた。

動揺する隙、痛みに悲鳴を上げる間すら与えない。兎季は左手のベアハウンドを手放すと、喉元の切っ先をそのままに手のひらを現神の心臓の上に添えた。

（PAS威力制限、最小）

PASの絶妙な補助によって足先から腰までに練り上げられた力が、腹筋の増幅を経て肩から左の肘へと出力される。体の中でのたくる龍のような本流を手首で支えて、左手でほんの一センチほど現神の胸に押し込んだだけ。だが最小出力とはいえ、強化外骨格の桁外れた臂力を上乗せされた全身のトルクは波打つ刃となって現神の体内を駆け巡った。

現神は不必要な装飾に歪んだ顔を無様に引きつかせ、白目をむいて倒れる。赤が多分に混じった吐しゃ物が降りかからないように注意しながら、兎季は現神の下から這い出す。

そして刀を納め、代わりにジャケットからポーチごと医療セットを外すと、気を失った現神の治療を始めた。最低限の止血をしてから、針のない注射器で鎮痛剤を流し込む。神斬の太刀の切断はいわゆるクリーンカットにはほど遠く、縫合による接着は無理だろう。

赤く染まった指をガーゼでふき取ってから、兎季はゆっくりと立ち上がった。周囲警戒、索敵。訓練で叩きこまれた通りに意識をめぐらし、安全確保。

立っているのは兎季だけだった。敵だけで三十弱の体が横たわる中に、唯一佇む黒装束という外見は、傍目死神以外の何物でもない。だが、実際死者は〇名。重軽傷者多数ではあったが、兎季は人殺しの装備を与えられながら誰ひとりとして殺しはしていなかった。兎季の記憶では、神喰い龍の戦闘で死者を出すことなく現神を鎮圧できたことは少なかった。

しかし、三十対一という戦力差をひっくり返したことも、死者〇

名の栄誉も、彼女には何の意味ももたらさなかった。

正確には、それらのことに意識が行かないほどに、兎季の心を占める思いがあった。

その思いに従うまま、大の字に寝転がっている葉月の元へと歩いていく。ナイフ使いの男は彼の近くで伸びていた。

葉月の脇にまで行くと、彼はいつも通りの不機嫌な視線を持ち上げた。

「お疲れ」

疲れ切った一言が兎季の耳に吸い込まれ、不意に噴き出してしまった。

「どうでしたか？ 初陣は？」

「もう絶対にやらない。昔、あきらめて正解だった」

心底しみじみといった深いため息をつき、その動作で生じた筋肉痛に「あいたたた」と呻く。パソコンに向かって理屈をこねている時に見せる姿とはまるで正反対で、そのギャップにさらに笑いがこみ上げる。

（ほんとに、兄さんは）

彼との接点はたった一週間。なのに、もっと多くの時間を共有してきた気がする。自分が思っている以上に、兎季は葉月の姿を知っていることに気付いた。

不意にUMIが震えだすまで、兎季は笑い続けていた。

コートのポケットから端末を取り出し、通話をタッチ。相手は隊長の番号だった。

「はい、羽矢間です」

『兎季ちゃん、無事？』

異常に慌てた声だった。耳をすませば、通話の背景にくぐもったサイレンの音が聞こえた。どうやら彼はまだ現場らしい。

「はい。こっちは片付きました。負傷者多数なので、救急車の手配を頼みます。重傷なのもいますから」

そう言って葉月を見下ろすと、彼は懔然としてそっぽを向いた。

筋肉痛も立てないぐらいになれば立派に重傷だ。

だが、隊長は兎季の言葉すべてを無視した。

『そんなのはどうでもいいから、早くそこから逃げて!』

「はい?」

逃げるものにも、いますべて片付けたところだ。そう報告したのに、隊長は緊張と焦燥をにじませた怒声を送ってくる。

葉月にハンドサインで警戒を指示する。隊長の様子を察するに、なにか問題が起きていることは疑いようがない。

「何か問題ですか?」

『PSXはこつちじゃなかった! 対装甲装備の黒岩くんをそつちに送ったけど、すぐに逃げて!』

危うくUMIをとり落としそうになった。現神に奪われた、対現神用の掃討兵器がまさかこつちに……。

呆けている場合ではない。兎季は通話を切ったUMIを乱暴にポケットにねじ込む。その間に頭の中は退路と所要時間を計算し始めていたが、思いつく行動の中に交戦は入っていないかった。

「逃げます。兄さん、立てますか?」

焦燥をにじませて尋ねる。しかし、答えは返ってこない。なにをまごついているのか、と大声を出そうと葉月を見て、兎季も言葉を詰まらせた。

彼の鉄面皮が口を半開きにして見つめるその先に、一人の鎧武者がいた。

百メートル以上離れていても格段に感じる存在感は、その四メートルという長身のためだ。肩あてをつけた広い肩幅に、長い一對の腕。人間のそれを図太くした大腿部と、鳥類を思わせるすらりとしたひざ下を組み合わせた両脚。背中には電子機器を満載したバックパックを接続し、横からのシルエットは力強い登山家のようにも見える。全身を丸み帯びた銀色の装甲で覆い、頭部には真紅の光を放つ単眼だけが埋め込まれていた。手には主兵装である、ランスのように長大な十二・七ミリ機関砲。

P S X 発展型外骨格機攻が、その巨大な砲を持ち上げる。
いままで聞いたどんな爆音にも例えられない砲声が響くのと、二
人がありったけの力で障壁を展開するのは同時だった。

五章

月明かりの差し込む廊下に二人分の息づかいが響く。月の薄明かりと非常灯が青白く浮かび上がせるのは、グラウンドから一キロほど離れた位置にある農大校舎の一画だった。

「PSXって、反則だろあんなもん」

陸に上がった魚のように口をパクパクさせながら、葉月は吐き捨てた。

設置型の機関砲を流用した十二・七ミリ弾の前には、個人障壁など紙きれに等しい。防ぐのではなく弾道をそらすように展開したオダワラ式障壁と、兎季があらかじめ仕掛けてあったトラップで照明を落として、あとはPASとTシステムを使って全力ダッシュ。

全身筋肉痛でも人間は案外と動くものらしい。それが図らずも運動不足人体の耐久試験を経験した葉月の正直な感想だった。

だが、どんなに無理を利かせてみても限界は低い。二人の逃走劇はこの校舎で終点だった。

乱れた息を整えながら、兎季も悪夢に喘ぐように呟いた。

「ここで迎え撃つしかないですね。といっても、勝機はありませんが」

兎季の言葉は認めたくないが、葉月は頷くしかなかった。

PSXの開発コンセプトは、『対現神戦闘の切り札』であった。

現神の天敵となるべく開発されているということは、すなわち龍とも呼べる兎季にとっても同義ということ。それ以下の戦力しかない葉月など論外である。

点鐘同盟を使って助けを呼ぼうかと思ったが、警察は奴らの息がかかっているから援護をよこしてくれる可能性は低いし、仮に機動隊の出動があつたとしてあの新兵器に対抗できるとは思えない。PSXを出してきた時点でもうなりふり構ってなどいないのだから、いらぬ犠牲を出すだけだ。

だが、これだけの事件がリークされれば、裏で糸を引いている元締めを槍玉にあげることが出来るだろう。『矜持の宇宙』の壊滅は必至。

大局的な勝利は着実に手に入りつつあるが、問題はこの苛烈な極所戦をどう生き残るか。

「お前だけでも、逃げる」

「嫌です」

諦めに吐き出した弱音を少女は自然な言葉で一蹴する。動けないのは葉月だけなのだから、兎季には十分に余力があるはずだ。

「勝手についてきて、足手まといはご免だ」

「勝手についてきたんなら、せめて僕の言うことを聞いてください。ここで迎え撃ちます」

平行線。しかし、一体何ができるといえるのだろうか？

不意に、右手が握っているものの存在を思い出す。非公式ながら拳銃用としては最強の七十五口径弾。それが三発。筋肉痛で痺れた指の上で、グラビティ・エラーがずっしりと重さを増した気がした。（頭くらいなら、吹っ飛ぶよな）

その考えが浮かぶと同時に、かぶりを振って頭から追い出した。魅力的な手段の一つだが、実行できるほどの度胸はない。だが、敵が強大すぎる以上、できることはそれくらいしかないのも確かに思える。

完全に諦観を決め込む葉月の隣で、兎季はベアハウンドの装弾を確認し、刀の刃を見直す。

「大体、そんなことを言いだすんだったら、来ないでください」

「それは、後悔してるよ」

「ならどうしてきたのか、説明してくれますか？」

言われ、思い出した。絶体絶命の現状でも、今を逃せばそれを伝える機会は巡ってこない。

葉月は自分のUMIを取り出すと、一通のメールを表示して兎季に渡した。

怪訝な顔をして兎季は画面に目を落とし、中身を読んでいく。そして、目を見張った。

「これが、五年前の真実だよ」

誰がこのタイミングで送りつけてきたのか。そこに記されていた事実には流石の葉月も絶句したが、そこから生まれた衝動のおかげで、グラビティ・エラーと旧世代型を抱えて部屋を飛び出せた。

UMIのウィンドウを閉じて、兎季は葉月に返す。その指は彼女の感情を代弁して震えていた。

葉月もメールの内容を思い出しながら、それでも、と気持ちを固める。

逃げろ、と再度紡ごうとした先に、兎季が震える声を被せた。

「これじゃあ、二人で生き残らなくちゃいけないじゃないですか」

「兎季……？」

「これじゃあ、勝たなきゃいけないじゃないですか。二人で、絶対に……！」

震える唇を決意で固めるように噛みしめて語られる言葉に、迷いはなかった。決意を薪にして再燃した輝きを瞳に映して、兎季は葉月の肩を掴んだ。

「二人で勝ちますよ、兄さん。一緒に考えて、絶対に！」

兎季の思いがけない叱咤に、葉月は口を半開きにして応じるしかできなかった。

それから、ゆつくりと苦笑に変わっていく。その目の輝きにあてられ、葉月の中でも導火線に火がつくのを感じていた。

（まったく、この馬鹿妹は、どこまで力をくれるのだろうか？）

腹の底から力がわいてくる。特に合理的な理由はないが、意欲と衝動が勝手に力に変換されていく。わりと人間の心理とは単純で、向こう見ずなのだ。そして、それが心強い。

葉月は諦観を決め込んでいた脳内を一新、思考の網を張りなおす。あきらめに至った条件を再思考。たとえば相手は強大ながら試作機、どこかに致命的な欠陥があるかもしれない。全身が筋肉痛だとか、

慣れない戦闘のストレスだとか、そんなのは関係ない。そんなことがあっても、考えることはできる。

隣の兎季も、自分の持っている武器を広げて思案している。どれも対人用の武器だが、手榴弾あたりは直撃すれば有効かもしれない（順当に狙うなら脚の関節だが、防御は堅いな）

機構的な要素だけなら、複雑で防御も脆弱にならざるを得ない関節は最高の弱点だ。しかし、そういう部分には必ず、祖力による防御が堅牢に施されている。

いや、ただ威力を考えるだけなら手段はいくらでもある。それこそ、つい先日完成していたアレなど最高だ。問題は銃器を無力化する祖力防御と、近接を許さない機関砲だ。

武装面ではなくソフトウェアでもいい。あるいは動力機構でも、操縦系統でも……。

「操縦系統……ああ、そっか」

思い至ると同時、あっさりとした納得がこぼれた。技術者にとってはあまりにも当前で、思いついたことに感動がないほどの答えが頭の中で明滅する。

自分のUMIの中には、アレが入っている。それを使えば、PSXといえどもひとまりもないはず。そして、今の答えを使えば、十分にそれを使う機会を作れるだろう。

怪訝に覗きこんでくる兎季に、葉月は理系らしくなく、結論だけを告げた。

「勝てるかも」

校舎群は大まかにいうとコの字型に配置されている。校舎と校舎の間は大きな広場となっていて、農大らしい緑の多さが特徴的だった。中央に造営された噴水をいくつかのベンチが囲んでいる。昼間は学生たちの憩いの場となっているのだろう。

そんな噴水の縁に、抜き身の刃を把じた兎季が、一人悠然とたずんでいた。街灯や校舎の照明はすべて落としてあり、彼女のUM

Iで一括操作できるようになっている。

夜闇にうつすらと青白く浮かぶ世界。人工物の存在も造られた緑も関係なく、まるで深海に沈んでしまったかのような風景が横たわる。しかし、兎季は見とれるわけでもなく時間をはかっていた。

堂々とした居住まいに反し、兎季の心臓は冷たい鼓動を刻み、ボディアーマーの下では気持ちの悪い汗がぬるりと伝う。

そのあとの彼がした『作戦』の説明は、いつも通りいまいち内容のつかめないものだった。PSXの操縦特性と弱点を説明されても、その手の専門家ではない兎季にわかるはずもない。

しかし、そこは問題ではなかった。彼ができると言った以上、勝算はある。

そう信じられるのは、一緒に過ごした日々にも起因するが、それ以上に彼が根本的な部分で技術者だからだった。

自分の専門が戦士なら、彼の専門は技術者。そして、専門家の判断に対し門外漢は黙って従えばいい。少なくとも、兎季にはそう思えた。

そう。あとは、自分が応えるだけ。

「約六分。僕の祖力と技量で、はたして稼げるか」

葉月との約束を思い出す。六分、それで彼は勝てると言った。それをひねり出すのは、これからの自分の仕事。

UMIを握りしめ、タッチパネルを操作。デフォルメされた爆弾のアイコンをタッチすると、周囲のありとあらゆる電灯が一斉に光を宿した。途端に深海が昼間に姿を変え、視界が白く塗り替わった。闇夜の広告塔のように、この灯りはどこからでも見えるだろう。

もちろん、まだ付近でこちらを探しているPSXにも。今までの人生で最も長い数分が、幕を開けた。

雷鳴が轟き、火線が踊る。砲弾にえぐられる土砂をはいくぐりながら、兎季は広場を縦横に駆け回る。視界には、十二・七ミリ機関砲を腰だめにかまえたPSXが常に納められている。

整然とした緑地だったはずの広場は、様相を一変させていた。春には鮮やかに花をつける桜並木は遮蔽物にされてねこそぎ倒れ、噴水は一番に兎季の身代わりとなって消滅していた。

弾痕の刻まれた校舎の脇を、姿勢を低く這うように走る。着弾の轟音がすぐ後ろを追いかけ、降りかかる破片が背中をたたいた。

掃射の間隙を縫って、右手に抜いていたベアハウンドを牽制に撃った。彼我距離はざっと二十メートルあったが、大量の光源と祖力での反動制御によって狙いは外れなかった。しかし公式最強の五十口径弾でも、そのぶ厚い装甲と接触して火花を散らすだけ。湾曲した形状そのものに防弾機能があり、装甲への直撃には障壁展開すら必要ない。

それでも健気な発砲に応えるように、一発が真つ赤な単眼に直撃した。いや、直前に展開された障壁が弾丸を明後日の方向に弾くが、その一瞬だけ砲撃が止まる。

その隙に壁を蹴って、毬のように跳躍。立体機動を駆使してPSXの射線から抜け出しながら、ベストに固定してあった手榴弾を祖力で弾きだした。

そのまま破片払いと防音に張っていた障壁の祖力をUMIで変換し、磁力のチューブを構成する。ふわりと浮かんでいただけの手榴弾は磁力の見えない手に引かれ、直線を描いてPSXに突き刺さった。

巨人の上半身ほどの火球が発生し、PSXの装甲を飲み込む。攻撃型手榴弾は効果範囲を狭める代わりに、高い破壊力を持つ。

直撃した、なんて希望は持たない。巨人がたたらを踏んでいる間に、背後に回り込むように走りながら弾を入れ替える。案の定障壁によって無傷のPSXは、バランスをとりなおしてすばやく身を返すと、砲撃を再開する。

かれこれ三分、兎季は死の縁での綱渡りを続けていた。ついでにPSXと遭遇するまでの一分を加えれば四分。言葉にすればあまりにも短い時間だったが、戦局は秒単位で兎季を追いかんでいた。弾

薬も祖力も消費一辺倒ですでに底が見えているし、頼みの綱であるPASの機動力強化もそろそろ限界だった。

しかし、すべてが悪条件というわけではなかった。

一つは無計画にばら撒かれた砲弾。艦載機銃を流用しただけにその連射弾数は生半可ではなく、弾切れが近いのか砲撃も最初の苛烈さはなくなっていた。

二つは操縦者の疲労。祖力を利用した意思操縦のおかげで簡略化されているとはいえ、長時間の慣れない行動は肉体的にも精神的にも負荷を課す。戦闘機動とくればなおさらだ。

これらから悪条件を差し引けば、残高はおおむね零だ。若干の赤字には目をつむるとして、葉月との約束を全うするまであと二分。それまでどれだけ赤字が増えないように戦えるか。

生き残っていた木に飛び乗ろうと足に力を蓄えた途端、ガクンと膝が折れた。そのまま関節が外れてしまったように片膝をつく。

しかし動揺している暇はない。好機とばかりに砲弾をばら撒くPSXから逃れるべく、移動手段を幻影の巨人にシフトして校舎の影へと滑りこむ。コンクリートの外壁の向こうに着弾の振動を感じながら原因を探すと、左足の防弾プレートが粉々になっていた。PASの外骨格は全身に施された装甲を使用しているため、それが壊れると骨折したのと同じになる。

前のグラウンドで一発だけ直撃を受けていたことを思い出し、歯噛みする。普通ならその程度で壊れはしないのだが、現神との一戦やPSXとの高機動戦による過負荷のツケが回ってきた。戦力収支は完全に赤字決算である。

あと一分半。頭で計ってきた時間は無情な正確さをもって、兎季にのしかかる。

背後の振動が大きくなっている。一発一発に必殺の威力を持つ十二・七ミリ弾を集中すれば、ぶ厚いコンクリート壁でも簡単に粉々にできる。あまり長居はできそうになかった。

兎季は腹をくくると、祖力を足元に集中させる。幻影の巨人だけ

でどこまで動けるのか、前例のない耐久実験のような話だ。

兎季は短時間で癖になった一息を入れると、陽動の手榴弾とともに滑りだした。

他愛もない。

PSXの操縦者の男は、狭苦しいコクピットの中でそう思った。

PASの延長線という位置づけのPSXであるが、操縦者はあまりそういう印象を持たなかった。PASが本当に服であるのに対し、PSXは祖力による意思入力型の操作とフィードバック機能により、着ている・操縦しているというより、PSXになっているというほうがしっくりきた。

機体の腰あたりのシートに浅く座り、シートの両脇につけられた電子機器操作用のスティックを浅く握る。胴体部分に半分立ったような操縦姿勢で、HUD ヘッドアップディスプレイの中で跳ねまわる小柄な影を追い続けていた。

画面には照準マーカーと残弾、あとは残り稼働時間のみが表示されている。

スティックを操って表示を変更すると、サーモセンサーのような極彩色の画面に変わり、一瞬の後にレッドアウト。舌打ちして元の画面に戻す。祖力を検知するセンサーは効果範囲が狭い上に、いまままでに発散された祖力が大きすぎて機能しなくなっていた。

悪いと言えば、照準通りに弾丸を飛ばせない照準補正ソフトの精度も問題だった。

（どここのゴミだ？ こんなもん作つたのは）

機体の運用には祖力が多分に使われるため、PSXのソフトウェアのほとんどは戦闘式術研究室謹製の品ばかりだったが、射撃系のソフトだけはその看板が泣く出来だった。

（まあ、いい）

圧倒的な優位は揺るいでいない。男は舌なめずりしてはやる気をおちつけ、射界を滑るように駆ける敵影を追いかける。さっきまで

立体的な動きで射撃を避けていた小柄な姿は、一回体勢を崩してからその高い機動力を失っているようだった。PASに不具合が出たのだらう、移動手段はもっぱら幻影の巨人にシフトした様子だ。

操縦士の彼の本職は、戦技研の研究員である。PSX関連の部署に所属していた、いわゆる日陰者だったが、その本性は報酬と引き換えに『矜持の宇宙』へと情報を横流しするスパイ。所帯もなければ研究室での存在感もなく、大きな功績もあげられないままくすぶっているところに持ちかけられたスリルと報酬は、麻薬のように効いた。

そう、まさしく麻薬だった。違法収入をダシにされた結果、PSXの強奪にまで手を染め、ずるずると今の状況を甘んずるところとなっている。

だが、それらはすでに彼にとってどうでもいいこととなっていた。どの道に倒れようと、堕ちる先は変わらない。スリルのために流出させた情報や自分の身辺を考えると、最後は悲惨なものとなるのは間違いない。なら、最後までその麻薬に身をまかせてやろう。

本人も、ただのみつともない開き直りであることをわかっていたが、それを言うなら、こうしてPSXに向かって来るこいつも同じに見えていた。

低い姿勢で弾幕をかいくぐる姿は、地面に這いつくばりながら決定した結末を必死にかわし続けているだけに見えた。閉鎖性の高い装甲と電子装備で固められた清潔な機内からは、それはとても無様で泥くさくて、なにより現実味を損なっていた。

稼働時間の残りから逆算して、ここで戦闘を始めて約四分が経過していた。この対現神用新兵器は強力な現神にも十分に制圧力を発揮できるはずだったが、実際は現神級の祖力の持ち主一人に大分時間を食っている。社会側ということであえて龍と呼ぶならば、その力はやはり化け物だった。

だが、そんな戦況もさじ加減次第。

照準マーカーを補正ソフトの数値から少しだけ龍の進行方向に動

かす。

追いつがる弾丸との距離を一定に計っていた龍は、突然の変調に驚きながらも、急制動をかけながらオダワラ式障壁を炸裂させた。直撃コースの弾丸は弾きとばされ、その反作用で空中に跳ねあがりながら身を返す。並の兵士では仮に祖力が追いついても絶対にできない、その姿はまさしく天空にうねる龍。

だが、無理やりの空中機動からPASのない状態での着地は不安定を極め、龍は銃創だらけのアスファルトに躓き、一瞬だけ動きが止まる。龍が再び動きだす前に火線を固めて、浮いた腰を戻させる。よく見てみれば、龍はまだまだ子供だった。短い髪にまだあどけなさの色濃く残る中性的な顔立ち。しかしその瞳には、幼いながら凜とした気迫が揺らめき、彼が思うような開き直りや自棄をきっぱりと否定する強い意志と思考の光があった。

「なんだこいつは？」

無意識のうちにでてしまった言葉がHUDにぶつかってはね返った。その余韻は彼の小さな自尊心を切り刻みながら、憎悪へと姿を変える。

銃口はもう向けられているのに、なぜそんな目をしていられる？

「ふざ、けるな！」

成行きの中で出会った敵に初めて憎悪を抱き、照準を動かして発砲する。祖力のフィードバックと機体の微振動が、初めて発砲にリアルさを付加する。ばら撒かれた弾丸は至近弾として踊りまわるばかりで命中しない。咄嗟に腕で頭をかばった龍だったが、即座にそのことを見抜きガードを解く。

そして、踊り狂う火線のなかおもむろに立ち上がり、キツとPSXの単眼を睨みかえしてきた。そこに至近弾への恐怖は微塵も存在していない。それが、彼のとるにたらない最後の自尊心を粉々に打ち砕いた。

ここまで追い詰めれば残弾を気にする必要はない。時間をかけて、恐怖を教えてやる。

暗い炎がのたくる心は、戦闘開始からの経過時間があと十秒で五分となることと、先のグラウンドにいたもう一人の不在に気付かなかった。

戦場となっている広場を見渡せる校舎の屋上で、葉月はじつと二つのUMIへ数列の入力を続けていた。

コンクリートの床には、巨大な円陣が一面に刻み込まれていた。屋上の幅限界まで直径を確保した巨大な円が一つ、その中で直径一米ートルほどの小さい円が一定の法則で絡み合う。手彫りではみ出したり角張っていたりする円弧を、同じく不格好な数字で編まれた数列が縁取っている。

導力陣。導力数式列の大本となった祖力運用手段だが、小円の一つにおさまっている葉月自身、UMIの進歩した現代でここまで大きな物を描く機会があるとは思っていなかった。コンクリートを彫るのに使った兎季のナイフ類は、刃を潰して葉月の後ろに転がっていた。チェンソー内蔵のコンバットナイフ二本は大きな線を、投げナイフは緻密な部分を削るために使われ、その役目を全うした。

その陣の役割は祖力のブースト。だが、電気や熱などを変換する一般的な祖力増幅器とはちがい、そこに流れているのは術者たる葉月祖力だけだった。直接祖力を生産できるのは意思だけであり、円陣はその中を通った祖力を通して術者の意思に働きかけ、無理やり祖力を増幅させる。無からエネルギーは生まれず、人為的な意思への作用による祖力増幅は古来、魂を削る禁呪とされてきた。

PSXの現神以上に強力な障壁を打ち破るために、趣味で調べた程度の緊急用増幅プログラムを書き起こしたわけだが、葉月も円を巡って体に戻る祖力が自分の中のかを燃料に祖力を作っているのを感じる。体内にとどめられずに陣へ流れ出した祖力が、循環して更に強大な祖力を生み、陣の中に流れる祖力はすでに全快の兎季すら凌駕していた。

その力に酔っている暇はなく、二つのUMIに導力数式列を作り

上げていく。父の旧型UMIにはグラビティ・エラー用の超高祖力狙撃プログラム、自分用の新型UMIにはTシステムの狙撃姿勢の追加プログラム。旧型はキーボード、新型は祖力による直接入力で二つの違うプログラムを仕上げていく。本人は気づいていなかったが、そのスピードと正確さはすでに神業の域に片足を踏みいれていた。

戦闘のすべてがド素人の葉月にできることは、導力数式列の構築だけ。だから、それですべてを補助する。自分の技量を自身の助けにできないで、なにが技術者か。

戦闘の音が悪魔のように自分をせかすが、あえてそれを追い出さず、自分を追い込む。矢面に立っているのは兔季だ。兔季が戦っているのはすべてが陽動のために、足止めと増幅中の祖力を気づかせないため。

一重に葉月の作戦を成功させるため、葉月だけを信じた戦い。自分よりずっと背も年も小さい女の子、大事な妹が、自分を信じて戦っている。

UMIのはじに表示されたタイマーは、残り三十秒を示していた。約束まであと三十秒、と双方のUMIとも最後の一文字が打ち終わる。単純な走査をかけて矛盾点を浮き立たせて、修正しても残り二十秒。

旧型UMIからコードを引っ張り出して銃身に接続し、はね返るように構える。落下防止フェンスの間から銃口を突きだして、照門と照星の向こうに戦場を捉えた。

その時点で、兔季は毅然としてPSXの放つ銃火の中にたたずんでいた。どうして足を止めたのかはわからなかったが、跳ねまわる至近弾にひるまない姿に、葉月も銃把を握る手をしっかりと結び直す。

「焦るなよ」

今にも引き金を引こうとはやる呼吸に言い聞かせる。PSXは圧倒的な有利を盾に彼女をいたぶっているが、兔季は葉月だけを信じ

ている。自分が焦つたら、すべてが無に帰す。

あと十秒。それは葉月の体が耐えられる限界に祖力が達する瞬間である。現に魂を削る禁呪は、確実に葉月の喉元に死神の鎌をかけていた。凡人を達人にするＴシステム以上に、人を龍にする術はリスキーである。

でも、今日くらいは限界を突破してもいい気がしていた。龍にはなれないからと技術に逃げていたおかげで、状況を変える切り札たりえているのだから、今の自分を全肯定してもいいはず。

（まあ、結果オーライだ）

理系らしくない答えをすんなり受け入れ、そつとレーザー照準器のスイッチを入れた。レーザーが標的に反射し、真紅の架け橋となつて弾丸の軌道情報を二つのＵＭＩに流し込む。Ｔシステムに同期したＰＡＳが姿勢を整え、銃口の角度が補正される。

同時に、背後の膨大な祖力が銃身と二つのＵＭＩに激流のように流れ込む。自分のＵＭＩの祖力許容量は一般人より大きかったが、父のＵＭＩよりは格段に劣る。しかし、父の龍の名に遜色ない祖力に対応するＵＭＩでさえ、増幅した祖力に耐えられるかどうかはわからない。ただ、信じるだけだった。

膨大な祖力の動きにＰＳＸの鈍感なセンサーも警報を鳴らすだろうが、間に合うはずがない。

ためらうことなく、引き金を引いた。想像を絶する高負荷でシリンドラーとハンマーが砕けたが、吐きだされた弾丸の妨げとはならなかった。

祖力が反動を抑え込んだため、発砲に現実感に伴わなかった。ただ銃口で膨らんだ巨大な火の玉と、弾丸を導くための磁気チューブの祖力が描き出す蒼い光のコントラストが、まるで青空のように澄んでいた。

一瞬だけの蒼穹が消えるのと共に、自分を構成するありとあらゆるものを手放すような喪失感を感じて、葉月はフェンスへと倒れ込みながらそつと意識を失った。

PSXの操縦系統はUMIの導力入力と同じく、祖力によって入力された操縦者の意思を機体の動きに反映させる、一種のマスタースレイブ方式を採用していた。そのため、祖力を通して入力された情報を、機体の動きへと翻訳しなければならない。

その翻訳パターンをストレージしているコンピュータを破壊すれば、PSXの操縦系は麻痺する。

葉月の説明はここまで要約されていたが、やはり兎季にはさっぱりわからなかった。

ただ、彗星のような蒼い尾を引いて飛来した七十五口径弾が、障壁と装甲をまとめて貫いてPSXのバックパックから火を吹かせた瞬間は、しっかりと目に焼きついた。

記憶領域に直撃できなくても、弾丸が内包した膨大な祖力は障壁や装甲を貫通した程度では消費されきることはなく、バックパックの中で高熱と電圧の刃となって電子機器全体に致命傷を刻みこむ。

単眼が明滅して剛腕が機関銃をとり落とし、PSXは棒立ちして沈黙する。葉月の言った通り、無敵に見えた掃討兵器はその戦闘力を失った。

その光景を、兎季は呆然と見つめた。

「ほんとにやったよ、あの人」

自分よりもずっと非力なただの技術者が、状況をひっくり返した。どこからあんな祖力をひねり出したのかわからないが、この一撃の方が龍の吐息にふさわしい気さえた。

落としてしまっていたベアハウンドを拾ってホルスターに納め、間合いを計りながら棒立ちするPSXに近づいていく。もしもの場合に備えて二つの戦技プログラムをUMI上に待機させ、自分の間合いまで距離をつめる。これならなにか起きてても即応できる。

それはPSXにとっても同じだ。

距離が縮まったことを感知すると、PSXは単眼を光らせ、兎季に半ば倒れ込むように飛びかかった。機械の巨人の重量はそれだけ

で立派な武器となる。

だが、兎季は慌てることなく用意していたプログラムの片方を使
った。

展開されたのはぶ厚い斥力の壁、ではなく祖力で編まれたネット
だった。蜘蛛の巣状に張り巡らされた祖力が、重量を分散させ動き
を封じる。

改良ナガシノ型対重量障壁。近年は車両なども障壁を使う場合が
多く、それに対抗するために障壁干渉能力を追加した最新版がつい
数ヶ月前に開発された。開発されて日が浅く、兎季も任務に着くぎ
りぎりに入手した代物だった。

その原型を組み上げたのはどこかの学生だった、という話を頭の
片隅に思い出す。

（兄さんみたいな人なんだろうな）

当たり前なことだが、UMIにインストールされている導力数式
列にはそれぞれに開発者がいる。自分は思っている以上にたくさん
の人たちに支えられているのだ。

万感の思いを胸に、もう一つのプログラムを起動する。葉月が作
った、龍の吐息。

（僕に託してくれた、力）

ナガシノ型障壁に絡め取られ動きを封じられているPSXに、兎
季は刀を持ちあげながら告げた。

「早く脱出しないと、どうなっても知らないよ」

肩の高さで両手を結び、八双に構える。刀身に力を集中させると
同時に、全身から残った祖力を解放する。吐息を吐く下準備。戦闘
とPSXの増幅器が垂れ流した祖力で濃密になった大気に兎季の力
が混じり、彼女の全身は蒼い燐光を纏った。

たった十五の、性別すらよく間違えられる少女。しかし、今の姿
はまぎれもない龍だった。

バックパックの火災と危険な祖力を検知したPSXは、緊急用の
強制脱出装置を発動させる。バックパックが切り離され、巨人の背

中から針金のように細い男が排出された。

男はなにが起こったか理解できないまま、龍の姿を呆然と見つめるしかなかった。

兎季は八双から袈裟がけに、刀を振り抜いた。

「起動、零龍^{ゼロ・エッジ}の吐息」

すべての光が真紅となつて、兎季が切り裂いた空間から一気に噴き出した。物理学の基礎の一つ、圧力は低いところに集中する。高密度に刻まれた刀創に激流となつて流れ込んだ力は、摂氏一万度以上のプラズマの刃となつてあらゆる物質を裁断する。

原理としては単純なものだが、強力な祖力の使い手は否応なく大気中の祖力をはねあげ、相手が強ければ強いほど威力を底上げできる。よつて、単純な原理は一撃必殺の技　吐息となる。

真紅の本流が去ると、斬線の延長戦にあつたPSXの上半身は消滅していた。物質である以上、その限界の一万度に耐えられるはずがないのだが、その威力には放つた本人さえ言葉をなくしていた。

「すつごい威力……」

元々は戦車砲弾に使用される技術で、強固な障壁そのものを撒きこんで装甲を撃ち貫く徹甲弾を参考に行っているのだから、桁違いの威力は当たり前といえは当たり前だった。

少し遅れて襲つてきた猛烈な疲労感に抗えず、兎季はその場にへたり込む。祖力も体力も気力も限界まで酷使したのだが、不思議と悪い気はせず、大きな達成感を噛みしめて一人微笑んだ。

「兄さんは、すごいや」

こんなときにまでそんな言葉が出てくる自分を更に笑う。それが気持ちよかった。

ゆらりと操縦者の男が立ち上がるまでは。

男はふらつきながら拳銃を抜くと、兎季の頭につきつけた。

現神ですらない素人だったが、全力を使い切つた兎季にそれを払いのける気力は残っていなかった。冷たい銃口に押されて上目を向くと、相手の顔が目に入ってきた。肉付きの悪い上に細い顔は病的

に青ざめていて、まるで中毒患者か夢遊病者のようだった。いつもならすぐさまヘアウンドを抜くところだが、指一本動かす体力すら残っていない兎季には、男の顔を見据えるしかなかった。

それでも、彼女の心中はびっくりするほど穏やかだった。このまま引き金を引かれれば死ぬしかないというのに、何故か漠然とした安心感があつて、その穏やかな瞳に逆に男の方が面くらつていた。

「撃つの？」

「お、女の子？」

（またか）

こっちの方が腹立たしくて、兎季はムツと額を銃口に強く押し付けた。そのまま目を閉じる。

「撃てるかな？」

口の端を持ち上げて挑発するが助かるための意図はなく、ただ頭にきたただけだった。

閉じた視界に銃声が響いたのは直後。三連射の音だったが、痛みは襲ってこなかった。

（即死って、こんなもんなのかな）

など一瞬思いもしたが、もちろん自分は生きている。そつと目を開くと、肩と足を撃たれて倒れていたのは男の方だった。

「まったく、詰めが甘い甘い」

ここにいるはずのない人の声が聞こえたが、兎季は「やっぱりなあ」程度にそれを聞いた。

首だけでふりむくと、思った通りというか予想通りというか、一人の女性が立っていた。その手には自動拳銃が握られている。

「杉井さん……」

「あ、覚えててくれたんだ。ありがとー」

緊張感台無しに微笑む杉井には、兎季も呆れるしかなかった。

杉井はそのまま操縦者だった男に近づいて銃を蹴飛ばすと、治療よりもさきに手錠をかけて拘束した。あまりにも手慣れた動作と高い射撃能力から、同業のプロの中でもかなりの手だれであることが

わかった。

「驚いた？」

「ほどほどに」

「それはよかった」

「よくないし」

小声のツツコミを無視した杉井は、秘密のヒーローが正体を明かすかのような大仰さで話した。

「あたしの所属は戦技研の防諜部でね、内偵調査中だったんだ。したら昔の教官の黒岩さんから連絡あって、個人的にきみたちの護衛もしてたってわけ」

「ということは、ずっとみていたんですか？」

「まね」

「じゃあ助けてくれてもよかったのに……」

唇を尖らせる兎季に、杉井は「冗談っ」と手を振った。

「あたしはちよつと強いだけの一般人。現神とかPSXとか無理に決まってるじゃない。それでも葉月くんに武器を渡したり、PSXの射撃プログラムを改ざんしたり、やることはやったよ」

「そうですか、あなたが兄さんに武器を渡したんですか。プロがただのド素人に」

「そ、それでも大丈夫だって思ったのよ。葉月くんについては隊長から言われていただけだし、PSXだって」

「そもそも防諜がちゃんとできてれば、PSXはここにはないはずですよ？」

「兎季ちゃん、あたしのこと嫌い……？」

そう言っただけ息をつく杉井から、兎季はぷいっとそっぽを向いた。やっぱりこの人とは調子が合わない。

「でも、葉月くんがいなかったら、兎季ちゃんも危なかったんじゃない？」

「それはそうですが」

痛いところを突かれて口ごもる兎季をみて、杉井は勝ち誇ったよ

うに意地悪く笑う。悪魔の耳としつぱをつけたらさぞ似合うことだろう。

それから、杉井は優しく目に細めて、校舎の一角に目をやった。兎季も一緒に視線を動かすと、屋上の片隅にフェンスにもたれかかる人影があった。

「まあ、きみもきみのお兄ちゃんも、よくやったってことで」

素直に褒める杉井に、兎季は満面の笑みで頷いた。

「だって、僕と兄さんですから」

絶望的な局地戦を逆転してみせたのは戦いのプロではなく、技術分野のプロだった。そうでなかったら、葉月でなかったらこういう結末にはなっていなかっただろう。

その折、遅い救援のヘリコプターの音が遠くから聞こえてきた。

エピソード

季節は春へと移り変わっていた。空気まで頬を桜色に染め、すべてがなんとなく輝いて見える季節。

そんな晴れやかな季節の片隅で、苛立たしげに靴を鳴らす少女が一人。

「兄さん、なにやってんだろ？」

都内のある高校の校門脇、入学式の看板の横で彼女は呟いた。

女子の制服を着ているから辛うじて性別の判断がつくが、そうでなければ『かわいい男の子』に分類されそうな中性的な顔立ちと残念な体型。ついでに背も低く、秋口から伸ばしている髪も焼け石に水である。肩くらいまで髪のある男子など、今では珍しくない。

他の新入生はすでに校舎の中で、彼女だけが閑散とした校門に守衛のように棒立ちしている。

一人でいるのを見兼ねて、生徒誘導をしていた教師が声をかけた。

「きみ、新入生だね？ どうしたのかな？」

「まだ父兄が来ないだけです」

できるだけ苛立ちが表面に出ないようにしたつもりだったが、言葉に混じる棘は隠し通せるものではなかった。

そのとき、黒塗りのワゴンが猛スピードで駆けてきた。そして急ブレーキのけたたましい音とともに彼女の前で停止する。

やっとか、と息をつく兎季だったが、窓から顔を出したのは目当ての人物ではなかった。

「なんだ、隊長ですか」

「なんだとは大概だね、兎季ちゃん……」

窓から困ったような苦笑を覗かせたのは目当ての無愛想ではなく、二十代後半ぐらいの物腰のやわらかそうな男性だった。

「一緒に出席する気ですか？」

「それもよかつただけだね。でも残念、緊急召集」

「やっぱり……」

がつくりと肩を落とす少女を尻目に、後部席の扉がスライドして開く。辟易としながらも、彼女はためらいなく乗りこんだ。

おいてきぼりをくって突っ立っていた教師は、呆然としながらも入学式早々に早退しようとする新入生を呼び止める。

「えっと、これから入学式なんだけど」

「ごめんなさい、家の都合で早退です」

「じ、じゃあ名前だけ教えて」

ワゴンの重い扉を閉めながら、少女は大声を張り上げる。

「暮宮、暮宮兔季です」

騒がしいやり取りのあった高校から約二キロの幹線道路を、男女二人乗りのスクーターがエンジンに悲鳴を上げさせながら疾走していた。

二人とも自衛官用の作業着姿で、帽子のような安物ヘルメットを浅くかぶっている。

「もつと急いでくださいっ」

「それでも全開。がまんして」

二人乗りの後ろから葉月は運転手の杉井をせかすが、いかんせんエンジンが小さくパワーもないのだからどうしようもない。杉井一人で限界のところに成人男性を追加されているのだから、エンジンもいい迷惑だろう。

「そもそも、この格好で入学式行くの？」

「だって、着替えてる時間ないですし……」

「お兄ちゃんも大変だね」

声の指向性を祖力で補助しているから、風とエンジンの音のなかでも二人の会話に支障はなかった。

葉月は年中無休の無愛想に少しだけ照れを含ませた。

「それは、家族ですから」

そう言っと思ひ浮かべるのは、一週間だけの兄妹だったはずの少

女の姿だった。

あの日葉月に届けられたメールに記されていたのは兎季の行き先と、六年前の事件の少女が消えていった闇に隠された真実だった。

神喰い龍に死がせまっていた五年前、葉月の父親は自分の戸籍にその少女を加えていたのだ。葉月がそのことを知らされずに五年を過ごしたのは、秘密裏の改変であったことと、兎季の訓練や葉月の人生を考えると互いに知らないのが一番幸せだと思われていたからだ。

それが何の因果か出会ってしまい、都合とアドリブで作った『兄妹設定』が二人の真実の関係を示していたのだから、それこそ神か悪戯龍のいたずらだと笑いたくなる。

そして、まだ自分に守るべき家族がいることを知った葉月は、兄の役目を果たすために戦場に赴いたのだった。結果的にそれが兎季の危機を救う切り札となったのだから、メールを出したのが今の隊長であることがわかったときは、彼の一人勝ちのようで少しおもしろくないような気もした。

その後は兎季の希望もあって、二人は改めて兄妹として、葉月の研修と事件の事後処理が片付くまで秋の間一緒に暮らした。

そこまでならいい話なのだが、今度は二人がこれからも兄妹であり続けることが問題となり、その結果が今の服装というわけである。「予備自衛官の訓練が、あんなに厳しいものだったって……」

戦技研の研修が終わってからの日々を思い出し、葉月はげっそりと呟く。

研修が終われば、専門学校の卒業式まで葉月はフリーとなる。年が明けるころには、研修期間の仕事が認められて東京の戦技研本部での採用が決まっていたし、卒業制作も終わっていた。それでまったりと東京で運動不足に磨きをかけようとしていた葉月だったが、その幻想を杉井が見事に打ち砕いたわけで。

兎季と兄妹であり続けるというのは、下手をすれば葉月にも危害が及ぶことがあるということだ。しかも、特殊部隊の前隊長の息子

で戦技研のメンバーとなれば、どこかで事件に巻き込まれる可能性はわりと高いと思われた。

もちろん断りたかったが、実際に事件に巻き込まれたあげく全身筋肉痛という醜態をさらしたことを指摘されればぐうの音も出ない。かくして運動不足の理系青年は、お目付役兼自主トレのために参加した杉井と共に五十日間の訓練に臨んだわけだったが、それで終わればまだよかった。

その訓練の終了後、何故か黒岩という神喰い龍のエージェントの元での訓練を一ヶ月ほど追加され、葉月は精根尽き果てた状態で昨日解放されたばかりだった。

対して、同じ訓練を受けていたはずの杉井はちよつと長めの合宿帰りであるかのようにけろっとしていて、目的地である高校への最短距離にハンドルを切った。

「そう？ いい運動だったと思うけど」

「もう絶対やりませんからね、もう嫌ですからね」

秋の事件で見せた気迫はどこへやら、葉月は負け犬根性全開だった。これから三ヶ月ぶりに妹と再会するとは思えない情けなさである。

角を曲がつてすぐ、黒塗りのワゴン車とすれ違った。あまりの猛スピードに葉月も気になって後ろを振り返る、と同時に杉井はハンドルを絶妙に操ると、鋭くUターンした。

危つく振り落とされそうになりながらも、葉月は祖力で自分の体を固定した。そういう素早い反応は約三ヶ月の訓練の賜物だった。

「あつぶな。どうしたんですかっ？」

「あの車、神喰い龍のだよ。たぶん、兎季ちゃんを迎えにきたんじゃない？」

「え、じゃあ、事件？」

「でしようにね」

晴れの高校の入学式にまで事件に振り回されるとは気の毒だが、それも兎季が自分で選んだ道なのだからどうしようもない。

全開のスロツトルに祖力の馬力強化を上乘せすると、車体はグンと前に出た。

「このままついてくよ。兎季ちゃん不在の入学式に行っても仕方ないし」

「そうですね。お願いします」

葉月は、妹との再会に心を躍らせると同時に、嫌な予感が胸をよぎるのを感じた。

このままついていったら、十中八九事件に巻き込まれる上に、自分はい前のようなずぶの素人ではなくなっているから、事件解決に協力させられることはほぼ間違いないだろう。

考えてげんなりとはしたが、つい半年前のような諦観や退廃的な理屈はまったく姿を現さなかった。それは息も絶え絶えになりながらも訓練をやり抜いたことによる自信か、はたまた

「兄さん！」

後部座席の窓から顔を出した兎季のお陰なのか。祖力によって増幅され指向性を持った声が、風とともに耳に染み渡る。

葉月にはそこまで声を飛ばす技能はないため、バランスを取りながら片手を振ると、兎季も窓から身を乗り出して大きく手を振り返してくれた。危険行為で警察に呼び止められそうだったが、互いにそんなことは気にしなかった。

彼女は別れ際からずいぶんと髪が伸びていて、女子の制服も似合っているように見えた。だが少年的な印象はなりを潜めておらず、むしろ窓から身を乗り出して大きく手を振る姿は活発な男の子にかみえない。

「危なっかしくて見てられないね」

肩をすくめるような杉井の言葉は半分自分に向いていたが、それでも葉月は深く頷いた。

「だから、これからは目を離さないでいますよ」

きつと、彼女の前には数多の障害が待ち構えているだろう。それは秋の事件より、あるいは自分がかつて躓き乗り越えられなかった

壁よりも、さらに険しいかもしれない。

葉月が自分の中のいろんなことに決着をつけられたのは、間違いなく兎季のおかげだ。恥ずかしながら一人ではどうしようもなかったことも、あいつがいたからなんとかなった。なら、兎季が苦難に直面するとき、自分が近くにいたいと思う。

「大事な妹ですから」

そう言っただけ無愛想な兄は、はつきりと微笑んだ。

神と崇められ龍と称えられた者たちの神話から、二千年以上を経た現代。

とある歴史学者が『神在り世界』と呼んだ世界の片隅で、神と龍の名を借りた『人の物語』は、再びその幕を開けた。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7192v/>

神在り世界の零龍

2011年8月12日03時17分発行